NECパーソナルコンピュータ
PC-9800シリーズ

Software library

NEC

MS-DOS™ 5.0

ステップアップマニュアル



Software library

MS-DOS™ 5.0

ステップアップマニュアル

ご注意

(1) 本書の内容の一部または全部を、無断で他に転載することは禁止されています。
(2) 本書の内容は、将来予告なしに変更することがあります。
(3) 本書の内容は、万全を期して作成しております。万一、ご不審な点や誤り、記載もれなどお気づきの点がありましたら、ご連絡ください。
(4) 運用した結果の影響については、(3)項に関わらず責任を負いかねますのでご了承ください。

輸出する際の注意事項

本製品(ソフトウェア)は、日本国内仕様であり、外国の規格等には準拠しておりません。本製品は日本国外で使用された場合、当社は一切責任を負いかねます。また、当社は本製品に関し海外での保守サービスおよび技術サポート等は行っておりません。

AT1A1A

はじめに

本書は、MS-DOS バージョン 5.0 を主に DOS プロンプトから操作する人のための入門マニュアルです。

MS-DOS バージョン 5.0(以下 MS-DOS 5.0)の特徴の一つとして、「DOS シェル」が添付されていることが挙げられます。別冊の『さあ始めよう MS-DOS』で解説しているとおり、DOS シェルからはほとんどの MS-DOS の操作を行うことができます。

しかし MS-DOS 5.0 になっても、MS-DOS のコマンドプロンプトから操作できることには変わりありません。そこで本書では、〝コマンドとは〟に代表される MS-DOS の初歩から、これまでのバージョンの MS-DOS(3.3 以下)とどのような差異があるか、そして MS-DOS 5.0 に特有の機能(メモリ管理機能やタスク切り替え機能など)についても取り上げています。

■このマニュアルで何ができるか

本書は、MS-DOS 5.0 をコマンドプロンプトの状態から使うためのマニュアルです。以前のバージョンの MS-DOS をお使いになったことがある方、DOS シェルでは飽き足らない方が、コマンドプロンプトからコマンドを実行したり、日本語を入力したりしながら MS-DOS 5.0 を使いこなせるようになるまでを説明しています。

本書では、MS-DOS やコンピュータに関するある程度の基礎知識(ファイルの概念や、キーボードからの文字の入力法など)があることを前提にしています。MS-DOS に関する経験がまったくない初心者の方は、まず『さあ始めよう MS-DOS』で DOS シェルを使いながら、こうした前提の知識を得るようにしてください。

本書は、6 つの章と 3 つの付録で構成されています。

・第 1 章「コマンドプロンプトでの基本操作」

この章は、MS-DOS のコマンドについての概論です。コマンドとは何か、に始まって、ドライブ名の考え方までを解説しています。すでに以前のバージョンの MS-DOS をお使いで、これらのことを御存知であれば、この章は読まなくてもよいでしょう。

・第 2 章「使いやすい環境をつくる」

この章は、MS-DOS 5.0 をコマンドプロンプトから操作するときに、できるだけ使いやすい操作環境をつくるにはどうしたらよいかを解説しています。

ディレクトリの作成やコマンド検索パスの設定に始まり、誤ってファイルを削除してしまうなどの誤操作に備える方法までを詳しく解説しています。また、MS-DOS の環境を整える設定ファイルである〝CONFIG.SYS〟ファイルについても、ここであつかっています。

・第３章「タスクの切り替え」

この章は、MS-DOS 5.0 の大きな特徴であるメモリ管理機能を生かして、複数の異なるプログラムを同時に起動し、それらを切り替えて使う方法を説明しています。

・第４章「コマンドリファレンス」

この章では、MS-DOS 5.0 で実行できるすべてのコマンドを、MS-DOS コマンド、バッチコマンド、CONFIG.SYS コマンドの３つに分けてできるだけ簡単に説明しています。

MS-DOS コマンドの詳しい解説は、別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』で行っています。

・第５章「日本語入力リファレンス」

MS-DOS 5.0 には、日本語文字や日本語文を入力するためのプログラム「AI かな漢字変換システム」が付属しています。この章では、ひらがなやカタカナの入力法と、漢字変換のしかたを説明しています。

・第６章「スクリーンエディタ」

この章では、MS-DOS 5.0 に付属しているエディタ「sedit」の使い方を説明しています。文字だけでできた比較的短いファイルを手軽に編集できるエディタです。

・付録Ａ「困ったときに開くページ」

ここでは、MS-DOS 5.0 でコマンドを実行するときなどに起きやすいトラブルと、その原因や解決法について説明しています。

・付録Ｂ「目的別索引」

ここは、したいことから引ける索引です。あることをするにはどのコマンドをどう使ったらいいかがわかるようになっています。

・付録Ｃ「用語集」

ここでは、「MS-DOS 5.0 基本機能セット」のマニュアルをお読みになるにあたって必要になるであろう用語を簡単に説明しています。

■その他のマニュアル

また、「MS-DOS 5.0 基本セット」には本書の他に次のマニュアルがあります。

・『マニュアルの読み方』

MS-DOS 5.0 をお使いになる方の知識程度や使用目的によって、基本機能セット内のどの部分をどの順で読めばよいかを説明している小冊子です。必ず初めにお読みください。

・『インストールガイド』

MS-DOS 5.0 のソフトウェアを、お使いのコンピュータの固定ディスクやフロッピィディスクに移して使える状態にする手順、新たに周辺機器を購入したときに必要な設定、アプリケーションプログラムを固定ディスクでお使いになるための準備などを説明したマニュアルです。

・『さあ始めよう MS-DOS』

MS-DOS 5.0 から新たに付属している「DOS シェル」について、重点的に説明したマニュアルです。DOS シェルをどう使えば MS-DOS の基本的な操作ができるかを手順を追って説明しながら、同時に MS-DOS に関する基礎知識も得られるようになっています。

目　次

第１章
コマンドプロンプトでの基本操作

この章では、コマンドプロンプトでの基本的な操作方法をまとめています。また、「内部コマンド」などの、コマンドプロンプトでMS-DOSを使うときに特有な用語についても解説します。

CHAPTER 1

CHAPTER 1

1.1 簡単なコマンド操作 ── コマンドを使ってみる

まず、コマンドプロンプトから実際にコマンドを使ってみましょう。

「コマンド」とは、MS-DOS に対する命令のことです。MS-DOS のコマンドはほとんどが英文字で表わされています。『さあ始めよう MS-DOS』で説明した DOS シェルでは、マウスで画面を操作してコマンドを選びました。コマンドプロンプトではコマンド名をキーボードから入力して MS-DOS に実行を指示します。

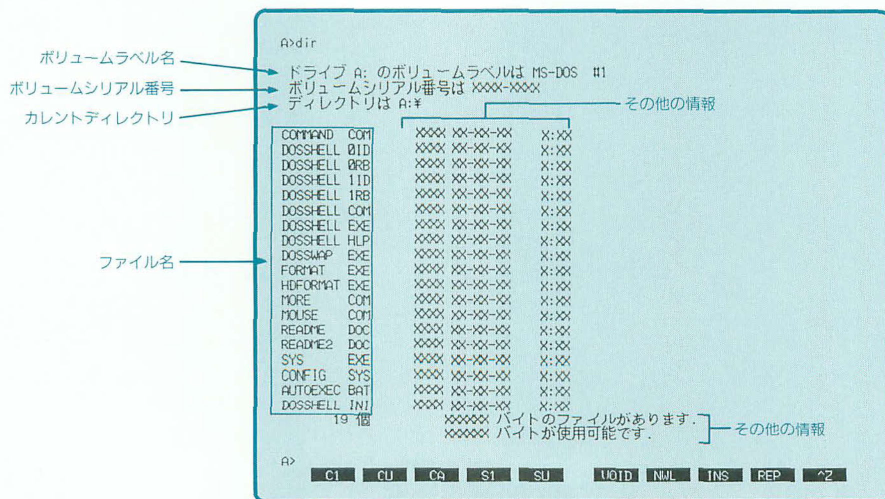
それでは、コマンドの例として〝DIR″コマンドを使ってみましょう。このコマンドは、ディスクに保存されているファイルの名前を画面に一覧表示するものです。次のような順で実行します。

① DOS シェルを実行中なら終了するか、SHIFT ＋ f･9 キーを押して、画面に〝A>″のような MS-DOS のコマンドプロンプトが表示されていることを確かめます。

②コマンド名〝DIR″を、キーボードから入力します。コマンド名の文字は、大文字でも小文字でもかまいません。まちがえたら BS キーで消して、入力し直してください。

綴りを確かめてから ⏎ キーを押します。⏎ キーを押したときから実行されます。

③ファイルなどに関する情報が次々に画面に表示されます。次の例は、表示される情報の先頭と末尾の部分です。



DIR コマンドの実行結果の先頭と末尾の部分(この画面は表示の一例です)。

DIR コマンドで表示される内容

DIR コマンドを実行したときに表示される内容には、次のような意味があります。

〈ボリュームラベル名〉と〈ボリュームシリアル番号〉

最初に表示されているこれらは、そのドライブ(ディスク)に固有に付けられている名前と番号です。ただしボリュームシリアル番号は MS-DOS のバージョン 5.0 から付けられるようになったので、それ以前のバージョンの MS-DOS で初期化したディスクでは表示されません。

〈ディレクトリ〉

表示しているドライブ名とディレクトリ名です。

〈ファイル名〉

続いて表示される各行の、先頭にある 2 組の文字列がファイル名です。実際のファイル名は、〝COMMAND.COM〟や〝ASSIGN.EXE〟のように、左側の文字列(COMMAND など)と右側の文字列(COM など)の間を〝.〟(ピリオド)で区切って表記します。この左側の文字を〝ファイル名の本体〟と呼び、右側の文字を〝ファイル名の拡張子〟(単に拡張子と呼ぶこともあります)と呼びます。

例：

```
        FORMAT.EXE
          ↑      ↑
ファイル名の本体　ファイル名拡張子
```

〈その他の情報〉

DIR コマンドは、ファイル名だけでなく、ファイルに関係のある情報も画面に表示します。たとえば、ファイルの大きさ、ファイルの作成年月日と時刻などです。

また最後には、ファイルの個数、ファイルの大きさの合計バイト数、そのドライブ(ディスク)の空き容量も表示されます。

CHAPTER 1

スイッチとパラメータ

DIR コマンドを始めとする MS-DOS のコマンドの多くは、コマンドに処理させる内容をコマンドの実行と同時に指定することができます。たとえば DIR コマンドは、表示するドライブやディレクトリを指定したり、表示方法を変えるよう指定できます。

●コマンドの書式

DIR コマンドの書式は、次のようになっています(ただし、これは簡略化して書いてあります)。

DIR　[〈ドライブ：〉][〈パス〉][〈ファイル名〉][/P][/W]

〝書式〟というのは、コマンド名をキーボードから入力するときの決まりを、ある決まった書き方で書いたもののことです。上の DIR コマンドの書式は、一見ずいぶん複雑に見えるかもしれませんが、慣れるとともに意味が読み取れるようになるでしょう。この書式は、次のようなことを意味しています。

(1) 〝DIR〟だけ入力しても実行できる([]で囲んであるものは省略できることを意味します)。
(2) 〝/P〟や〝/W〟という文字を付けることができる。
(3) いずれも、指定するならすべてスペースで区切って指定しなければならない。

●パラメータ

書式のうち、〈ドライブ：〉や〈ファイル名〉のことをコマンドに対する「パラメータ」と呼びます。パラメータは、そのコマンドをどのドライブやファイルに対して実行するか、ということを示します。パラメータを付けて DIR コマンドを実行してみましょう。

```
A>dir b:

 ドライブ B: のボリュームラベルは MS-DOS  #3
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

ADDDRV   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
CHKDSK   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
CUSTOM   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
DELDRV   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
DISKCOPY EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
EMM386   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
MEM      EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
NECAI    SYS      XXXX XX-XX-XX    X:XX
PRINT    EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
SEDIT    EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
SETVER   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
SORT     EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
```

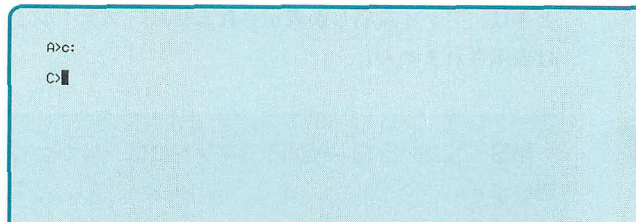
ドライブ B に対して DIR コマンドを実行したところ。

この例では、〝B：〟というパラメータを付けて実行しました。つまり、意味としては、ドライブ B に保存されているファイルの名前を表示しろ、となります。書式で決まっていた通り、コマンドとパラメータの間にはスペース(全角でも半角でもよい)を入れています。

●カレントドライブ

では、最初の例のように"DIR"コマンドだけを入力したときは、いったいどのドライブに対してコマンドを実行したのでしょうか。答えは、「現在着目しているドライブ」です。コマンドプロンプトが"A>"になっているとき、この"A"という文字は現在着目しているドライブの名前を表わしているのです。このようなドライブを特に「カレントドライブ」と呼びます(カレントというのは、"現在の"という意味です)。ですから、カレントドライブを変更して"DIR"コマンドだけを入力すれば、そのドライブに保存されているファイルを表示します。

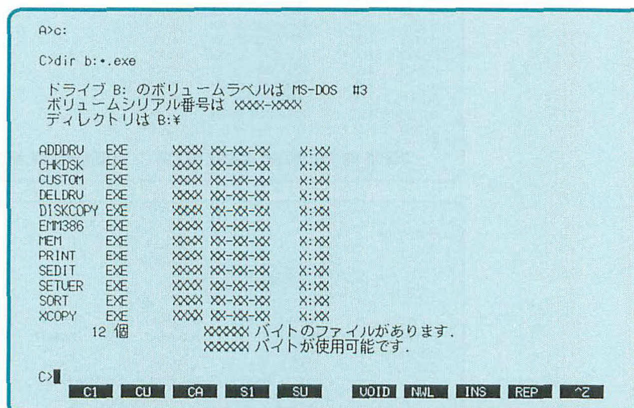
カレントドライブを変更するには、ドライブ名とコロン(:)を付けて入力します。



c:⏎と入力して、カレントドライブをドライブCにした。

この例のようにすると、コマンドプロンプトが"C>"に変わり、カレントドライブが変更されたことがわかるでしょう。カレントドライブを変更する"C:"という文字も1つのコマンドというわけです。

同じように、表示するファイルも指定できます。たとえば、ドライブBにあるファイルのうち拡張子が"EXE"となっているものを表示するには、次のようにします(カレントドライブはドライブAに戻っているとします)。



ドライブBの中で、拡張子が"EXE"のファイルだけを表示した例。

この例は、「ドライブB内で拡張子が"EXE"となっていれば、ファイル名の本体はなんでもいいから表示しなさい」という意味です。ここで、「ファイル名の本体はなんでもいいから」という部分には"*"を使っています。この"*"を「ワイルドカード」と呼ぶのは、『さあ始めよう MS-DOS』でも出てきました。

CHAPTER 1

●スイッチ

さて、DIR コマンドの書式のうち"/P"や"/W"は「スイッチ」と呼びます。コマンドの働き方を変えるための指定なので、この名前が付いています。MS-DOS のスイッチは、スラッシュ(/)とそれに続く文字で表わします。DIR コマンドのこれらのスイッチには、次のような意味があります。

- "/P"は、1 画面分の情報を表示するといったん停止するよう指示するスイッチです。停止しているときに何かキーを押せば表示を続けます。
- "/W"は、1 行に 5 個ずつのファイル名を表示するよう指示するスイッチです。このときは、ファイル名しか表示されません。ファイルごとの大きさや日付、時刻などは表示されません。

注意

MS-DOS 5.0 の DIR コマンドには、じつはもっとたくさんのスイッチがあります。

それぞれスイッチを付けたときには、たとえば次のように実行されます。

```
 ドライブ A: のボリュームラベルは MS-DOS  #1
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは A:¥

COMMAND  COM     XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL 0ID     XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL 0RB     XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL 1ID     XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL 1RB     XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL COM     XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL EXE     XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL HLP     XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSWAP  EXE     XXXX XX-XX-XX    X:XX
FORMAT   EXE     XXXX XX-XX-XX    X:XX
HDFORMAT EXE     XXXX XX-XX-XX    X:XX
MORE     COM     XXXX XX-XX-XX    X:XX
MOUSE    COM     XXXX XX-XX-XX    X:XX
README   DOC     XXXX XX-XX-XX    X:XX
README2  DOC     XXXX XX-XX-XX    X:XX
SYS      EXE     XXXX XX-XX-XX    X:XX
CONFIG   SYS     XXXX XX-XX-XX    X:XX
AUTOEXEC BAT     XXXX XX-XX-XX    X:XX
準備ができたらどれかキーを押してください . . .
█
    C1   CU   CA   S1   SU    UOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

```
A>dir /w

 ドライブ A: のボリュームラベルは MS-DOS  #1
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは A:¥

COMMAND.COM    DOSSHELL.0ID   DOSSHELL.0RB   DOSSHELL.1ID   DOSSHELL.1RB
DOSSHELL.COM   DOSSHELL.EXE   DOSSHELL.HLP   DOSSWAP.EXE    FORMAT.EXE
HDFORMAT.EXE   MORE.COM       MOUSE.COM      README.DOC     README2.DOC
SYS.EXE        CONFIG.SYS     AUTOEXEC.BAT   DOSSHELL.INI
       XX 個          XXXXXX バイトのファイルがあります.
                      XXXXXX バイトが使用可能です.

A>█
```

別々のスイッチを付けて DIR コマンドを実行した例。

複数のスイッチを同時に付けることもできます。たとえば DIR コマンドに"/W"スイッチを付けて実行すれば、1 行に 5 個のファイルを表示できるのですが、それでも 1 画面に入りきらないほどファイルの数が多いときは、"/P"も付けます。

1.2 コマンドと COMMAND.COM

キーボードから入力した文字をコマンドとして解釈し実行するには、それなりのプログラムが必要です。MS-DOS では、システムディスクに入っている"COMMAND.COM"というファイル名のプログラムがそれです。MS-DOS が起動するときには自動的に COMMAND.COM がメモリの中に読み込まれて、入力した文字を解釈・実行しているのです。

COMMAND.COM 自身の中にも、いくつかのコマンドが入っています。これを「内部コマンド」と呼びます。前に出てきた DIR コマンドも内部コマンドの 1 つです。これに対して、「外部コマンド」というものもあり、ディスクにファイルの形で入っています。そのため、ディスクに入っていない外部コマンドは実行できません。MS-DOS をインストールした後のディスクの内容を DIR コマンドで見てみると、拡張子が"EXE"や"COM"となっているファイルがたくさん入っていますね。これらがすべて外部コマンドです。"BAT"となっているファイルは「バッチファイル」といい、これも外部コマンドと同じように実行することができます。バッチファイルについては第 2 章で説明します。

実行したい外部コマンドのファイル名の本体をキーボードから入力すると、COMMAND.COM がその名前のファイルを探し、メモリに読み込んで実行します。

外部コマンドとして、CHKDSK コマンドを実行した例を次に示します。

```
A>chkdsk

ディスク MS-DOS  #1  は 1991-08-14 20:35 に作成されました.
ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX

   XXXXXXX バイト : 全ディスク容量
   XXXXXXX バイト : X 個の隠しファイル
      XXXX バイト : XX 個のユーザーファイル
    XXXXXX バイト : 使用可能ディスク容量

      XXXX バイト : クラスタサイズ
      XXXX 個     : 全クラスタ
       XXX 個     : 使用可能クラスタ

    XXXXXX バイト : 全メモリ
    XXXXXX バイト : 使用可能メモリ

A>█

  C1   CU   CA   S1   SU    VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

外部コマンドの実行例。ディスクの状態を調べる CHKDSK コマンド。

CHAPTER 1

1.3 ファイルをあつかう

MS-DOSであつかうデータは、すべてファイル単位に管理されています。ですから、ファイルをあつかうことはMS-DOSの操作の基本です。ここではファイルをあつかうDIR、TYPE、COPY、DEL、RENの5個のコマンドを紹介します。

DIRコマンド ―― ファイル名を表示する

ファイルを操作するときには、まずドライブにどんなファイルが存在するのかを調べなければなりません。これを調べるコマンドが、前にも紹介したDIRコマンドです。

●カレントドライブ以外のファイル名を表示する

カレントドライブ以外のドライブに保存されているファイルを調べるときは、DIRコマンドの後ろにパラメータとしてドライブ名を指定します。たとえば、カレントドライブがAのときに、ドライブBのファイルを調べるときは、次のようなコマンドを実行します。

```
A>dir b:

 ドライブ B: のボリュームラベルは MS-DOS  #3
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

ADDDRV   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
CHKDSK   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
CUSTOM   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
DELDRV   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
DISKCOPY EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
EMM386   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
MEM      EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
NECAI    SYS      XXXX XX-XX-XX    X:XX
PRINT    EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
SEDIT    EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
SETVER   EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
SORT     EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
XCOPY    EXE      XXXX XX-XX-XX    X:XX
        13 個         XXXXXX バイトのファイルがあります.
                      XXXXXX バイトが使用可能です.

A>
   C1  CU  CA  S1  SU    VOID NWL INS REP ^Z
```

ドライブBのファイル名を表示した。

●特定のファイルを調べる

ファイルの数が多いと、表示の中で特定のファイルを捜し出すのはたいへんです。このとき、もし捜したいファイルのファイル名がわかっていれば、DIRコマンドの後ろにそのファイル名を指定します。たとえば、"COMMAND.COM"というファイルを捜すときは、

```
DIR　COMMAND.COM ⏎
```

と入力します。

指定した名前のファイルがあれば、次のように表示されます。

```
A>dir command.com

 ドライブ A: のボリュームラベルは MS-DOS  #1
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは A:¥

COMMAND  COM       XXXX XX-XX-XX    X:XX
        1 個           XXXXXX バイトのファイルがあります.
                       XXXXXX バイトが使用可能です.

A>█
```

指定したファイル名のファイルがあったときには、そのファイルの情報だけが表示される。

ファイルがないと、次のように表示されます。

```
B>dir command.com

 ドライブ B: のボリュームラベルは MS-DOS  #3
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

ファイルが見つかりません.

B>█
```

指定したファイル名のファイルがなかったときには、見つからないと表示される。

●ワイルドカードを使う

ファイル名の一部しかわからないときは、ワイルドカードを使うと便利です。たとえば、拡張子が"COM"であるようなファイルだけを表示したいときは、

DIR　*.COM ⏎

と入力します。ここでアスタリスク(*)は、任意の文字列(どのような文字が何文字あってもよい)を指定することを意味します。このコマンドを実行すると、画面は次のようになります。

```
A>dir *.com

 ドライブ A: のボリュームラベルは MS-DOS  #1
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは A:¥

COMMAND  COM       XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL COM       XXXX XX-XX-XX    X:XX
MORE     COM       XXXX XX-XX-XX    X:XX
MOUSE    COM       XXXX XX-XX-XX    X:XX
        4 個           XXXXXX バイトのファイルがあります.
                       XXXXXX バイトが使用可能です.

A>█
```

拡張子が"COM"であるようなファイルをすべて表示した例。

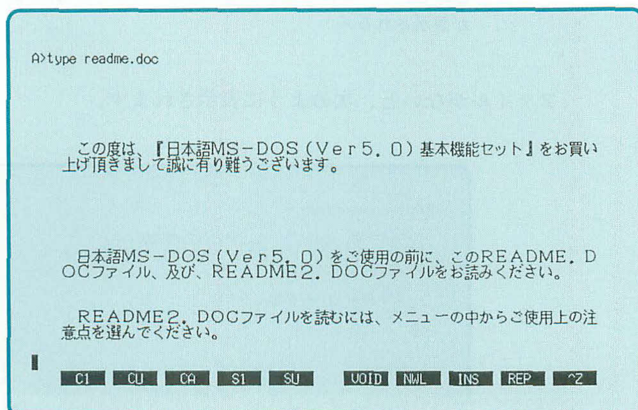
CHAPTER 1

TYPEコマンド ―― ファイルの内容を見る

ファイルの内容を画面に表示するには、TYPEコマンドを使います。TYPEコマンドの後にファイル名を指定すると、その内容を画面に表示します。たとえば、システムディスクに含まれている"README.DOC"の内容を表示するときは

TYPE　README.DOC ⏎

と入力します。実行すると、画面は次のようになります。



ファイル"README.DOC"の内容を表示したところ。

TYPEコマンドは止まらずに表示し続けるので、特定の部分だけを見たいときは画面の表示を一時的に停止しなければなりません。このためには、CTRL キーを押しながら S キーを押します。再開するには、STOP キー以外のいずれかのキーを押します。STOP キーを押すと、TYPEコマンドの実行を終了してコマンドプロンプトが表示されます。

COPY コマンド ―― ファイルをコピーする

ファイルのコピーにはCOPYコマンドを使います。あるファイルを別のドライブにコピーするときは、COPYコマンドの後にパラメータとしてファイル名とドライブ名を指定します。たとえば、カレントドライブにある〝ABC.DOC″をドライブBにコピーするときは、

COPY　ABC.DOC　B：⏎

と入力します。実行した後のドライブBの内容を見てみましょう。

```
A>dir b:

 ドライブ B: のボリュームラベルは DATA
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

ABC      DOC      XXXX XX-XX-XX    X:XX
        1 個          XXXXXX バイトのファイルがあります.
                      XXXXXX バイトが使用可能です.

A>

  C1  CU  CA  S1  SU    VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

コピーした後のドライブBの内容。ファイル〝ABC.DOC″が確かにコピーされている。

この例では、ドライブBに〝ABC.DOC″というファイルがそのままの名前でコピーされました。別のファイル名でコピーしたいときは、そのファイル名も指定します。たとえば

COPY　ABC.DOC　B：ABC.BAK⏎

と入力すると、ドライブBに〝ABC.BAK″というファイル名でコピーされます。

●ワイルドカードを使う

ワイルドカードを使うと、複数のファイルを一度の操作でコピーできます。たとえば、

COPY　A：*.*　B：⏎

と入力すると、ドライブAにあるすべてのファイルをドライブBにコピーできます。ただし、サブディレクトリに含まれているファイルはコピーできません(サブディレクトリについては次の章で解説します)。

CHAPTER 1

同様に、拡張子が〝COM〟になっているファイルをすべてコピーするときは、

COPY　A：*.COM　B：⏎

と入力します。実行すると、画面は次のようになります。

```
A>dir b:

 ドライブ B: のボリュームラベルは DATA
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

ABC      DOC      XXXX XX-XX-XX    X:XX
        1 個          XXXXXX バイトのファイルがあります.
                      XXXXXX バイトが使用可能です.

A>copy a:*.com b:
A:COMMAND.COM
A:DOSSHELL.COM
A:MORE.COM
A:MOUSE.COM
        4 個のファイルをコピーしました.

A>

 C1  CU  CA  S1  SU   VOID NWL  INS  REP  ^Z
```

ワイルドカードでファイルを指定すると、該当するファイル名がコピー中に表示される。

●ファイルを連結する

複数のファイルを連結して1つのファイルにしたいときもCOPYコマンドを使います。連結したいファイルを〝+〟記号でつなげて指定します。たとえば、〝ABC.DOC〟と〝XYZ.DOC〟を連結して、〝NEW.DOC〟というファイルをつくるときは、

COPY　ABC.DOC+XYZ.DOC　NEW.DOC⏎

と入力します。

DELコマンド――ファイルを削除する

DEL(DELete の略)コマンドの後にファイル名を指定すると、そのファイルを削除することができます。〝ABC.DOC〟というファイルを削除するときは、

DEL　ABC.DOC ⏎

と入力します。実行した後で DIR コマンドを実行すると、ファイルがなくなっていることがわかります。

```
B>dir

 ドライブ B: のボリュームラベルは DATA
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

COMMAND  COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
MORE     COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
MOUSE    COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
        4 個          XXXXX バイトのファイルがあります.
                      XXXXX バイトが使用可能です.

B>
```

削除したファイル〝ABC.DOC〟はなくなっている。

MS-DOS 5.0 では、ある条件のもとでは一度削除したファイルを復旧することもできます。これについては次の章で解説します。

●ワイルドカードを使う

ワイルドカードを利用して、一度に複数のファイルを削除することもできます。たとえば、ファイル名の先頭が〝A〟であるようなファイルをすべて削除したいときは、

DEL　A*.* ⏎

と入力します。ワイルドカード〝*.*〟を指定すると、すべてのファイルを削除します。

DEL　*.* ⏎

ただし、この操作はたいへんに危険なので、この場合に限り MS-DOS は次のようなメッセージを表示し、本当に実行してよいか確認します。

```
B>del *.*
ディレクトリ内のすべてのファイルは削除されます!
よろしいですか <Y/N>?
```

〝DEL *.*〟は危険なコマンドなので、警告が表示される。

ここで、そのまま削除するなら Y キー、中止するなら N キーを押し、続けて ⏎ キーを押します。

REN コマンド ―― ファイル名を変更する

ファイル名を変更するときは、REN(REName の略)コマンドを使います。REN コマンドは、変更前のファイル名と変更後のファイル名を指定して実行します。たとえば、〝ABC.DOC〟を〝XYZ.DOC〟に変更するときは、

REN　ABC.DOC　XYZ.DOC ⏎

と入力します。実行すると、次のような画面になります。

```
B>dir

 ドライブ B: のボリュームラベルは DATA
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

ABC      DOC      XXXX XX-XX-XX    X:XX
COMMAND  COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
MORE     COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
MOUSE    COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
        5 個          XXXXXX バイトのファイルがあります.
                      XXXXXX バイトが使用可能です.

B>

   C1  CU  CA  S1  SU    VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

```
B>ren abc.doc xyz.doc

B>dir

 ドライブ B: のボリュームラベルは DATA
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

XYZ      DOC      XXXX XX-XX-XX    X:XX
COMMAND  COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOSSHELL COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
MORE     COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
MOUSE    COM      XXXX XX-XX-XX    X:XX
        5 個          XXXXXX バイトのファイルがあります.
                      XXXXXX バイトが使用可能です.

B>

   C1  CU  CA  S1  SU    VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

表示されている場所は同じだが、ファイル名が変わっている。

第2章
使いやすい環境をつくる

MS-DOSは、かなりの柔軟性を持っています。柔軟性があるというのは、利用する人が自分の好みに合わせた設定ができるということです。こうした設定を行うことをMS-DOSでは、“環境の整備”と呼びます。つまり、より使いやすいシステムをつくるということです。

環境には、ソフトウェア環境とハードウェア環境があります。また、この2つを合わせてシステム環境ということもあります。この章では、ソフトウェア環境を整備する方法について解説します。

CHAPTER

2.1 ソフトウェア環境

一口にソフトウェア環境といっても、その要素はさまざまです。いずれにせよ、環境を整備するとしないとでは、作業効率が大きくちがいますから、できうる限りの整備はするべきでしょう。この章では次の6つの環境整備方法について取り上げます。

1. ディレクトリを上手に管理する
2. パス名とコマンド検索パスの設定
3. コマンドを連続実行する――バッチ処理
4. 削除したファイルを復旧する
5. ディスクの管理
6. デバイスドライバを登録する

2.2 ディレクトリを上手に管理する

DIR コマンドを実行すると、ファイル名やサイズに関する情報が表示されることはすでに述べました。このとき DIR コマンドはひとつひとつのファイルを探してきているのではありません。MS-DOS では、各ファイルに関する情報はひとつの表のようなものでまとめて管理されており、DIR コマンドはその表を参照して各ファイルに関する情報を表示しているのです。

この一覧表を〝ディレクトリ〟と呼びます。ファイルを作成したり更新するたびに、MS-DOS はディレクトリ上の情報も書き替えます。ディレクトリとは、ファイルに関する情報を登録した名簿だと考えればよいでしょう。

CHAPTER 2

ファイルを分割管理する――サブディレクトリ

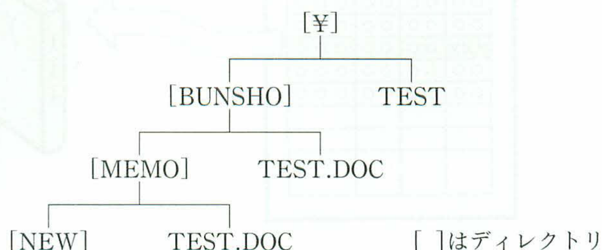
ディスクを初期化した時点では、〝ルートディレクトリ〟と呼ばれるたったひとつのディレクトリがすべてのファイルを管理しています。しかし、これではひとつの本棚にぶ厚い辞典も小さなメモ用紙もいっしょにほうり込んでいるようなもので、ファイルの数が多くなってくると、とても管理しきれません。

そこでMS-DOSでは、ルートディレクトリの中にまたディレクトリを用意することができるようになっています。ファイルを内容や種類に応じて分類して、用意したディレクトリの中に収めます。新しくつくったディレクトリを、元のルートディレクトリに対して〝サブディレクトリ〟と呼びます。

サブディレクトリを利用すると、たとえば同じ仕事に関係する文書ファイルをひとつのディレクトリに集め、コマンドファイルは別のディレクトリにまとめるといったように、内容に応じてファイルを分けて管理できるのです。

管理のレベルを何段階にも分ける――階層ディレクトリ構造

サブディレクトリをつくることができるのは、ルートディレクトリの下だけではありません。サブディレクトリの中に、さらにサブディレクトリをつくることもできます。



この例では、〝BUNSHO〟ディレクトリと〝MEMO〟ディレクトリの両者の中に〝TEST.DOC〟という同名のファイルがあります。MS-DOSでは、このように、ディレクトリが異なっていれば、ひとつのドライブの中に同じ名前のファイルをつくることができます。

複数のユーザーで同じドライブを共有するような場合、各自が専用のディレクトリを用意すれば、それぞれが自由にファイル名を付けることができます。一人でひとつの仕事を行っている場合はファイル名が混乱するようなことはありませんが、何人かが共同で仕事をするときや、いくつかの計画を同時に進行させる場合には、この階層ディレクトリ構造がたいへん役に立ちます。

どのようなディレクトリ構造にするかは個人の好みですが、一般的にはMS-DOSのコマンド用、各アプリケーション用、デバイスドライバ用、文書ファイル用、データファイル用、一時ファイル(一時的に使用するファイル)用のディレクトリをつくります。

また、1つのディレクトリにあまり多くのファイルを入れない(多くても80ぐらい)ようにすることも大切です。特に、よく利用するデータファイルなどは数が多いと探しにくくなります。

ディレクトリをあつかう

ディレクトリをあつかうには、MKDIR(MD)、CHDIR(CD)、RMDIR(RD)、RENDIRの4つのコマンドを使います。

● MKDIRコマンド――ディレクトリをつくる

ディレクトリをつくるには、MKDIR(MaKe DIRectoryの略)コマンドを使います。MKDIRコマンドは"MD"と省略することもできます。MKDIRコマンドの後にディレクトリ名を指定して実行します。たとえば、"BUNSHO"というディレクトリをつくるときは、

MD　BUNSHO ⏎

と入力します。ここでDIRコマンドを実行すると、カレントディレクトリに"BUNSHO"というディレクトリがつくられていることがわかります。

```
B>md bunsho

B>dir

 ドライブ B: のボリュームラベルは DATA
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

TEST              XXXX XX-XX-XX     X:XX
BUNSHO       <DIR>      XX-XX-XX     X:XX
        2 個           XXXXXX バイトのファイルがあります.
                       XXXXXX バイトが使用可能です.

B>█

 C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

指定したディレクトリ"BUNSHO"が作成されている。

● CHDIRコマンド――カレントディレクトリを変更する

前節では"BUNSHO"というサブディレクトリをつくりましたが、そのディレクトリ内で作業するためにはディレクトリを変更する必要があります。ディレクトリを変更するには、CHDIR(CHange DIRectoryの略)コマンドを使います。CHDIRコマンドは"CD"と省略することもできます。"BUNSHO"ディレクトリに変更するには、

CD　BUNSHO ⏎

と入力します。また、現在作業しているディレクトリを確認するには、

CD ⏎

と入力します。現在作業しているディレクトリを特に「カレントディレクトリ」と呼びます。CHDIRコマンドの実行結果を次に示します。

```
B>cd bunsho

B>dir

 ドライブ B: のボリュームラベルは DATA
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥BUNSHO

.            <DIR>      XX-XX-XX    X:XX
..           <DIR>      XX-XX-XX    X:XX
        2 個           XXXXXX バイトのファイルがあります.
                       XXXXXX バイトが使用可能です.

B>cd
B:¥BUNSHO

B>
```

カレントディレクトリを確認したところ。確かに"BUNSHO"ディレクトリにカレントディレクトリが変わっている。

●親のディレクトリに変更する

サブディレクトリの中でDIRコマンドを実行すると、"."と".."というディレクトリが作成されていることがわかります。これは、MKDIRコマンドでディレクトリを作成したときに、ついでに自動的につくられるディレクトリです。それぞれ次のような特別な意味を持っています。

.	カレントディレクトリを示す
..	親ディレクトリを示す

サブディレクトリから親ディレクトリにカレントディレクトリ変更するときは、親ディレクトリ名を指定して変更することもできますが、この".."を利用して、

CD ..⏎

としても変更できます。実行結果を次に示します。

```
 ドライブ B: のボリュームラベルは DATA
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥BUNSHO

.            <DIR>      XX-XX-XX    X:XX
..           <DIR>      XX-XX-XX    X:XX
        2 個           XXXXXX バイトのファイルがあります.
                       XXXXXX バイトが使用可能です.

B>cd ..

B>dir

 ドライブ B: のボリュームラベルは DATA
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

TEST                XXXX XX-XX-XX    X:XX
BUNSHO       <DIR>      XX-XX-XX    X:XX
        2 個           XXXXXX バイトのファイルがあります.
                       XXXXXX バイトが使用可能です.

B>
  C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

カレントディレクトリを親ディレクトリに変えたところ。

●ルートディレクトリに変更する

ルートディレクトリは"¥"と名前が決まっていますので、ルートディレクトリに変更するときは、

CD ¥ ⏎

と入力します。

● RENDIR コマンド ―― ディレクトリ名を変更する

ディレクトリ名を変更するときは、RENDIR(REName DIRectory の略)コマンドを使います。RENDIR コマンドは、変更前のディレクトリ名と変更後のディレクトリ名を指定して実行します。たとえば、"BUNSHO"というディレクトリ名を"DOC"(DOCUMENT の略)に変更するときは、

RENDIR BUNSHO DOC ⏎

と入力します。実行した後で DIR コマンドを実行してみると、画面は次のようになります。

```
B>rendir bunsho doc

B>dir

 ドライブ B: のボリュームラベルは DATA
 ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
 ディレクトリは B:¥

TEST            XXXX XX-XX-XX    X:XX
DOC        <DIR>     XX-XX-XX    X:XX
       2 個          XXXXXX バイトのファイルがあります.
                     XXXXXX バイトが使用可能です.

B>█

    C1   CU   CA   S1   SU     VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

ディレクトリ名が"BUNSHO"から"DOC"に変わっている。

注意

・RENDIR コマンドは外部コマンドですから、"RENDIR.COM"というファイルがカレントディレクトリ、または PATH コマンドで指定したコマンド検索パス(後述)にないと実行できません。
・ルートディレクトリの"¥"、サブディレクトリの中の"."".."などは、MS-DOS が自動的に作成します。ユーザーがこれらのディレクトリ名を変更することはできません。

CHAPTER 2

● RMDIR コマンド ──── ディレクトリを削除する

ディレクトリを削除するときは、RMDIR(ReMove DIRectory の略)コマンドを使います。たとえば、〝DOC〟というディレクトリを削除するときは、

RMDIR　DOC ⏎

と入力します。

RMDIR コマンドは、削除するディレクトリの親ディレクトリから実行します。カレントディレクトリを削除することはできません。

また、削除したいディレクトリの中にファイルやサブディレクトリが存在すると削除できません。このときは、前もってディレクトリ内のファイルやサブディレクトリを削除しておきます。RMDIR コマンドは〝RD〟と省略することもできます。〝DOC〟というディレクトリを削除するときは次の手順で操作します。

① DOC ディレクトリに移る(CD　DOC)。
②ファイルがあれば、それを削除する(DEL　*.*)。
③サブディレクトリがあれば、それを削除する(RD　ディレクトリ名)。
④ DOC の親ディレクトリに移る(CD　..)。
⑤ DOC ディレクトリを削除する(RD　DOC)。

注意

ルートディレクトリの〝¥〟、サブディレクトリの中の〝.〟〝..〟などは、MS-DOS が自動的に作成します。ユーザーがこれらのディレクトリを削除することはできません。

CHAPTER 2

2.3 パス名とコマンド検索パス

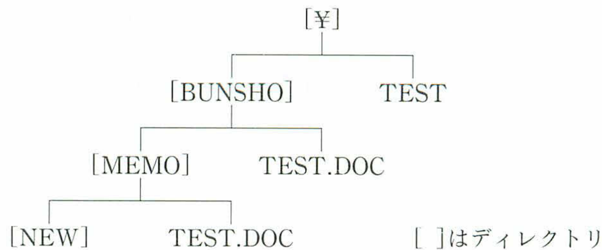
MS-DOSでは、特別に指定しない限りカレントディレクトリにあるファイルをあつかいます。しかし「パス名」を指定すれば、異なるディレクトリに存在するファイルをあつかうこともできます。

パスの指定

パス名とは、目的のファイルやディレクトリに至るまでの経路を"¥"記号で区切りながら並べたものです。一般的な書式で書けば、次のような形式になります。

¥[ディレクトリ名1[¥ディレクトリ名2[¥ディレクトリ名3]]]…

ここで、最初の"¥"だけは区切り記号ではありません。ルートディレクトリを示すことに注意してください。たとえば、次のような構造になっているディレクトリを考えてみましょう。



この図で、BUNSHOディレクトリのパスは"¥BUNSHO"、そのサブディレクトリのMEMOのパス名は"¥BUNSHO¥MEMO"と表現できます。

ディレクトリを操作対象とするコマンド(CHDIR、MKDIRなど)は、すべてパス名でディレクトリを指定することができます。

```
B>mkdir ¥bunsho¥memo¥new
B>chdir ¥bunsho¥memo¥new
B>█
```

ディレクトリ"¥BUNSHO¥MEMO¥NEW"を作成して、そこをカレントディレクトリにしたところ(ディレクトリ"¥BUNSHO"、"¥BUNSHO¥MEMO"があらかじめ作成されていた場合)。

またファイルも、そのファイルがあるディレクトリのパス名と組み合わせて表現できます。〝パス名″で指定できるディレクトリに存在する〝ファイル名″のファイルは、

パス名¥ファイル名

として表わします。たとえば、先ほどのディレクトリ構造で〝¥BUNSHO¥MEMO″ディレクトリの中にあるファイル〝TEST.DOC″は、

¥BUNSHO¥MEMO¥TEST.DOC

というパス名で表わすことができます。この指定方法でファイルをコピーしたり、削除や表示ができます。

絶対パスと相対パス

前の項でパス名を説明したときは、いつもルートディレクトリを起点としたパス名を書いてきました。MS-DOSでは、この表現のパス名を「絶対パス」と呼びます。じつはパス名はカレントディレクトリを起点に表わすこともでき、これを「相対パス」と呼びます。

先ほどのディレクトリ構造で、カレントディレクトリが〝¥BUNSHO″だとします。このとき、ディレクトリ〝¥BUNSHO¥MEMO¥NEW″には

BUNSHO　→　MEMO　→　NEW

という道順で到達できます。そこで、カレントディレクトリ〝¥BUNSHO″からの相対パスでは、

MEMO¥NEW

と表現します。パス名の左端に〝¥″がないことに注意してください。

つまり、ルートディレクトリを必ず起点にして表現するパス名が「絶対パス」、カレントディレクトリを起点にして表現するパス名が「相対パス」です。

相対パスでパス名を指定するときには、親ディレクトリを示す〝..″記号を組み合わせることもできます。たとえば、カレントディレクトリ〝¥BUNSHO¥MEMO¥NEW″から〝¥BUNSHO″へのパスを相対パスで表現すると、

..¥..

と表わすことができます。つまり、親の親ディレクトリというわけです。

コマンド検索パス

MS-DOSの便利な機能の1つに、「コマンド検索パス」を設定する機能があります。コマンド検索パスを設定しておかないと、カレントディレクトリにないコマンドやプログラムは実行することができません。

まず、MS-DOS(のCOMMAND.COM)がコマンドを実行する仕組みを簡単に説明します。MS-DOSは、実行を指示されたコマンドを、次のように検索します。

(1) キーボードから入力された文字を解釈する。
(2) 内部コマンドの名前であれば、すぐに実行する。
(3) 内部コマンドでなければ外部コマンドであると考え、その名前で拡張子が"COM""EXE""BAT"であるファイルをこの順にカレントディレクトリから探す。あればコマンドとして実行する。
(4) カレントディレクトリに一致するコマンドがなければ、「コマンド検索パス」に設定されている各ディレクトリ内で順に(3)と同じ検索をし、見つかれば実行する。
(5) (1)～(4)までで見つからなければ、"コマンドまたはファイル名が違います."とエラーを表示してMS-DOSのプロンプトに戻る。

つまり「コマンド検索パス」は、カレントディレクトリにないコマンドを探す場所の指定のことです。コマンド検索パスを設定しておかないと、内部コマンドかカレントディレクトリにあるコマンドしか実行できないことになります。

参考

バージョン3.3以上のMS-DOSでは、コマンド名の前にドライブ名やパス名を指定すれば、コマンド検索パスに関係なく特定のドライブやディレクトリ内のコマンドを実行できます。

たとえば、ドライブBの"¥BIN"にあるFORMATコマンドは、

```
A>B:¥BIN¥FORMAT ⏎
```

と指定すれば実行できます。

前述したように、コマンドやアプリケーションプログラムは複数のディレクトリに分散して格納するのがふつうです。このようなときは、実行する可能性のあるコマンドが入ったディレクトリのパス名をコマンド検索パスに設定しておけば、絶対パスで指定しなくても実行できます。

CHAPTER 2

コマンド検索パスは、MS-DOSのPATHコマンド(またはSETコマンド)で設定します。それぞれ書式は

```
PATH　[；]|[[〈ドライブ〉：]〈パス〉[；…]]
SET　PATH=[；]|[[〈ドライブ〉：]〈パス〉[；…]]
```

となっています。たとえば、

```
PATH　A：¥；A：¥BIN；A：¥WP；B：¥
```

あるいは、

```
SET　PATH=A：¥；A：¥BIN；A：¥WP；B：¥
```

としておくと、MS-DOSはそのコマンドが内部コマンドでなければ、

(1) カレントディレクトリ
(2) ドライブAのルートディレクトリ
(3) ドライブAの¥BIN
(4) ドライブAの¥WP
(5) ドライブBのルートディレクトリ

の順にコマンドを検索して、最初に見つかったものを実行します。

コマンド検索パスは、MS-DOSを便利に使う上で必要不可欠ともいえる設定です。したがって、設定するPATHコマンドやSETコマンドを"AUTOEXEC.BAT"ファイルに書いておくとよいでしょう。"AUTOEXEC.BAT"については、この次の項で解説します。

2.4 コマンドを連続実行する —— バッチ処理とDOSKEYコマンド

通常の状態でコマンドプロンプトからキーボードで入力しているときは、コマンドは1つずつしか実行できません。DOSシェルでプログラムを登録するときには、一度に複数のコマンドを連続して実行できましたが、COMMAND.COMにはその機能がないのです。

しかしMS-DOSでは、複数のコマンド名を書いたファイルを用意すれば、それを実行することができます。こうしたファイルを「バッチファイル」(または「バッチコマンド」)、バッチファイルでコマンドを連続実行することを「バッチ処理」と呼びます。

また、MS-DOSのDOSKEYコマンドを使うと、コマンドプロンプトで複数のコマンドを連続して実行することもできます。

ここでは、バッチファイルの解説と、その代表例である〝AUTOEXEC.BAT〟、またDOSKEYコマンドについて解説します。

CHAPTER 2

バッチファイルの内容

バッチファイルには、内部コマンド、外部コマンド、アプリケーションのプログラムファイル名など、MS-DOSで実行可能なコマンドならなんでも書くことができます。バッチファイル自身もMS-DOSで実行可能なコマンドですから、これも記述できます。

また、コマンドに付随するパラメータやスイッチも、もちろん書くことができます。

バッチファイルのファイル名と実行方法

バッチファイルのファイル名本体はふつうのファイルと同じ規約に合っていればなんでもよいのですが、拡張子は〝BAT〟でなければなりません。MS-DOSはこの拡張子をバッチファイルである(実行可能ファイルである)と認識するので、ファイル名本体を入力するだけでバッチファイルを実行できます。

たとえば〝JW.BAT〟という名前のバッチファイルをつくったら、コマンドプロンプトから

```
A>JW ⏎
```

とすれば実行できます。もちろん、ファイル〝JW.BAT〟はカレントディレクトリにあるか、コマンド検索パスを設定したディレクトリになければなりません。

バッチファイル名にも、その目的(動作内容)がわかるような名前を付けるようにします。このとき、既存のコマンドと同じ名前を付けないよう注意してください。というのは、MS-DOS(COMMAND.COM)が外部コマンドを探す順序が、バッチファイルがいちばん最後だからです。MS-DOSは指定されたコマンドをまず内部コマンドから探し、内部コマンドになければ拡張子が〝COM〟である外部コマンド、それでも見つからなければ続いて拡張子が〝EXE〟である外部コマンド、最後に拡張子が〝BAT〟で

あるバッチファイルを探すからです。ですから、たとえば〝COPY.BAT〟や〝CHDIR.BAT〟のような名前のバッチファイルは実行されません。外部コマンドのFORMATコマンドが実行できる状態なら、〝FORMAT.BAT〟を実行するには相応の工夫が必要でしょう。

バッチファイルの実行中止

バッチファイルの実行を中止するには、CTRL＋Cキー（またはSTOPキー）を押します。これを押すと、

　　バッチ処理を終了しますか <Y/N>？

というメッセージが表示されます。ここでYキーを押すと、バッチファイルの実行は中止されます。Nキーを押すと、バッチファイル内でCTRL＋Cキーを押したときにたまたま実行中だったコマンドだけが中止され、その次のコマンドから処理が再開されます。

バッチファイルの作成方法

バッチファイルは単に文字だけでできたファイル（テキストファイル）ですから、MS-DOS 5.0に付属するスクリーンエディタ「sedit」で作成できます。また、いつもお使いの日本語ワードプロセッサや市販のエディタでも、作成できます。

注意

一部の日本語ワードプロセッサでは、テキストファイルを作成できないものもあるので注意してください。

「sedit」の操作方法については、本書「第６章　スクリーンエディタ」で詳しく説明しています。

ここで、いくつかバッチファイルの例を見ていきましょう。

例１：

```
CD ¥WPDATA
JW
```

これは、コマンドを実行順に並べただけのもっとも簡単な部類のバッチファイルの例です。まずカレントディレクトリを〝¥WPDATA〟に移動し、次にJWというコマンドを実行しています（JWは説明のための架空のコマンドです）。

例２：

```
CD ¥WPDATA
JW %1
```

これは、バッチファイルにパラメータを指定する使い方の例です。バッチファイルにも、他の一般のコマンドと同じようにパラメータを指定することができます。バッチファイルを実行するときに指定したパラメータは、バッチファイルの中で"%"記号を付けた数字で参照できます。1つ目のパラメータが"%1"、2つ目が"%2"…というように、9つまでのパラメータが使えます。

例2のバッチファイルの名前を"JP.BAT"としましょう。コマンドプロンプトで、

```
JP　BUNSHO.DOC⏎
```

と入力すると、%1(1つ目のパラメータ)は"BUNSHO.DOC"となり実際には、

```
CD　¥WPDATA
JW　BUNSHO.DOC
```

が実行されることになります。

例3：

```
MD　%1
COPY　%2　%1
```

こんどは、2つのパラメータを使ったバッチファイルの例です。1つ目のパラメータはディレクトリ、2つ目のパラメータはファイルであるという前提で、パラメータ1で指定したディレクトリにパラメータ2で指定したファイルをコピーします。このファイル名を"MDCP.BAT"すると、

```
MDCP　DOC　*.DOC
```

は、

```
MD　DOC
COPY　*.DOC　DOC
```

として実行されます。

参考

例３のようにパラメータの種類に前提条件があるバッチファイルは、条件に合わないパラメータを指定するとエラーになったり、おかしな動作をしたりします。
たとえば例３のバッチファイルをまちがえて

```
MDCP *.DOC DOC
```

と実行してしまうと、実際には、

```
MD *.DOC
COPY DOC *.DOC
```

を実行することになります。〝*.DOC〞のようなディレクトリは作成できないので、

ディレクトリは作成できません.

というエラーを表示して実行が中断されてしまいます。

AUTOEXEC.BAT ファイルについて

じつは DOS シェルでは、バッチファイルを作成しなくてもバッチ処理とほとんど同じようなことができます。したがって、主に DOS シェルを使って MS-DOS を操作するのであれば、特にバッチファイルをつくる必要はありません。それでもここで説明する〝AUTOEXEC.BAT〞だけは必要です。AUTOEXEC.BAT ファイルは、バッチファイルの中でも特殊な存在だからです。

AUTOEXEC.BAT ファイルの構造は、他のバッチファイルとなんら変わりません。しかし MS-DOS は、起動時にこの名前のバッチファイルを見つけると、自動的に実行するようになっています（ただし、MS-DOS を起動するドライブのルートディレクトリになければなりません）。ですから、AUTOEXEC.BAT ファイルに各種の初期設定をするコマンド（コマンド検索パスの設定など）や、最初に起動したいアプリケーションのコマンド（DOS シェルを起動するコマンドなど）を記述しておくと便利です。

DOSKEYコマンドについて

DOSKEY コマンドは、MS-DOS のコマンドプロンプトでのコマンドの入力を便利にするためのユーティリティです。DOSKEY コマンドは、いったん実行するとメモリ内に常駐して、複数のコマンドを一度に入力/実行できるようになります。

コマンドラインでコマンド列を入力するときに、区切りに CTRL + T キーを押します(画面には区切りのマークとして"&"が表示されます)。たとえば、次のように入力すると、まず CD コマンドを実行し、続いて DIR コマンドを実行します。

```
CD ¥DOC & DIR *.DOC
```

入力できるコマンドの数には制限がありませんが、1 行の長さが 127 文字までででなければなりません。また、コマンド列の途中でエラーが起きても中断しません。次のコマンドから続けて実行されます。

DOSKEY コマンドにはこの他にも便利な機能があります。他の機能については、「第 4 章　コマンドリファレンス」の DOSKEY コマンドの項か、別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

2.5 削除したファイルを復旧する

MS-DOS に慣れてくると、DEL コマンドで誤ってファイルを削除してしまうような経験をするようになります。大切なファイルのときは、泣くに泣けない気持ちにさえなります。

これまでのバージョンの MS-DOS では、一度削除したファイルは元には戻りませんでした。しかし MS-DOS 5.0 には、いったん削除したファイルを復旧するためのコマンド――UNDELETE と MIRROR コマンド――があります。

この項では、その使い方を解説します。ころばぬ先の杖、覚えておくときっと役に立つでしょう。

CHAPTER 2

UNDELETE コマンド――削除ファイルを復旧する

MS-DOS では、ファイルを削除しても、内容がすべて消えてしまうわけではありません。削除したファイルに削除のマークが付けられるだけで、内容は残っています。しかし、その後で新しいファイルをつくると内容までも失なわれてしまうことがあるので要注意です。

そこで、誤ってファイルを削除してしまったことに気づいたら、他のコマンドやプログラムを実行せずに、すぐに UNDELETE コマンドを実行してください。たとえば〝CONFIG.SYS〟という名前のファイルを消してしまった後ですぐ〝UNDELETE〟コマンドを実行すると、画面には次のように表示されます。

```
A>del config.sys

A>undelete

ディレクトリ: A:¥
ファイル諸元: *.*

    削除追跡ファイルはありません.

    MS-DOS ディレクトリエントリは, 削除されたファイルを    1 個含んでいます.
    その内,      1 ファイルが復旧の可能性があります.

MS-DOS のディレクトリエントリを使用しています.

      ?ONFIG   SYS     XXXX XX-XX-XX  X:XX    ...A  復旧しますか (Y/N)?

  C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

UNDELETE コマンドの実行画面。復旧できる可能性があるファイル名を表示している。

UNDELETE コマンドはディレクトリの内容を検査し、最近削除されたファイルの数と復旧が可能と思われるファイルの数を表示します。もっとも下に表示されている、ファイル名の最初の文字がクエスチョンマーク（?）になったファイルが復旧可能なファイルです。

復旧しますか、と聞いているので Y キーを押します。すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
A>del config.sys

A>undelete

ディレクトリ: A:¥
ファイル諸元: *.*

    削除追跡ファイルはありません.

    MS-DOS ディレクトリエントリは, 削除されたファイルを    1 個含んでいます.
    その内,      1 ファイルが復旧の可能性があります.

MS-DOS のディレクトリエントリを使用しています.

      ?ONFIG   SYS     XXXX XX-XX-XX  X:XX    ...A  復旧しますか (Y/N)?y
      先頭の 1 文字を入力してください. ?ONFIG  .SYS:

     C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

削除したファイルは、ファイル名の最初の文字の情報が失われている。そこで UNDELETE コマンドはユーザーに最初の文字をたずねてくる。

ここで、ファイル名の先頭の文字を入力します。ここでは、"C" と入力します。ファイルが復旧できると、

ファイルは無事に復旧されました.

と表示されます。

複数のファイルを削除した場合は、復旧するかどうかそれぞれのファイルに答えてください。

MIRRORコマンド――削除したファイルを監視する

UNDELETEコマンドでは、削除したファイルが使っていた部分を他のファイルが使ってしまっていると復旧できません。削除したらすぐにUNDELETEコマンドを実行しなければならないのはそのためです。

〝MIRROR〟コマンドは、ファイルを削除したときにそのファイルが入っていた領域を記録して、その領域を使わないようにするコマンドです。UNDELETEコマンドは、その記録を利用してファイルを復旧することができます。

MIRRORコマンドでは、どのドライブに対してファイルの削除を監視するかを〝/T〟スイッチとドライブ名で指定します。このとき、ドライブ名にはコロン(：)を付ける必要はありません。次の例では、ドライブAとドライブBを監視します。

```
MIRROR  /TA  /TB
```

MIRRORコマンドは、一度実行するとメモリの中でつねにファイルの削除を監視します。AUTOEXEC.BATファイルの中に入れておくとよいでしょう。

次の画面は、MIRRORコマンドの実行、ファイルの削除、そのファイルの復旧までの一連の操作を示しています。

```
A>mirror /ta /tb

ドライブ A: にシステム領域のイメージファイルを作成しています.

削除追跡ソフトウェアを組み込みます.

下記のドライブをサポートしています:
Drive A - 既定ファイルをセーブしました.
Drive B - 既定ファイルをセーブしました.

組み込みは完了しました.

A>del config.sys

A>undelete

ディレクトリ: A:¥
ファイル諸元: *.*

    削除追跡ファイルは, 削除されたファイルを   1 個含んでいます.
    その内,       1 ファイルは全クラスタが有効です,
                  0 ファイルはクラスタの一部が有効です,
                  0 ファイルは有効なクラスタがありません.

    MS-DOS ディレクトリエントリは, 削除されたファイルを   1 個含んでいます.
    その内,       1 ファイルが復旧の可能性があります.

削除追跡ファイルを使用しています.

      CONFIG   SYS     XXXX XX-XX-XX  X:XX    ...A  削除済: XX-XX-XX  X:XX
このファイルの全てのクラスタが有効です. 復旧しますか (Y/N)?
    C1   CU   CA   S1   SU     VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

MIRRORコマンドに監視させてファイルを削除・復旧する例。MIRRORコマンドに監視させれば、削除したファイルをUNDELETEコマンドで復旧するときにファイルの先頭の文字を入れる必要がない。

2.6 ディスクの管理

フロッピィディスクは、熱や磁気に強くありません。またジュースやコーヒーをフロッピィディスクの上にこぼしたりすると、内容が読み取れなくなることもあります。こうした事故を未然に防ぐために、MS-DOSのシステムディスクや大事なファイルの入ったフロッピィディスクは、その複製(コピー)をつくっておくとよいでしょう。

個々のファイルをコピーするだけなら、第1章で紹介したCOPYコマンドを使えばよいのですが、フロッピィディスクをまるごとコピーするなら〝DISKCOPY〟コマンドを使うと便利です。

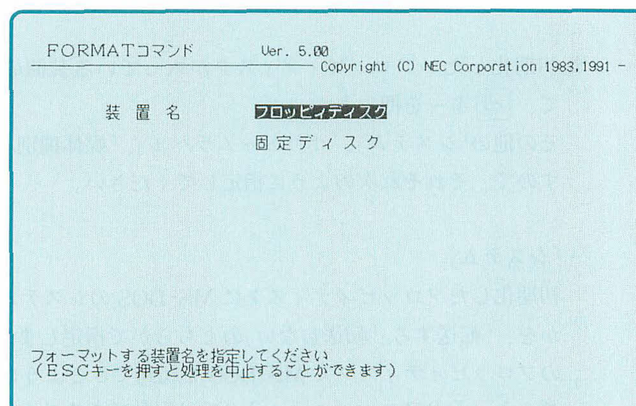
また、購入したばかりのフロッピィディスクを使用可能にする〝FORMAT〟コマンド、誤ってFORMATコマンドを実行してしまったフロッピィディスクをもとの状態に戻す〝UNFORMAT〟コマンドを説明します。

FORMATコマンド ——— フロッピィディスクを使用可能にする

購入したばかりのフロッピィディスクは、そのままでは使用できないものがほとんどです。これをMS-DOSで使えるようにするには、まず〝FORMAT〟コマンドで「初期化する」あるいは「フォーマットする」などと呼ばれるような作業が必要です。

MS-DOSのプロンプトが出ている状態からフロッピィディスクを初期化する手順は、次のようになります。

①〝FORMAT〟と入力して[⏎]キーを押すと、画面は次のようになります。



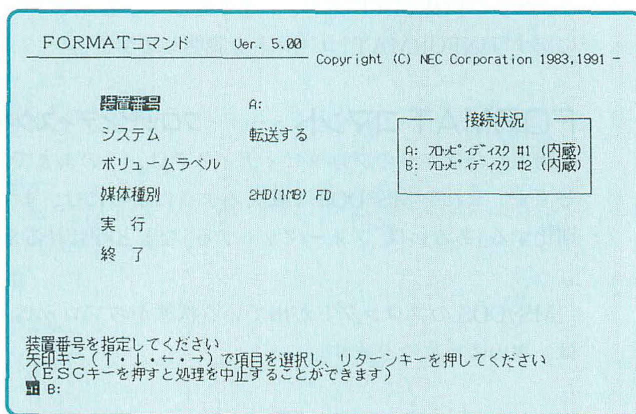
スイッチを何も指定しなかったので、フロッピィディスクか固定ディスクのどちらのディスクを初期化したいのかを、まずたずねてくる。

注意

ただし、この画面は固定ディスクが接続あるいは内蔵している場合の画面です。固定ディスクのないシステムではこの画面は表示されず、次の画面から表示されます。

このようなメニュー画面では、どこかしら反転しているところがあります。この画面では下の方に反転している箇所があります。キーボードの[↑][↓][←][→]キーを押すと反転表示が動きますから、希望の選択肢を反転させて[⏎]キーを押すとその選択肢を選択することができます。

ここではフロッピィディスクを初期化したいので、「フロッピィディスク」の表示を反転して[⏎]キーを押してください。画面は次のようになります(固定ディスクがつながっていないシステムでは、この画面が最初に表示されます)。



前の画面でフロッピィディスクを選ぶと、どのドライブのディスクをどのように初期化したいかをたずねてくる。

②初期化したいフロッピィディスクが入っている装置の番号(ドライブ名)を指定して、[⏎]キーを押します。

その他の「システム」、「ボリュームラベル」、「媒体種別」は、[↑][↓]キーで移動しますので、それぞれ次のように指定してください。

・「システム」

初期化したフロッピィディスクにMS-DOSのシステムファイルを転送するかどうかを、「転送する」「転送しない」のどちらかで指定します。「転送する」を選ぶと、そのフロッピィディスクでMS-DOSを起動できるようになります。「転送しない」を選ぶと、そのフロッピィディスクでは起動できません。どちらを選んでもかまいませんが、単にデータを入力するだけのフロッピィディスクや、DISKCOPYの準備のために初期化しているフロッピィディスクでは、「転送しない」を選んだ方がよいでしょう。

・「ボリュームラベル」

「ボリュームラベル」は、そのフロッピィディスクの名前です。必要があれば入力してください。

参考

ボリュームラベルを付ける/付けないにかかわらず、フロッピィディスクの外側には内容を示すラベルを貼るとよいでしょう。

・「媒体種別」

初期化しようとしているフロッピィディスクの種類を指定します。これを反転表示すると、初期化できるフロッピィディスクの種別が表示されるので、そこから選んでください。

③各項目に必要な指定をしたら、「装置番号」で指定したドライブに初期化したいフロッピィディスクをセットしてください。

注意

初期化が始まると、そのディスクの内容は消えてしまいます。よく確認してからセットしてください。

④セットしたら、画面の「実行」を反転表示させて ↵ キーを押します。これで初期化が始まります。

⑤しばらくすると(グラフが100%に達すると)初期化が終わります。

再度続けて別のフロッピィディスクを初期化することもできます。

UNFORMATコマンド —— 誤って初期化したディスクを復元する

FORMATコマンドでフロッピィディスクを初期化したり、固定ディスクの領域を解放すると、もとの内容はすべて消えてしまいます。MS-DOSの前のバージョンまでは、誤って初期化してしまったフロッピィディスクや、誤って領域を解放してしまった固定ディスクはもとに戻すことができませんでした。

しかしMS-DOS 5.0では、一定の条件のもとでならこれらのディスクをもとの状態(FORMATコマンドで処理する前の状態)に戻すことができます。

・初期化したフロッピィディスクの復元

先に説明したUNDELETEコマンドと同じく、MIRRORコマンドと組み合わせて実行すると確実に復元することができます。MIRRORコマンドで作成した情報ファイルには初期化前のフロッピィディスクの情報が記録されているので、これをもとに復元します。

CHAPTER 2

MIRROR コマンドを併用していないとき(MIRROR コマンドの作成したファイルが使用できないとき)は、フロッピィディスクにもともと入っていた内容に関する情報の痕跡を調べながら復元します。この場合は、MIRROR コマンドを併用した場合に比べて完全に復旧できる割合が少なく、またファイル名も元通りにならないことがあります。

・解放した固定ディスクの領域の復元

固定ディスクの領域を誤って解放してしまったときは、MIRROR コマンドを"/PARTN"スイッチを付けて実行していないと復元できません。ただし、解放して未使用領域になった場所に、重ねて別の領域を確保してしまった後では復元できません。

UNFORMAT コマンドや MIRROR コマンドについてより詳しくは、「第4章　コマンドリファレンス」の該当する項か、別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

DISKCOPY コマンド――ディスクをまるごとコピーする

ディスクをまるごとコピーするには、DISKCOPY コマンドを使うのが便利です。DISKCOPY コマンドは、送り側のディスクの内容をそっくりそのまま受け側のディスクに移します。したがって、受け側のディスクに入っていた内容は消えてしまいますので注意してください。

また、まるごとコピーする関係上、送り側のディスクの種類と受け側のディスクの種類(容量)が同じでなければなりません。

DISKCOPY コマンドでディスクをまるごとコピーする手順は次のとおりです。

① MS-DOS のプロンプトが出ている状態で、"DISKCOPY"と入力して ⏎ キーを押します。これで、画面は次のようになります。

```
 DISKCOPYコマンド      Ver. 5.00
─────────────────────── Copyright (C) NEC Corporation 1983,1991 -

        機 能            コピー
                                          ── 接続状況 ──
        送り側ドライブ    A:              A: フロッピィディスク #1 (内蔵)
        受け側ドライブ    B:              B: フロッピィディスク #2 (内蔵)
        実 行
        終 了

機能を指定してください
矢印キー(↑・↓・←・→)で項目を選択し、リターンキーを押してください
(ESCキーを押すと処理を中止することができます)
コピー   照 合
```

スイッチを何も指定しなかったので、DISKCOPY コマンドのメニュー画面が現れる。

ここでの操作もFORMATコマンドと同様に、カーソルキーで必要な項目とその内容を選択します。

②「機能」には「コピー」と「照合」の2つがあります。ここではコピーするのですから「コピー」を選び、[⏎]キーを押します。
「照合」は2枚のディスクを比較するだけで、コピーは行いません。

③「送り側ドライブ」と「受け側ドライブ」に、どのドライブからどのドライブにコピーするのかを指定します。受け側に指定したディスクの内容は送り側のディスクとまったく同じに書き替えられてしまいますので、よく確認してからセットします。

④それぞれのドライブにディスクをセットしてください。送り側と受け側のディスクをとりちがえないよう、よく確認してください。
このとき、それぞれのディスクは同じ種類(2HD、2DDなど)でなければなりません。

⑤ディスクをセットしたら、画面の「実行」を反転表示して[⏎]キーを押します。これで、しばらくするとコピーが終わります。終わったら、再度続けて別のフロッピィディスクをコピーすることもできます。

2.7 デバイスドライバを登録する

「デバイス」は装置のこと、「ドライバ」はそれを駆動するソフトウェアのことです。「デバイス」の中には後で購入した周辺機器も入りますし、キーボードやディスプレイといった最初から接続されているもの、メモリなどの本体内部に入っているものも含まれます。

デバイスドライバと呼ばれるソフトウェアは、MS-DOSのシステムディスクにいくつか入ってきますし、市販のアプリケーションに付属していることもあります。そのうちもっともよく使われるのは、〝日本語フロントエンドプロセッサ〟と呼ばれるデバイスドライバでしょう。これがなければ、日本語の入力ができないので、誰でも利用します。

デバイスドライバの登録

デバイスドライバは、外部コマンドなどとちがってそのまま実行できるものではありません。実行するというよりも「組み込む」もので、組み込む先のファイルも〝CONFIG.SYS〟というファイル名と決まっています。CONFIG.SYSファイルは、MS-DOSを起動するドライブのルートディレクトリになければなりません。

MS-DOSは起動したときに、このCONFIG.SYSの内容を読み込んで、そこに書かれている指定にしたがってデバイスドライバを組み込みます。ですから、新しいデバイスドライバが必要になったら、CONFIG.SYSファイルを新たにつくるか、変更しなければなりません。CONFIG.SYSファイルは文字だけでできたテキストファイルなので、日頃お使いのエディタや日本語ワードプロセッサ、またはMS-DOSに付属している「sedit」などのスクリーンエディタで変更することができます。

MS-DOSには、CONFIG.SYSファイルを簡単に作成/更新するための専用のコマンドもあります。〝CUSTOM〟コマンドがそれです。

CUSTOMコマンドでCONFIG.SYSファイルを変更する手順については、別冊の『インストールガイド』の「2.8　CUSTOMコマンドの使い方」を参照してください。

第３章
タスクの切り替え

この章では、MS-DOS の大きな特徴であるメモリ管理機能を生かして、DOS シェル上で複数の異なるプログラムを実行し、切り替えて使う方法を説明します。

CHAPTER

3

3.1 タスクとは

タスクとは、コンピュータ上で実行している一つ一つのプログラム(アプリケーション)のことです。

MS-DOS 5.0 の DOS シェルでは、同時に複数のタスク(アプリケーション)を動作させて、各タスクを切り替えながら使用することができます。

複数のタスクが実行されているときも、実際に働いているのは「アクティブ」なタスクだけです。他の「インアクティブ」な(アクティブでない)タスクは、一時的に実行を中断して止まっています。

タスクを切り替えることを「タスクスイッチング」や「タスクスワップ」、動作中のタスクを「フォアグラウンドのタスク」ともいいます。

タスク切り替え機能を使うためのハードウェア

MS-DOS 5.0 では、MS-DOS 5.0 が動作しさえすればどんな状態のハードウェアでもタスク切り替え機能を使うことができます。ただし、固定ディスクの空き領域が多いほど、CPU の機能が高いほど、タスクの切り替え速度が向上し、同時により多くのタスクを実行できるようになります。

フロッピィディスクから DOS シェルを起動した場合には、タスク切り替え機能はお勧めできません。

3.2 タスク切り替え機能を使う

MS-DOS 5.0 の DOS シェルでは、初期状態ではタスク切り替え機能を使えません。そこでここでは、タスク切り替え機能を使えるようにする手順から始め、複数のタスクを実行する方法、アクティブタスクを切り替える方法などを説明します。

タスク切り替え機能をオンにする

DOS シェルでタスク切り替え機能を使うには、まず[タスク・スワップ・オン]コマンドを実行しなければなりません。

①メニューバーの[オプション]メニューを選択します。

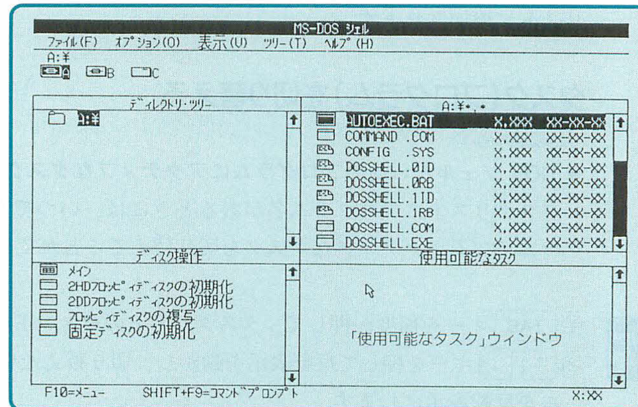


f·10 キーを押してから、← → キーで[オプション]メニューを反転させて ⏎ キーを押します。または GRPH + O キーを押します。



[オプション]メニューをクリックします。

②プルダウンメニューから[タスク・スワップ・オン]を選択します。
画面が次のように変わります。



タスク切り替え機能が使えるようになると、新しく「使用可能なタスク」ウィンドウが現れる。

[オプション]メニューの[タスク・スワップ・オン]コマンドの左にはアスタリスク(*)が表示されます。

画面の右側に現れた新しいウィンドウは、「タスクリスト」と呼ばれるものです。タスクリストには、現在の切り替え可能なタスクの一覧が表示されます。

タスク(プログラム)を起動する

タスク切り替え機能がオンになっているときには、2 つの方法でタスク(プログラムやアプリケーション)を起動することができます。

●プログラムをアクティブな状態で起動する方法

DOS シェルから通常の方法でプログラムを起動して、そのタスクをアクティブにする方法です。起動したタスクをインアクティブにすれば、続いて他のタスクを起動することができます。

プログラムを起動する手順については、『さあ始めよう MS-DOS』の「プログラムを起動!」を参照してください。

●プログラムをタスクリストに直接入れ、インアクティブな状態で起動する方法

DOS シェルから起動したプログラムをすぐに実行せず、インアクティブなタスクとしてタスクリストに加える方法です。画面上では引き続き DOS シェルがアクティブになっています。



起動したいプログラム名(または関連付けられているファイル名)を選択して、SHIFT ＋ ⏎ キーを押します。



SHIFT キーを押しながら、起動したいプログラムファイル名(または関連付けられているファイル名)をダブルクリックします。

これで、起動したプログラムはすぐには実行されず、プログラムタイトルがタスクリストに追加されます。

タスク(プログラム)を切り替える

● DOS シェルから他のプログラムにアクティブなタスクを切り替える

タスクリストにプログラム名があるときには、いつでも DOS シェルからどのプログラムにでもアクティブなタスクを切り替えることができます。



① TAB キーを何度か押して、タスクリストのウィンドウをアクティブにします。
② ↑ ↓ キーを押して反転表示を動かし、切り替えたいタスクのプログラムタイトルを反転表示にします。
③ ⏎ キーを押します。



タスクリストに表示されているタスクのプログラムタイトルのうち、切り替えたいものをダブルクリックします。

●プログラムからDOSシェルに切り替える

どのようなタスクがアクティブなときも、CTRL＋ESCキーを押すとDOSシェルの画面に戻る(DOSシェルをアクティブにする)ことができます。

● 3つ以上のタスク間で切り替える

GRPH＋ESCキーを押すと、そのときにアクティブなタスクの次のタスクに(タスクリストの上から下方向に)切り替えることができます。SHIFT＋GRPH＋ESCキーは、そのときにアクティブなタスクの前のタスクに(タスクリストの下から上方向に)切り替えます。ただしどちらも、DOSシェルがアクティブになった時点で切り替えられなくなります。

またGRPH＋TABキーを押すと、そのときに起動されているすべてのタスクを順番に(タスクリストの上から下方向に)切り替えることができます。SHIFT＋GRPH＋TABキーを押すと、そのときに起動されているすべてのタスクを順番に(タスクリストの下から上方向に)切り替えることができます。

また、タスクを連続的に切り替えることもできます。一度GRPH＋TABキーを押してTABキーだけを離すと、切り替え可能な次のタスクのタイトルが画面の最上部に表示されます。切り替えたいタスクが表示されたらGRPHキーを離してください。GRPHキーを離さないままTABキーだけ押していくと、切り替え可能なタスクのタイトルが次々に表示されるので、希望のタスクが表示された時点でGRPHキーを離してください。SHIFT＋GRPH＋TABキーも(切り替えられる方向は逆になりますが)同じ効果があります。

参考

DOSシェルから実行するアプリケーションプログラムに、CTRL、GRPH、SHIFTキーと文字キーを組み合わせた特別なキー操作を割り当てることができます。このキー操作を「アプリケーションショートカットキー」といいます。

アプリケーションショートカットキーは、アプリケーションを登録する際の[追加プログラム]ダイアログボックスで指定できます。[アプリケーション・ショートカット・キー]テキストボックスにカーソルを移して、アプリケーションショートカットキーにしたいキー操作をそのままどしてください。キー操作名が表示されます。

こうしてアプリケーションショートカットキーを登録しておくと、どんなアプリケーションがアクティブなときにでも瞬時にそのアプリケーションに切り替えることができます。ただし、そのキーに元来割り当てられていた働き(たとえばGRPH＋Fキーで[ファイル]メニューが選ばれるなど)はできなくなります。

また、複数のアプリケーションに同じアプリケーションショートカットキーを割り当てると、実行された時点が近い方が選択されます。

CHAPTER 3

タスクを終了する

タスクリスト内のタスクは、DOS シェルから終了させることはできません。いったんそのタスクをアクティブにして、プログラムによって決まっている正しい方法で終了させてください。

注意

DOS シェルからタスクリスト内のタスクを選択して[ファイル]メニューの[削除]コマンドを選ぶか DEL キーを押すと、強制的に終了させることもできます。ただしその後の DOS シェルの動作が不安定になる可能性があります。プログラムが暴走するなどして決められている方法で終了できなくなったときなど、どうしても必要なとき以外はなるべく実行しないでください。

CHAPTER 3

第４章
コマンドリファレンス

この章では、MS-DOS 5.0の「基本機能セット」に含まれているソフトウェアの機能や書式についてのリファレンスです。より詳細は別売の「拡張機能セット」に含まれている『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

また MS-DOS 5.0の実行可能なコマンドはどれも、〝/?〟スイッチを付けて実行すると簡単なヘルプメッセージが表示されるようになっています。この章では各コマンドの書式やオプションスイッチについては書いていませんので、〝/?〟スイッチによるメッセージを参考にしてください。

CONFIG.SYS のコマンドは〝/?〟スイッチによるメッセージが表示されませんから、この章でも書式などを書いてあります。

CHAPTER 4

4.1 MS-DOS コマンド

この項では、MS-DOS の内部コマンド、外部コマンドを解説します。書式は"/?"スイッチを付けて実行したときに画面に表示される情報や、別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』で確認してください。

また、一部取り上げていないコマンドもあります。スクリーンエディタ「sedit」については「第 6 章　スクリーンエディタ」を参照してください。

以降で、各コマンドについて詳しく解説します。なお、コマンド名の上には、そのコマンドが内部コマンドか外部コマンドかが書いてあります。また、コマンド名の下に「NET」の表示があるコマンドは、ネットワークに接続されたドライブ(ドライブ上のファイル)に対しては使用できません。

外部コマンド

ADDDRV

機　能　キャラクタ系デバイスドライバを組み込みます。

解　説　ADDDRV コマンドで組み込めるデバイスドライバは、キャラクタ系デバイスドライバだけです。MS-DOS 5.0 のシステムディスク内に入っているデバイスドライバでは次のものが該当します。

NECAIK1.DRV
NECAIK2.DRV（AI かな漢字変換ドライバ）
RSDRV.SYS　（RS-232C ドライバ）
PRINT.SYS　（プリンタドライバ）
MOUSE.SYS　（マウスドライバ）
GRAPH.SYS　（グラフィックスドライバ）
FONT.SYS　（フォントドライバ）

このコマンドを使用する場合は、あらかじめ新たに組み込みたいデバイスドライバ名を列挙した「定義ファイル」を用意する必要があります。

定義ファイルには、CONFIG.SYS のコマンドである DEVICE コマンドで使用したいデバイスドライバを記述します。

<例>

RSDRV.SYS と PRINT.SYS を新たに組み込みたい場合、次の 2 行を記述したファイルを用意します（ここでは、このファイル名を〝OUT.DEV〟とします）。

```
DEVICE=RSDRV.SYS
DEVICE=PRINT.SYS
```

〝OUT.DEV〟ファイルをカレントディレクトリに置き、コマンドラインから次のように入力すると、2 つのドライバが組み込まれます。

```
ADDDRV　OUT.DEV
```

注　意

- キャラクタ系デバイスドライバが動作中(たとえば、日本語入力モードになっているとき)は、使用することができません。その場合は、以前に ADDDRV コマンドで組み込んだデバイスドライバを、DELDRV コマンドで取り外しておいてください。
- ADDDRV コマンドは、他のプログラムの子プロセスとして実行することはできません。
- PRINT コマンドによる印刷中は、ADDDRV コマンドを実行することはできません。

関連コマンド

DELDRV、MEM

外部コマンド

APPEND

機　能　データファイルの検索パスの設定と表示を行います。

解　説　コマンドの実行対象となるファイル(データファイル)を検索する順序(データファイル検索パス)を設定する常駐プログラムです。通常、データファイル名を伴ったコマンドの処理時に、ファイル名にパスを付けないで指定すると、データファイルの検索はカレントディレクトリのみを対象とします。しかし、APPENDコマンドを使用してデータファイル検索パスを設定した場合は、このパスも含めてデータファイルの検索を行います。

データファイル検索パスは、セミコロン(;)で区切ることで複数設定することができます。

"/R"スイッチを付けて実行すると、常駐部分をメモリから解放します。

<例>

データファイル検索パスをカレントディレクトリ、ドライブAの"¥DOC"、ドライブBの"¥WORK¥JOB"の順に設定する

```
APPEND  A：¥DOC；B：¥WORK¥JOB
```

データファイル検索パスを解除するには、次のように入力します。

```
APPEND ；
```

注　意

- ASSIGNコマンドと併用する場合は、必ずAPPENDコマンドを先に実行してから、ASSIGNコマンドを使用してください。
- データファイル検索パスを設定しておくと、エディタなどでカレントディレクトリに存在しないファイルを読み込むことができます。しかし、更新したファイルをセーブした場合、そのファイルはカレントディレクトリに保存されます。元のファイルがカレントディレクトリになかった場合は更新されません。
- カレントディレクトリに同じ名前のファイルがあった場合はそちらが優先されます。

関連コマンド　ASSIGN、PATH、INSTALL(CONFIG.SYSのコマンド)

外部コマンド

ASSIGN

機　能

MS-DOSの論理装置名に任意の物理装置名を割り当てます。また、ドライブ名を別の任意のドライブ名に割り当てることもできます。

解　説

論理装置に物理装置を割り当てる場合は、「論理装置＝物理装置」と指定します。

出力できる論理装置に物理装置〝ダミー〟(DYまたはDUMMY)を割り当てると、実際の出力は行われません。

論理入力装置のCI、AIには、KEYBOARD、RS232C-0、RS232C-1、RS232C-2の物理装置の中からいずれか1つを割り当てることができます。

論理出力装置のCO、AO、PRには、SCREEN、PRINTER、RS232C-0、RS232C-1、RS232C-2の物理装置の中から最大4つまでを割り当てることができます。複数の装置を割り当てるときは、物理装置名をスペース(空白)で区切って指定します。

パラメータを省略してASSIGNコマンド実行するとメニュー画面が表示され、この画面で設定することもできます。このときは画面に表示されるメッセージにしたがって操作してください。

注　意

・ドライブに異なるドライブ名を割り当てると、実際のドライブ情報を要求するコマンドに対して本当のドライブを隠してしまいます。したがって、PRINTコマンド、BACKUPコマンドを使う場合、あるいは通常のMS-DOSの操作をする場合などは、特別な事情がない限りASSIGNコマンドは使用しない方がよいでしょう。
・DISKCOPYコマンドは、どのようにドライブが割り当ててあっても無視します。
・ASSIGNコマンドによって割り当てられたドライブに対して、FORMATコマンドによる初期化はできません。
・RS-232C拡張ボードが接続されていないときは、拡張ポート(RS232C-1、RS232C-2)に論理装置を割り当てることはできません。
・ドライブの指定/解除をするには、〝MSASSIGN.COM〟にコマンド検索パスが設定されていなければなりません。
・割り当てることのできるドライブ名は、MS-DOS起動時に接続されているドライブに限ります。

外部コマンド

ATTRIB

機　能

ファイルに対して、4つの属性(アトリビュート)の設定または解除ができます。また、指定したファイルの属性を表示します。

解　説

ATTRIBコマンドは、ファイルにさまざまな属性を設定したり解除したりするコマンドです。

<例>

カレントドライブの拡張子が〝.DOC〞のファイルすべてにリードオンリー属性を設定する

```
ATTRIB  +R  *.DOC
```

ファイルの属性を表示するときは、スイッチを付けずに属性を表示したいファイル名だけを指定します。

表示されているファイル名の前に〝R〞が付いていればリードオンリー属性、〝A〞が付いていればアーカイブ属性、〝S〞が付いていればシステム属性、〝H〞が付いていれば不可視属性が設定されていることを表わします。

関連コマンド

BACKUP、RESTORE、XCOPY

外部コマンド

BACKUP

機　能

ディスクのバックアップを作成します。特に、固定ディスクの内容をフロッピィディスクに保存するときに有効です。

エラーレベル

0　正常終了
1　バックアップするファイルが見つからない
2　ファイル共有に関する競合があったため、バックアップされなかったファイルがある
3　ユーザーによって中止された
4　エラーによって中止された

解　説

BACKUP コマンドは、おもに固定ディスクなどの大容量ディスクの内容を、安全のためにフロッピィディスクに分けて保存するためのコマンドです。

送り側には、固定ディスクなどのドライブ名、ファイル名、パス名のいずれか、あるいはそれらを組み合わせたものを指定します。受け側のドライブにはフロッピィディスクドライブ名を指定します。

送り側のファイル量が多くて1枚のフロッピィディスクに入りきらない場合は、受け側のディスク交換の指示が出ます。指示にしたがってフロッピィディスクを入れ替えてください。

正常にバックアップを終了した送り側のファイルのアーカイブ属性は自動的に解除されます。

<例>

ドライブAのルートディレクトリをはじめ、すべてのサブディレクトリ内のファイルまでを、すべてドライブCにバックアップする

```
BACKUP　A:¥　C:/S
```

注　意

- /A スイッチを指定しないと、受け側のディスクにあるファイルはあらかじめすべて削除されます。
- バックアップされたファイルには、先頭にバックアップのための管理情報が付加されます。そのため実行可能ファイルでも、バックアップ後のファイルは実行できません。このファイルを実行可能な状態に復元するには、RESTORE コマンドを使います。

関連コマンド

RESTORE、ATTRIB

外部コマンド

BATKEY

機　　能

指定したメッセージを表示し、その後ユーザーからのキー入力を待ちます。バッチファイル内で使うコマンドです。キー入力に対応した数値を ERRORLEVEL として返します。

解　　説

BATKEY コマンドは、バッチファイル内でキー入力を必要な場合に使用します。

指定したメッセージを表示し、その後スイッチで指定した種類のキー入力を待ちます。どのキーが入力されたかは、BATKEY コマンドを実行したあとの ERRORLEVEL で知ることができます。

注　　意

スイッチには3以上の値を指定しないでください。

関連コマンド

PAUSE、IF

内部コマンド

BREAK

NET

機　　能

CTRL ＋ C または STOP キーによって、どのようなときに中断できるかを設定します。

解　　説

BREAKコマンドは、プログラムの動作を中断する CTRL ＋ C キー（または STOP キー）が押されたかどうかを、どのレベルまでチェックするかを設定するコマンドです。

スイッチ（ONまたはOFF）を省略して〝BREAK〟とだけ入力すると、現在の設定状況を表示します。

内部コマンド

CHDIR（CD）

機　　能

カレントディレクトリを他の任意のディレクトリに変更します。また、カレントディレクトリ名を表示します。

解　　説

CHDIR(または CD)コマンドは、カレントディレクトリを変更したり、カレントディレクトリ名を表示したりするコマンドです。

<例>
カレントディレクトリを"¥DOC¥WORK"へ変更する

CHDIR　¥DOC¥WORK（または、CD　¥DOC¥WORK）

パス名を指定せずに"CHDIR"とだけ入力すると、そのときのカレントディレクトリを表示します。また、"CHDIR　B："のようにドライブ名を指定して入力すると、指定したドライブのカレントディレクトリを表示します。

MKDIR(MD)、RMDIR(RD)

外部コマンド

CHGEV

機　能　SETUP コマンドで登録したアプリケーションを、DOS シェルから起動する場合に使用されるコマンドです。

注　意　CHGEV コマンドは、単独では実行しないでください。

外部コマンド

CHKDSK

NET

機　能

ドライブのディレクトリ情報を検査し、ドライブの状況とメモリの容量を報告します。また、そのドライブのディスクにエラーが見つかったときには、指定に応じてその修復も行います。

解　説

CHKDSK コマンドは、指定したドライブのディレクトリ情報に誤りや矛盾がないかどうかを調べます。なければドライブの未使用領域がどれだけあるかを表示します。

注　意

・ASSIGN、JOIN または SUBST コマンドで指定されたドライブ名に対しては、CHKDSK コマンドを使わないでください。
・MS-WINDOWS からも、CHKDSK コマンドを実行しないでください。

関連コマンド

RECOVER、ASSIGN、JOIN、SUBST

内部コマンド

CLS

機　能

画面を消去します。

解　説

画面を消去して、コマンドプロンプトを１行目に表示します。

外部コマンド

COMMAND

NET

機　能

コマンドプロセッサ(COMMAND.COM)を起動します。

解　説

COMMAND.COM は MS-DOS の標準コマンドプロセッサですが、1 つの外部コマンドとしても実行することができます。

コマンドを入力するデバイス名も指定することができます。デフォルトでは CON デバイスになっていますが、これを別のデバイス(たとえば AUX)などにすることもできます。

CONFIG.SYS ファイルの SHELL コマンドで COMMAND.COM を指定するときには、次の書式を使います。

SHELL＝[〈ドライブ名 1〉][〈パス名 1〉]COMMAND.COM　[〈ドライブ名 2〉]
[〈パス名 2〉][デバイス名][/E：〈環境エリアのサイズ〉][/P]

[〈ドライブ名 2〉][〈パス名 2〉]は、COMMAND.COM の非常駐部がなんらかの理由で失なわれたときに、それを再ロードするためのパス名を指定します。

〈環境エリアのサイズ〉には、デフォルトの環境エリアの大きさをバイト数単位で指定します。160〜32768 までが指定でき、省略すると 256 バイトになります。指定された数字は、もっとも近い 16 の倍数に切り上げられます。

関連コマンド

EXIT、CTTY、SET

内部コマンド

COPY

機　能

ファイル単位またはディレクトリ単位でファイルをコピーします。また、複数のファイルを連結してコピーすることもできます。

解　説

COPYコマンドは、指定した送り側ファイルの複写をつくって、受け側に新たに作成する(コピーする)コマンドです。また、送り側の複数のファイルを〝+″記号でつないでコピーすると、それらは1つに連結されて受け側のファイルになります。

書式1

ファイルまたはディレクトリ単位でコピーする

第1パラメータで指定したファイルを、第2パラメータで指定したファイルにコピーします。

(1) 第1パラメータについて

第1パラメータにはファイル名かパス名を指定できます。それぞれの場合で、送り側ファイルは次のようになります。

・パス名としてディレクトリを指定したとき

指定したディレクトリ下に存在するすべてのファイルが、送り側ファイルとなります。

・ファイル名を指定したとき

指定したファイルのみが送り側ファイルとなります。

(2) 第2パラメータについて

第2パラメータにも、ファイル名かパス名を指定できます。また、何も指定しない場合もあります。

・第2パラメータをすべて省略したとき

第1パラメータで指定した送り側ファイルが、カレントディレクトリに個別にコピーされます。

<例>

〝B：¥DOC″にある、拡張子が〝DOC″のファイルすべてをカレントディレクトリにコピーする

```
COPY　B：¥DOC¥*.DOC
```

CHAPTER 4

・ドライブ名だけを指定したとき

第1パラメータで指定した送り側ファイルが、指定したドライブのカレントディレクトリに個別にコピーされます。

<例>

カレントドライブのカレントディレクトリにある、拡張子が〝.DOC〞のファイルすべてを、ドライブBのカレントディレクトリに個別にコピーする

```
COPY　*.DOC　B：
```

・パス名(ドライブ名付きの場合も含む)を指定したとき

第1パラメータで指定した送り側ファイルすべてが、パス名で指定したディレクトリに個別にコピーされます。

<例>

カレントドライブのカレントディレクトリにある、拡張子が〝.DOC〞のファイルすべてを、ドライブBのディレクトリ〝¥TEXT〞下に個別にコピーする

```
COPY　*.DOC　B：¥TEXT
```

・ファイル名(ドライブ名、パス名付きの場合も含む)を指定したとき

送り側ファイルが単一ファイルの場合は、第2パラメータのファイル名に単純にコピーされます。

送り側ファイルが複数の場合は、それらは連結されてひとつのファイルとしてコピーされます。複数のファイルの指定は、ワイルドカードを使用したり、パス名の指定によって行えます。連結される順番はディレクトリ順(DIR コマンドで表示される順)になります。

書式 2　ファイルを連結する

第1パラメータで〝+〞記号でつながれたファイル名が指定の順で連結され、第2パラメータのファイル名にコピーされます。

<例>

カレントドライブのカレントディレクトリの、ファイル〝RP1.DOC〞と〝RP2.DOC〞をこの順で連結して、〝RP3.DOC〞にコピーする

```
COPY　RP1.DOC+RP2.DOC　RP3.DOC
```

注　　意

・送り側と受け側がまったく同じ場合はエラーメッセージを表示し、コピーされません。ただし、送り側か受け側のどちらか一方だけにパス名を指定して、もう一方をドライブ名の指定だけにした場合は、結果的に同じファイルに上書きすることになってもエラーメッセージは表示されないので注意してください。
・すでに存在するファイルにコピーすると、上書きされて元の内容は消去されます。

関連コマンド

COPYA、XCOPY

外部コマンド

COPYA

機　能

補助入出力装置(AUX デバイス)との間でデータファイルの送受信を行います。

解　説

バイナリモードでデータを送信する際には、ファイル名にワイルドカードが使用できます。

バイナリモードでデータを受信する場合には、ファイル名を省略することができます。この場合は、受信したファイルのファイル名、および日付は送信側の内容と同じになります。

送受信時の RS-232C の各種パラメータは、両方で同じ設定にする必要があります。また、バイナリモードの場合はさらに、次のように設定してください。

ボーレイト	：75～9600
キャラクタ長	：8 ビット
パリティチェック	：パリティ無
ストップビット	：1 ビットまたは 2 ビット
X パラメータ	：無

＜例＞

ファイル"SEND.DAT"の内容を AUX デバイスに送信する

```
COPYA  SEND.DAT  AUX
```

このコマンドは、メニュー画面による各種設定および実行ができます。すべてのコマンドオプションを省略して"COPYA"とだけ入力するとメニュー画面が表示されます。この画面では表示されるメッセージにしたがって操作してください。

注　意

- COPYA コマンドを使う前に、SPEED コマンドで RS-232C インターフェイスを初期化してください。このとき、システムには RS-232C インターフェイス用デバイスドライバ(RSDRV.SYS)が組み込まれていなければなりません。
- 送受信ともに COPYA コマンドを実行する場合は、受信側で先にコマンドを起動してください。
- ファイル転送中に処理を中断する場合は、[CTRL]＋[C]キーを押してください。

関連コマンド

SPEED

内部コマンド

CTTY

機　能

コマンドを入出力するデバイスを変更します。

解　説

CTTYコマンドは、MS-DOSに対するコマンドを入出力するデバイス(デフォルトはCONデバイス)を、指定したデバイスに変更します。

通常、コマンドの入力とコマンドの実行結果の出力はコンソール(CON)デバイスを通じて行われます。CTTYコマンドは、これをたとえばRS-232Cインターフェイスを経由したターミナルなどから行うよう変更することができます。

<例>

補助入出力装置(AUXデバイス)からコマンドを入力し、AUXデバイスに出力するように設定する

```
CTTY　AUX
```

注　意

・デバイス名としてAUXを指定するときは、CTTYコマンドを実行する前にSPEEDコマンドでRS-232Cインターフェイスの初期化と起動を行ってください。
・ハードウェアに対して直接入出力を行っているようなプログラムには、このコマンドは無効です。入出力にMS-DOSの機能を利用したプログラムにのみ有効です。
・デバイス名にはPRNやNULもありますが、これらのデバイスからは入力できないので、指定しても意味がありません。

関連コマンド

SPEED、COMMAND

外部コマンド

CUSTOM

機　能

指定したドライブのルートディレクトリにCONFIG.SYSファイルを作成します。すでにCONFIG.SYSファイルが存在する場合は、それを更新します。

また、ADDDRVコマンドで登録するデバイスドライバの定義ファイルを作成/更新することもできます。

解　説

CONFIG.SYSファイルやADDDRV用定義ファイルはテキストファイルですから、テキストエディタや日本語ワードプロセッサで作成/編集することができます。しかしこのCUSTOMコマンドを使うと、より簡単に作成/更新できます。

CONFIG.SYSファイルを作成/更新する場合、起動時にドライブ名を指定するとそのルートディレクトリの、ドライブの指定を省略するとカレントドライブのルートディレクトリのCONFIG.SYSファイルが対象となります。パス名を設定してサブディレクトリに作成することはできません。

このコマンドは、メニュー画面による各種設定および実行ができます。ファイル名を指定しないでCUSTOMコマンドを起動すると、メニュー画面が表示されます。この画面では表示されるメッセージにしたがって操作してください。

詳しくは、別冊の『インストールガイド』の「2.8　CUSTOMコマンドの使い方」を参照してください。

内部コマンド

DATE

機　能

システムが管理する日付を表示/設定します。

解　説

DATEコマンドは、マシンの本体内に持っている内部時計の日付部分を表示したり合わせたりするコマンドです。

システムが管理する日付は、MS-DOSでは、ファイルを作成・更新したときにディレクトリに記録される日付として利用されます。BACKUPコマンドのように日付の情報を参照するコマンドもありますから、必ず正しい日付を設定するようにしてください。

〝DATE〟とだけ入力すると、

```
現在の日付は<yy>-<mm>-<dd>(曜日)です.
日付を入力してください(年-月-日)：■
```

と表示されます。ここで、日付を変更する必要がなければそのまま⏎キーを押してください。変更する必要があるときは、年(yy)・月(mm)・日(dd)をハイフン(-)かスラッシュ(/)かピリオド(.)で区切りながら、数字で入力します(曜日は指定できません)。各数字に指定できる範囲は次の通りです。

<yy>	80～99(1900年代)または1980～2079(年)
<mm>	1～12(月)
<dd>	1～31(日)

年月日は、DATEコマンドのパラメータとして入力することもできます。

日付は時刻と連動しており、時刻が翌日になったときは自動的に日付も更新されます。そのため、時刻もTIMEコマンドで正しく設定する必要があります。

注　意

PC-9800シリーズのうち、PC-9801VM以前の機種はうるう年の更新、年の更新を自動的にすることができませんので、DATEコマンドで更新する必要があります。

関連コマンド

TIME

内部コマンド

DEL（ERASE）

機　能　指定したファイルを削除します。

別表記　ERASE

解　説

DEL（または ERASE）コマンドは、指定したファイルを削除するコマンドです。ファイル名の指定にはワイルドカードが使えます。もし、誤って必要なファイルを削除してしまったときも、直後であれば UNDELETE コマンドで（MIRROR コマンドをあらかじめ実行しておけば直後でなくても）復旧することができます。

パラメータにパス名だけを指定すると、指定したディレクトリ下にあるファイルすべてを削除するという意味になります。

＜例＞

カレントディレクトリにある、拡張子が".BAK"のファイルをすべて削除する

```
DEL　*.BAK
```

関連コマンド　UNDELETE、MIRROR

外部コマンド

DELDRV

機　　能

ADDDRVコマンドで組み込んだデバイスドライバを取り外します。

解　　説

DELDRVコマンドは、ADDDRVコマンドで組み込んだデバイスドライバをメモリから取り外します。使用するアプリケーションプログラムによって異なるデバイスドライバを使い分けたいときに、ADDDRVコマンドとともに用います。

注　　意

・キャラクタ系デバイスドライバが動作中(たとえば、日本語入力モードになっているとき)は、使用することができません。
・他のプログラムの子プロセスとして実行することはできません。
・取り外すことができるデバイスドライバは、ADDDRVコマンドで追加されたものだけです。CONFIG.SYSファイル内のDEVICEコマンドで組み込まれたデバイスドライバは取り外すことができません。

関連コマンド

ADDDRV

外部コマンド

DICM

機　能

弊社製日本語入力ドライバ用の辞書ファイル(NECAI.SYS)に対して、ユーザー登録単語の登録/削除、辞書の一覧表示などの保守を行います。

解　説

辞書ファイル名を省略したときは"NECAI.SYS"を、辞書ファイル名を指定したときはそのファイルを辞書ファイルとして、保守作業を行います。

辞書ファイル名は、必ず辞書のファイル(弊社提供の辞書ファイル、あるいはそれをコピー/リネームしたもの)でなくてはなりません。辞書ファイル以外のファイルを指定すると、ユーティリティが誤動作したり、指定したファイルを壊すことがあります。

DICM コマンドを実行すると、メニュー画面が表示されます。この画面では、メッセージにしたがって操作してください。詳細は、別売の『日本語入力ガイド』を参照してください。

内部コマンド

DIR

機　能　ディレクトリの内容を表示します。

解　説　DIRコマンドは、指定されたドライブ、ディレクトリ、ファイル名に関するディレクトリ情報(ファイル名、ディレクトリ名、ファイルの大きさ、最後に更新された日付・時刻)、ファイル数を表示します。

パラメータをすべて省略すると、カレントドライブのカレントディレクトリのディレクトリ情報を表示します。

▼属性を指定する場合

属性には複数の指定ができ、そのすべての条件に合致したものだけ表示します。

<例>

リードオンリー属性の付いたファイルの中で不可視属性の付いていないファイルを表示する

```
DIR /A:R-H
```

▼ソート順を指定する場合

ソート順には複数の指定ができ、そのすべてのソート順で表示します。

<例>

拡張子をアルファベット順にソートし、さらにそれを日付の新しいものから表示する

```
DIR /O:E-D
```

CHAPTER 4

▼スイッチを登録しておく

SETコマンドを使って、環境変数"DIRCMD"にスイッチをあらかじめ登録しておくことができます。

```
SET  DIRCMD=/W/P
```

このようにしておくと、以降は"DIR"とだけを入力すると実際は"DIR /W/P"が実行されます。また、登録したスイッチを取り消したいときは、マイナス記号を付けます。

```
DIR  /-W
```

このようにDIRコマンドを実行すると、"DIR /P"だけが実行されます。

関連コマンド ATTRIB、SET

外部コマンド

DISKCOPY

NET

機　能

フロッピィディスクの内容をそのまま他のフロッピィディスクにコピーしたり、フロッピィディスク同士の内容を照合します。

解　説

送り側ドライブのディスクから受け側ドライブのディスクに内容をそのままコピーします。受け側のディスクが初期化(フォーマット)されていなければ、初期化の作業も行います。

このコマンドは、メニュー画面を使用しても実行できます。いっさいのパラメータを省略して〝DISKCOPY″とだけ入力した場合は、メニュー画面が表示されます。この画面では表示されたメッセージにしたがって操作してください。

注　意

・受け側のディスクに、元々入っていた内容はすべて消えてしまいます。ドライブ名の指定をまちがえないよう注意してください。
・〝/Q″スイッチを指定すると高速にコピーできますが、データが正しく書き込まれているかどうかの確認はしていませんので注意してください。
・ASSIGN コマンドで変更したドライブ名は無視されます。また、SUBST コマンドで指定した仮想ドライブに対しては実行しないでください。

関連コマンド

ASSIGN、COPY、BACKUP、SUBST、XCOPY、HDUTL、FORMAT

外部コマンド

DOSKEY

機　能

MS-DOSのプロンプト状態からのコマンドの入力を便利にするユーティリティです。

解　説

DOSKEYコマンドは一度実行されると、メインメモリ内に常駐します。一度常駐すると、それ以降は入力したコマンドを再実行したり、コマンドライン上でエディタのようにコマンドを編集することができます。

DOSKEYコマンドの主な機能は次の通りです。

(1) 複数のコマンドの連続実行
(2) 以前に実行したコマンドの履歴の操作と再入力
(3) コマンドラインの編集
(4) コマンドのマクロ化

▼複数のコマンドの連続実行

この機能については、本書「2.4　コマンドを連続実行する」を参照してください。

▼以前に実行したコマンドの履歴の操作と再入力

DOSKEYは実行されたコマンドを記憶しているので、以前に実行したコマンドを簡単に呼び出して実行することができます。次のキーを使います。

キー	機能
f·7	記憶しているコマンドのリストを表示します。表示が1画面に入りきらない場合は、いったん止まります。
GRPH + f·7	コマンドのリストをすべて削除します。
↑	リスト中の1つ前のコマンドをコマンドラインに表示します。
↓	リスト中の1つ後のコマンドをコマンドラインに表示します。
ROLL UP	リスト中のもっとも古いコマンドをコマンドラインに表示します。
ROLL DOWN	リスト中のもっとも新しいコマンドをコマンドラインに表示します。
f·8	先頭のいくつかの文字を押してから f·8 キーを押すと、その文字列に一致するコマンドを検索して表示します。
f·9	コマンドラインに〝行番号:〟と表示されるので、ここで番号を入れて ⏎ キーを押すと、その番号のコマンドが表示されます。
ESC	コマンドラインに表示されている文字をすべて消去します。

CHAPTER 4

▼コマンドラインでの編集機能

コマンドを入力しているときや、リスト中のコマンドを表示させたときに、通常のエディタのように編集することができます。次のキーを使います。

キー	機能
SHIFT + ←	コマンドラインの先頭文字にカーソルを移動します。
SHIFT + →	コマンドラインの最終文字にカーソルを移動します。
←	カーソルを1文字分左へ移動します。
→	カーソルを1文字分右へ移動します。
CTRL + ←	カーソルを1ワード分左へ移動します。
CTRL + →	カーソルを1ワード分右へ移動します。
BS	カーソルの左の1文字を削除します。
DEL	カーソル位置の1文字を削除します。
GRPH + →	カーソルの位置から右の文字をすべて削除します。
GRPH + ←	カーソルの位置から左の文字をすべて削除します。
INS	挿入モードと上書きモードを切り替えます。
ESC	コマンドラインに表示されている文字をすべて消去します。

〝1ワード〟とは、スペースで区切られた文字列のかたまりを表わします。

INS キーで挿入モードと上書きモードを切り替えることができますが、コマンドを実行するたびにデフォルトのモードに戻ります。デフォルトのモードは、DOSKEYを実行するときのスイッチ〝/INSERT〟と〝/OVERSTRIKE〟で指定します。

なお、モードによってカーソルの形が変わります。上書きモードのときはブリンク(点滅)に、挿入モードのときは箱形になります。

▼コマンドのマクロ化

コマンドのマクロ化とは、コマンドを別の名前で定義する機能です。スイッチやオプションの多いコマンドはなかなか憶えにくいものですが、こういったコマンドを短い名前で定義しておけば簡単に実行できるようになります。たとえば、

```
A>DOSKEY  LS=DIR  /W  /O:N
```

を実行すると、これ以降〝LS〟という入力で〝DIR　/W　/O：N〟が実行できます。また、複数のコマンドを定義したり、$1～$9でバッチ処理と同じようにパラメータを指定することもできます。

CHAPTER 4

・マクロの定義

マクロを定義するときの書式は、次のようになっています。

```
DOSKEY　マクロ名＝[コマンド列]
```

複数のコマンドを１つのマクロで定義したいときは、コマンドとコマンドの区切りに"$T"を付けて定義します。

＜例＞　DOSKEY　DOC＝A：　$T　CD　¥DOC　$T　DIR　/O：D

マクロはメモリ内に記憶されますから、リセットや電源 OFF でその内容は消えてしまいます。そのため、よく使うマクロは AUTOEXEC.BAT ファイルなどのバッチファイルで一度に定義できるようにしておくと便利です。

・リダイレクトとパイプ

マクロを定義するときに、コマンド列の中でリダイレクトやパイプを利用したいときは、次のような記号を使います。

記号	意　味
$L	リダイレクト記号の"＜"
$G	リダイレクト記号の"＞"
GG	リダイレクト記号の"＞＞"
$B	パイプ記号の"¦"

＜例＞　DOSKEY　SVHIS＝DOSKEY　/HISTORY　$G　A：¥ETC¥HIST.BAT

これで、"SVHIS"を実行すると、

```
DOSKEY　/HISTORY　＞　A：¥ETC¥HIST.BAT
```

が実行されます。

・マクロでパラメータを使う

マクロ定義の中でもバッチファイルと同様に、パラメータを使うことができます。パラメータは$0～$9 までの 10 個あり、このうち$1～$9 まではバッチファイルと同じです。

＜例＞　DOSKEY　LS＝DIR　$1　/W　/O：N

と定義しておき、

```
LS　*.TXT
```

を実行すると、〝$1〟は〝*.TXT〟に置き替わり、

```
DIR　*.TXT　/W　/O：N
```

が実行されます。

〝$0〟だけは他のパラメータと異なります。マクロ名とスペースを除いたすべての文字列と置き替わります。

＜例＞　DOSKEY　PR＝PRINT　$0

と定義しておき、

```
PR　REPORT.TXT
PR　TEST.TXT　/C
PR　/B：10000　/M：20　/Q：16
```

などを実行すると、〝PR〟以降のすべての文字列と〝$0〟が置き替わります。

CHAPTER 4

・マクロの保存

定義したマクロは、/MACROS スイッチ(/M と省略することもできます)とリダイレクトを使ってファイルに保存することができます。

<例> DOSKEY LS=DIR $1 /W /O:N

と定義してあるときに、

DOSKEY /MACROS > MAC.TXT

を実行すると、"MAC.TXT"の内容は、

LS=DIR $1 /W /O:N

となります。"マクロ名=コマンド列"の部分だけしか保存されていないので、このファイルの各行の先頭に"DOSKEY [SPACE]"という文字([SPACE] は半角スペース)を挿入すると、マクロを定義するバッチファイルができます。

・マクロの削除

登録されているマクロの一つを削除するには、消したいマクロ名に"="だけを付けて実行します。

<例> DOSKEY LS= [↵]

登録されているすべてのマクロをクリアするには、[GRPH]+[f･10] キーを押します。

注意

マクロ名は、MS-DOS のコマンドやその他の実行ファイルの名前と同じにならないように注意してください。実行ファイルと同じ名前のマクロをつくることももちろんできますが、実行のときにコマンドラインで余分な空白を挿入するなどの工夫が必要です。詳しくは別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

外部コマンド

DUMP

機　能

ファイルの内容を、数字(16 進数表現)と文字で画面に表示します。

解　説

DUMP コマンドは、指定したファイルの「開始アドレス」から「終了アドレス」までの内容を、16 進数表現の数字と、その数字に対応したアスキーコードの文字とで表示するコマンドです。このコマンドは、コマンドラインからと、メニュー画面を利用しての実行が可能です。

終了アドレスを指定した場合は、開始アドレスを省略することはできません。ともに省略すると、指定したファイルの内容を始めから終わりまで表示し、終了します。

パラメータを省略して実行すると、メニュー画面が表示されます。この画面では、表示されるメッセージにしたがって操作してください。

注　意

SUBST コマンドで指定したドライブ名に対しては、このコマンドを実行しないでください。

内部コマンド

EXIT

機　能

子プロセスとして起動されたCOMMAND.COMから親プロセスに戻ります。

解　説

MS-DOSは、子プロセス(チャイルドプロセス)を実行することができます。子プロセスを実行したプロセスを「親プロセス」と呼びます。親プロセス上でCOMMAND.COMを起動したとき、子プロセス上でEXITコマンドを実行すると元の親プロセスに戻ることができます。

このため、アプリケーションプログラムに子プロセスを起動できる機能があり、その子プロセスとしてCOMMAND.COMを起動したときなどに使うコマンドです。

注　意

子プロセスとしてCOMMAND.COMを起動したときに"/P"スイッチを指定した場合は、EXITコマンドでも親プロセスに戻ることができません。

関連コマンド

COMMAND

外部コマンド

FASTOPEN

NET

機　能

ファイルやディレクトリのオープンにかかる時間を短くします。

解　説

FASTOPEN コマンドは、よく使うファイルの起動までの時間を高速化したり、ファイルのランダムアクセスを高速化するコマンドです。

FASTOPEN を設定しておくドライブ名を最低 1 つ指定します。フロッピィディスクドライブは指定できません。

指定した全ドライブ上でいくつのファイルのディレクトリエントリを記憶するかの総数も指定できます。10～999 が指定でき、デフォルト値は 48 です。1 つにつき 48 バイトのメモリを必要とします。

<例>

固定ディスクドライブ C にある 100 個までのディレクトリエントリと固定ディスクドライブ D にある 20 個までのディレクトリエントリを記憶するように設定する

```
FASTOPEN  C：＝100  D：＝20
```

注　意

- FASTOPEN コマンドの対象は固定ディスクだけです。また、ネットワーク上のドライブ、ASSIGN/JOIN/SUBST コマンドで定義したドライブも対象にできません。
- FASTOPEN コマンドの対象となるドライブは、1 度に 24 ドライブまでです。

外部コマンド

FC

機能

指定した2つのファイルの内容を比較します。

解説

2つのファイルの内容を比較します。比較には、バイナリ比較、アスキー比較の2通りの方法があります。

・バイナリ比較(バイト単位で比較)

ファイルの各バイトごとに比較し、ちがいを出力します。いずれかのファイル名の拡張子が".EXE"、".COM"、".SYS"、".OBJ"、".LIB"、".BIN"であるときには、自動的にバイナリ比較で実行します。これ以外の拡張子のファイルでバイナリ比較を行いたいときは、"/B"スイッチを付けて実行する必要があります。

・アスキー比較(行単位で比較)

1行を1つのデータのブロックとして比較し、ちがいを出力します。上記以外の拡張子のファイルを指定すると、自動的にアスキー比較になります。

▼出力形式

アスキー比較のときの出力形式は次のようになっています。

……………〈ファイル名1〉
〈一致している部分の最後の1行〉
〈相違点〉(相違点のある行の表示をします。複数行の場合あり)
〈一致している部分の最初の1行〉
……………〈ファイル名2〉
〈一致している部分の最後の1行〉
〈相違点〉(相違点のある行の表示をします。複数行の場合あり)
〈一致している部分の最初の1行〉

2つのファイルに複数の相違点があると、相違点があっただけの回数表示されます。

ここで、"/nnnn"の指定によって、最初に発見された相違点のある行からnnnn行以内に再度相違点があった場合は、途中の行で相違点がなくても(まったく同じでも)〈相違点〉の部分に表示されます。nnnnのデフォルト値は2で、1～9999の範囲の数字が指定できます。

"/LBn"スイッチは、アスキー比較のときの内部ラインバッファをn行に設定します。相違のある行がこの値以上に連続して存在する場合は、2つのファイルはまったくちがうものと判断し比較を中止します。デフォルト値は100です。

〝/T″スイッチは、アスキー比較のときにタブ文字を空白に展開しないで比較します。このスイッチを省略したときは、8 桁の位置までを空白としてあつかいます。

バイナリ比較のときの出力形式は次のようになっています。

```
--ADDRESS-----F1-----F2
  XXXXXXXX      YY      ZZ
```

ここで〝XXXXXXXX″は、ファイルの先頭からの相対アドレス(単位はバイト)です。アドレスは〝00000000″から始まります。〝YY″と〝ZZ″は、ちがいのあったアドレスの内容(バイト値)です。

<例>

ファイル〝A：ALPHA.DOC″と〝B：BETA.DOC″を、各行中の連続したタブ文字、空白は 1 つのものとして比較する

```
FC  /W  A：ALPHA.DOC  B：BETA.DOC
```

CHAPTER 4

外部コマンド

FILECONV

機　能　N88-日本語 BASIC(86)と MS-DOS の間でファイルを変換します。

解・説　FILECONV を起動すると、メニュー画面が表示されます。この画面では、表示されるメッセージにしたがって操作してください。

CHAPTER 4

外部コマンド

FIND

機　能

1つまたは複数のファイルから指定した文字を検索します。

解　説

FIND コマンドは、指定したファイルから文字列を検索し、含まれる行を出力するフィルタコマンドです。パラメータとして、検索したい文字列(文字列はダブルクォート(" ")で囲んで指定してください)と、検索対象のファイル名を指定します。

ファイルを指定しないと、標準入力(キーボード)から入力された文字の中を検索します。標準入力からの検索を終了するには、CTRL＋Z キーを押してください。

<例>

BOOK1.TXT と BOOK2.TXT からこの順で"File"という文字列を含む行を検索し、行番号を付加して表示する

```
FIND /N "File" BOOK1.TXT BOOK2.TXT
```

注　意

文字「"」を含む文字列を検索したいときは、「""」と2つ続けることによって1つの「"」を意味することができます。

外部コマンド

FORMAT

NET

機　能　指定されたドライブのディスクを、MS-DOS で使用できるように初期化します。

解　説　MS-DOS で使用するフロッピィディスクや固定ディスク(光ディスク)は、MS-DOS が利用できるように FORMAT コマンドで初期化する必要があります(このことをフォーマットする、とも呼びます)。

FORMAT コマンドは、メニュー画面を利用しても実行できます。すべてのパラメータを省略して〝FORMAT〟とだけ入力すると、メニュー画面が表示されます。この画面では、表示されるメッセージにしたがって操作してください。

〝/Q〟スイッチを指定すると、以前に初期化したことがあるフロッピィディスクの、管理領域だけを初期化します。通常よりも高速に初期化できます(クイックフォーマット)。逆に〝/U〟スイッチは、フロッピィディスクが初期化済みか否かにかかわらず、全体を物理的に初期化します。このスイッチを使用すると UNFORMAT コマンドで復旧できなくなります。

また〝/B〟スイッチは、システムファイルを後から追加できるように、約 124K バイトの空き領域(ブランク)を用意してフロッピィディスクを初期化します。こうして作成されたフロッピィディスクを「ブランクディスク」と呼びます。

注　意　固定ディスクや光ディスクの領域は合計 2G バイトまで確保できますが、129M バイト以上にわたる領域は MS-DOS 5.0 以外の OS ではアクセスできません。

関連コマンド　LABEL、SYS、UNFORMAT、MIRROR

外部コマンド

HDUTL

機　能

固定ディスクの表面を検査したり、スキップセクタの代替処理を行います。また、固定ディスクや光ディスク間でドライブ間のまるごとコピーを行います。

解　説

HDUTL コマンドは、固定ディスクにかかわるさまざまな処理を行うユーティリティです。実行するとメニュー画面が表示されますので、メッセージにしたがって操作してください。

注　意

・コピー元とコピー先は、同じ容量で同じインターフェイスによって接続され、同じフォーマット形式で初期化された固定ディスク装置でなければなりません。
・どちらかに代替されていないスキップセクタがあると、コピーできません。
・HDUTL コマンドでは、子プロセスとして RECOVER コマンドを起動します。したがって、HDUTL コマンドを実行するときは、RECOVER コマンドがカレントディレクトリか、コマンド検索パスが設定されたディレクトリになければなりません。
・HDUTL コマンドでコピーした固定ディスクは、一度 MS-DOS を再起動しなければ使用できません。

関連コマンド

RECOVER、DISKCOPY、FORMAT

外部コマンド

JOIN

NET

機　能　ドライブをディレクトリに結合します。

解　説　指定したドライブ名を、指定したディレクトリ名で参照できるようにします。
すべてのパラメータを省略して"JOIN"だけを入力すると、現在結合されているドライブ名とディレクトリ名の組を表示します。

＜例＞
ドライブＢを"Ａ：¥DRV"というパス名に結合する

```
JOIN  B:  A:¥DRV
```

＜例＞
ドライブＢとディレクトリ名との結合を解除する

```
JOIN  B:  /D
```

注　意
- JOIN コマンド実行後は、結合したドライブ名は使用できなくなります。
- 結合するサブディレクトリは、空でなければなりません。また、指定されたディレクトリが存在しないと、JOIN コマンドがディレクトリを作成します。

外部コマンド

KEY

機　能

ファンクションキーやカーソル移動キーに、さまざまな機能を割り当てたり解除したりします。これによって、コマンドをファンクションキーだけで入力することなどができます。また、割り当ての状況を表示することもできます。

解　説

このコマンドは、コマンドラインからとメニュー画面からの操作ができます。パラメータを省略して"KEY"とだけ入力したときは、メニュー画面が表示されます。この画面では、表示されるメッセージにしたがって操作してください。

各キーに設定できる機能(文字列)の長さには、次のような制限があります。

・ファンクションキー	15文字まで
・シフト+ファンクションキー	15文字まで
・コントロール+ファンクションキー	15文字まで
・カーソル移動キー	5文字まで
・データキー	15文字まで

ただし、漢字やひらがななどの2バイト文字は1文字で2文字分に数えてください。

注　意

・ヌルコード(00H)は入力できません。
・[⏎]キーの コード(0DH)は[CTRL]+[□]キー、[BS]キーの コード(08H)は[CTRL]+[]]キーで入力してください。

CHAPTER 4

外部コマンド

LABEL

NET

機　能　ドライブのボリュームラベルを作成/変更/削除します。

解　説　ボリュームラベルで使える文字の長さは1バイト系の文字で11文字まで、漢字などの2バイト系の文字では5文字までで、これを超える分は切り捨てられます。

ボリュームラベルには、タブ文字と次の文字は使用できません。

＊　？　/　¥　.　,　;　:　+　=　<　>　[　]

スペース(空白)は使用できます。

<例>

ドライブA(のディスク)に"WORK"という名前を付ける

```
LABEL  A:WORK
```

注　意　ASSIGN、JOIN、SUBSTコマンドで置き替えた仮想ドライブに対しては、このコマンドは使えません。

関連コマンド　VOL

内部コマンド

LOADHIGH（LH）

機能　プログラムをUMBメモリにロードします。

別表記　LH

解説　UMBメモリにロードするプログラムのファイル名と、そのプログラムに必要なパラメータがあれば続けて指定します。

＜例＞
MIRRORコマンドを"/TA"スイッチ付きで実行してUMBメモリにロードする

```
LH　A：¥DOS¥MIRROR　/TA
```

注意　LOADHIGHコマンドは、CONFIG.SYSファイルで"DOS＝UMB"と指定するか、CPUが386以上の機種でEMM386.EXEを実行するときに"/UMB"スイッチを指定して、UMBメモリを有効にしていなければ使うことができません。

外部コマンド

MIRROR

機　能

誤ってファイルを削除したり、初期化/領域解放してしまったときに備えて、復旧のための情報をドライブごとに保存します。

解　説

ドライブの状態に関する情報やファイルを削除したときの情報を、ファイルとして保存するコマンドです。UNDELETE コマンドや UNFORMAT コマンドは、この情報を利用してファイルやディスクを復旧しますので、万一に備えて MIRROR コマンドを実行しておくことをおすすめします。

＜例＞
ドライブ A とドライブ B でファイルを削除したときの情報を保存する(ドライブ B では保存可能なファイル数を 150 とする)

```
MIRROR /TA /TB-150
```

注　意

・MIRROR コマンドは、SUBST や JOIN で指定した仮想ドライブには使わないでください。
・MIRROR コマンドと ASSIGN コマンドを両方使う場合は、ASSIGN コマンドを先に実行しておいてください。

関連コマンド

UNDELETE、UNFORMAT

内部コマンド

MKDIR（MD）

機　能

新しいディレクトリを作成します。

別表記

MD

解　説

指定したパス名で、新たにサブディレクトリを作成します。ドライブ指定を省略した場合は、カレントディレクトリにディレクトリが作成されます。

＜例＞

カレントディレクトリにサブディレクトリ〝TMP〞を作成する

```
MD　TMP
```

関連コマンド

CHDIR、RMDIR、RENDIR

CHAPTER 4

外部コマンド

MORE

機能

標準入力からの文字データを、1画面分(23行)ずつ分けて画面に表示します。

解説

文字データを1画面分表示すると、MORE コマンドは画面の最下行に次のメッセージを表示し、キー入力を待ちます。

続きがありますのでどれかキーを押してください.

ここで STOP キーまたは CTRL ＋ C キー以外のキーを押すと、次の1画面分を表示します。データをすべて表示するまで、これを続けます。中断したいときは、STOP キーまたは CTRL ＋ C キーを押してください。

<例>

カレントドライブにある"REPORT.DOC"というファイルの内容を1画面ずつ分けて表示する

```
TYPE  REPORT.DOC  |  MORE
```

または

```
MORE  <  REPORT.DOC
```

後者の方法の方が、パイプによる中間ファイルを作成しない分高速です。

※パイプ記号(|)は、キーボードや画面では"¦"と表示されています。

外部コマンド

NECAIKEY

機　能

日本語入力キーファイル(日本語入力のときに使用するキーの割り付けを変更するためのファイル)を作成/更新します。

解　説

AI かな漢字変換ドライバを使用して日本語を入力するときには、ファンクションキーにさまざまな機能が割り付けられています。日本語入力キーファイルを指定すると、これらのキー割り付けを変更することができます。

NECAIKEY コマンドを実行すると、メニュー画面が表示されます。この画面では、メッセージにしたがって操作してください。詳細は、『日本語入力ガイド』を参照してください。

内部コマンド

PATH

機　能　外部コマンドを探すディレクトリ(コマンド検索パス)を設定/表示します。

解　説　外部コマンド(バッチファイルも含む)がコマンドラインから入力されたときに、COMMAND.COM がコマンドを探す道筋(コマンド検索パス)を設定します。コマンド検索パスが設定されていないと、COMMAND.COM はそのコマンドが内部コマンドでなければ、カレントディレクトリからしか探しません。

設定されたコマンド検索パスは、環境変数"PATH"に保存されます。

＜例＞

"A：¥"と"A：¥BIN"と"B：¥UTL"にコマンド検索パスを設定する

```
PATH　A：¥；A：¥BIN；B：¥UTL
```

＜例＞

現在設定されているコマンド検索パスを表示する

```
PATH
```

＜例＞

コマンド検索パスをすべて解除する

```
PATH　；
```

関連コマンド　APPEND、SET

外部コマンド

PRINT

機　　能

他のMS-DOSコマンドを実行中に、並行して(バックグラウンドで)テキストファイルなどを印刷します。

解　　説

すべてのパラメータを省略して〝PRINT〟とだけ入力すると、PRINTコマンドの常駐部分がメモリに組み込まれて常駐し、現在の印刷待ち行列の内容を表示します。

〝/B〟スイッチで指定できる内部バッファのバイト数の範囲は512〜16384までです。デフォルト値は512バイトです。

〝/U〟、〝/M〟、〝/S〟の各スイッチで指定できる時間は、1/18秒単位です。それぞれデフォルト値は1、2、8です。

〝/Q〟スイッチで指定できる印刷待ち行列に登録できるファイル数の範囲は4〜32です。デフォルト値は10です。

<例>

印刷待ち行列のすべてのファイルを取り消す

```
PRINT  /T
```

注　　意

- バックグラウンドで印刷中のファイルが入っているフロッピィディスクは、印刷が終了するまでドライブから抜かないでください。同様に、印刷待ち行列に登録されているファイルは、印刷が終了するまで、変更したり削除したりしないでください。
- PRINTコマンドの実行中は、同じ出力装置に対して他のコマンドで出力することはできません。
- /D：、/B：、/U：、/M：、/S：、/Q：の各スイッチは、初めてPRINTコマンドの常駐部を組み込むときにだけ有効です。実行したときに指定した設定は、〝/R〟スイッチで常駐部分を解放した後、再実行しないと変更できません。

内部コマンド

PROMPT

機　能

MS-DOS のコマンドプロンプトの表示を変更します。

解　説

COMMAND.COM が表示するコマンドプロンプトの表示を変更します。通常 MS-DOS のプロンプトは、カレントドライブのドライブ名と不等号の〝＞″を組み合わせて、〝A＞″などのように表示されます。PROMPT コマンドは、文字列でさまざまな機能や文字を指定して、プロンプトを変更します。

文字列には、英数字や漢字などの一般に表示可能な文字の他に、特別な文字を指定することもできます。特殊コードについては、〝/?″スイッチを付けて PROMPT コマンドを実行したときに表示されるメッセージや、別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

PROMPT コマンドでプロンプトを設定すると、環境変数〝PROMPT″にその内容が登録されます。

＜例＞

プロンプトにカレントドライブとカレントディレクトリを表示させ、その前後を不等号で囲む

```
PROMPT  $L$P$G
```

ただしこの例のようにプロンプトを設定すると、プロンプトを表示するたびにカレントドライブとカレントディレクトリを確認するため、カレントドライブにアクセスするようになります。したがって、フロッピィディスクドライブがカレントドライブのときにディスクが挿入されていないと、エラーが表示されます。

外部コマンド

RECOVER

NET

機　　能

ファイルが使用しているディスクの一部がスキップセクタになったときに、そのファイルやディスクがスキップセクタの部分を使わないようにします。

解　　説

スキップセクタがあると、それがファイルの一部であっても、MS-DOS はそのファイル全体に対してアクセスできなくなります。そこで RECOVER コマンドは、指定したドライブやファイルに含まれているスキップセクタ部分を切り捨てて、他の部分を救済し、使用可能にします。

ただし RECOVER コマンドは、スキップセクタの部分を単純に切り離して以後 MS-DOS がそのスキップセクタの部分を使わないよう印を付け、同時にその他の部分を別ファイルにするだけです。したがって、スキップセクタの部分を記録に使っていたファイルやドライブは、完全に元の状態に修復できるわけではありません。スキップセクタ上にあったデータが欠落してしまうからです。バイナリファイル(コマンドなどの実行可能ファイル)はこれが致命的になりますが、テキストファイルなら残りの部分が修復できるので被害が最小限にとどまるわけです。

ファイル名を指定して実行した場合は、修復後もファイル名は変わりません。ただし、サイズは切り離されたスキップセクタの分だけ小さくなります。

＜例＞

NAME.DAT というファイルを修復する

```
RECOVER　NAME.DAT
```

ドライブ名だけを指定して実行した場合は、そのドライブの全ファイルが修復の対象となります。そして、全ファイルは(それがサブディレクトリにあったものであっても)すべてルートディレクトリに集められ、〝FILE0001.REC″、〝FILE0002.REC″……といった連続した名前になります。

注　　意

- 〝FILE0001.REC″などの名前になってしまったファイルの内容は、スキップセクタ上にあったデータを除いては元のままです。しかしこれらのファイルから元のディレクトリ構造とファイル名に復旧する作業は、高度な MS-DOS の知識が必要になります。したがって、ドライブ名を指定した RECOVER コマンドの実行には、十分注意してください。
- ASSIGN、JOIN、SUBST コマンドで置き替えた仮想ドライブに対しては、このコマンドは使えません。
- ファイル名の指定にはワイルドカードは使えません。

内部コマンド

REN（RENAME）

機　能　ファイル名を変更します。

別表記　RENAME

解　説　「ファイル名1」で指定したファイル名を、「ファイル名2」に変更します。ファイル名1にはドライブ名やパス名を付けることができます。

どちらのファイル名にもワイルドカードを用いることができます。ファイル名1でワイルドカードを使うと、それに該当するファイルがすべてRENコマンドの対象になります。ファイル名2でワイルドカードを使うと、ファイル名1の中のそのワイルドカードに対応する位置の文字が変わりません。

<例>

拡張子が"DOC"のファイルをすべて拡張子"TXT"に変更する

```
REN  *.DOC  *.TXT
```

注　意　ファイル名2で指定したファイル名と同じ名前のファイルが、ファイル名1で指定したディレクトリ内にすでに存在するときは、エラーメッセージが表示されて変更できません。

関連コマンド　RENDIR

外部コマンド

RENDIR

機　能

ディレクトリ名を変更します。

解　説

「パス1」で指定したディレクトリ名を、「パス2」に変更します。「パス1」の前にはドライブ名を付けることができます。ドライブ名の指定がないときは、カレントドライブの「パス1」が変更の対象になります。

「パス1」にファイル名を指定したときは、RENコマンドと同じ働きをします(ファイル名の変更)。

<例>

ドライブBのディレクトリ"¥DOC"のディレクトリ名を、"¥TXT"に変更する

```
RENDIR　B：¥DOC　¥TXT
```

注　意

- 「パス2」で指定したディレクトリ名と同じ名前のディレクトリが、同じ階層にすでに存在するときは、エラーメッセージが表示されて変更できません。
- ルートディレクトリ、".."(親ディレクトリ)、"."(カレントディレクトリ)の名前を変更することはできません。

関連コマンド

CHDIR、MKDIR、RMDIR、REN

外部コマンド

REPLACE

機　　能

すでに存在しているファイルを新しい日付のファイルに置き替えたり、新しいファイルを追加します。

エラーレベル

0　正常終了
2　ファイルが見つからない
3　パスが見つからない
5　アクセス不可能
8　メモリ不足
11　コマンド行にエラーがある
15　ドライブ名が不正

解　　説

REPLACE コマンドは、指定したファイル群を、指定したディレクトリに、さまざまな条件を考慮しながらコピーするコマンドです。固定ディスクに格納されているファイル群を、新しいバージョンのファイルに置き替えるときなどに有効です。ファイル名にはワイルドカードが使用できます。

＜例＞
ドライブ A のカレントディレクトリにある"ABC.DOC"と同名のファイルを、ドライブ C のルートディレクトリから以下すべてのサブディレクトリにわたって探し、もしあればその日時を比較して、"A：ABC.DOC"の方が新しければドライブ C にコピーする

```
REPLACE　A：ABC.DOC　C：¥　/U　/S
```

注　　意

REPLACE コマンドは、送り側のファイルが収められているディレクトリのサブディレクトリは探しません。

関連コマンド

ATTRIB、XCOPY

外部コマンド

RESTORE

機　能

BACKUP コマンドでバックアップされたファイルを固定ディスクに復元します。

エラーレベル

0　正常終了
1　復元するバックアップファイルが見つからない
3　ユーザーによって中止された
4　エラーによって中止された

解　説

RESTORE コマンドは、BACKUP コマンドで作成されたバックアップファイルを、指定した固定ディスクドライブに復元するコマンドです。

「ドライブ 1」は、バックアップファイルが入ったフロッピィディスクドライブ名です。「ドライブ 2」以降は、復元先の固定ディスクドライブ名およびパス名です。「ドライブ 2」を省略すると、カレントドライブのカレントディレクトリに復元します。

/A、/B、/E、/L スイッチで指定する時刻や日付の書式は、TIME コマンド、DATE コマンドと同じです。

＜例＞

ドライブ B のバックアップディスクの中で、1991 年 10 月 03 日以降の日時を持つファイルだけを、ドライブ A の"¥DOC"ディレクトリに復元する

```
RESTORE　B：　A：¥DOC　/A：91-10-03
```

関連コマンド

BACKUP、ATTRIB、DATE、TIME

内部コマンド

RMDIR（RD）

機　能

サブディレクトリを削除します。

別表記

RD

解　説

指定したサブディレクトリをドライブから削除します。

<例>

カレントドライブのディレクトリ"¥WORK¥TMP"を削除する

```
RMDIR　¥WORK¥TMP
```

注　意

- 指定したサブディレクトリが空でない("."と".."以外のファイルやディレクトリが存在する)ときは、エラーメッセージが表示されて削除できません。サブディレクトリを削除するときは、前もってそのディレクトリ内のファイルやサブディレクトリを削除しておいてください。
- カレントディレクトリは削除できません。それより上の階層のディレクトリからRMDIRコマンドを実行してください。
- ルートディレクトリは削除できません。

関連コマンド

MKDIR、CHDIR、RENDIR、DEL

外部コマンド

SEDIT

機　　能　スクリーンエディタです。詳細は本書「第 6 章　スクリーンエディタ」を参照してください。

外部コマンド

SELKKC

機　　能　使用する日本語入力システムを選択します。

内部コマンド

SET

機　能

環境変数に文字列を設定/表示します。

解　説

環境変数とは、COMMAND.COM が確保する特別なメモリ領域(環境エリア)に置く変数です。バッチファイルやアプリケーションプログラムは必要に応じて環境エリアの環境変数を参照し、その内容(文字列)によってアプリケーションプログラムを制御したり、アプリケーションプログラム間で情報をやり取りしたりできます。

環境変数名と文字列を"="でつないで SET コマンドを実行すると、指定した環境変数の値として文字列が設定されます。

環境変数名とイコール記号だけを指定し、文字列を省略して実行すると、その環境変数が削除されます。

また、すべてのパラメータを省略して SET コマンドだけを実行すると、現在設定されている環境変数がすべて画面に表示されます。

＜例＞

環境変数 EDIT に"WD"という文字列を設定する

```
SET　EDIT＝WD
```

注　意

バッチファイル内などで環境変数と文字列を設定すると、環境エリアのサイズを超えてしまうことがあります。すると"環境のためのメモリが足りません."というメッセージが表示され、超えた分の環境変数は設定されません。

デフォルトの環境エリアの大きさを変えるには、CONFIG.SYS ファイル中の SHELL コマンドでコマンドプロセッサとして COMMAND.COM を登録する際に、"/E:nnnnn"スイッチとともにバイト数単位の数字で指定します。詳しくは COMMAND コマンドの項を参照してください。

ただし、コマンドラインから環境変数を(手で)登録する場合には、環境エリアが足りなくなることはありません。アクティブなコマンドプロセッサでは、環境エリアが自動的に拡大されていくからです。

関連コマンド

PATH、PROMPT、COMMAND

外部コマンド

SETVER

機　　能

MS-DOS 5.0 以前のプログラムを実行できるように、MS-DOS のバージョン番号を対象プログラムごとに仮に設定します。また、その設定を解除したり、登録されているバージョンテーブルの表示も行います。

エラーレベル

0　正常終了
1　スイッチの指定がちがう
2　指定したファイルが見つからない
3　メモリが足りない
4　バージョンの指定がちがう
5　指定したファイルがバージョンテーブルに存在しない
6　MS-DOS のシステムファイルが見つからない
7　ドライブの指定がちがう
8　コマンドラインのパラメータが長すぎる
9　パラメータの指定に誤りがある
10　MS-DOS のシステムファイルが読み込めない
11　バージョンテーブルが正しくない
12　バージョンテーブルをサポートしていない
13　バージョンテーブルに空きがない
14　MS-DOS のシステムファイルを書き込めない

解　　説

プログラムの中には、実行時に MS-DOS のバージョンを調べ、それが合わないときには実行できないものがあります。SETVER コマンドはこうしたプログラムに対応するためのコマンドで、これによって、異なるバージョンでしか動作しないプログラムも実行できるようになります。

ドライブ名だけを指定した場合は、そのドライブにあるシステムファイルのバージョンテーブルを表示します。

すべてのパラメータを省略した場合は、カレントドライブのバージョンテーブルを表示します。

バージョンを設定するときは、設定したいファイル名とバージョン番号を記述します。バージョン番号は、〝n.nn〟の形式で記述します。

<例>

〝MYPLOG.EXE〞をバージョン3.30に設定し、それをドライブAのシステムファイルに書き込む

```
SETVER　A：　MYPLOG.EXE　3.30
```

注　　意

・SETVERコマンドを使用するには、あらかじめMS-DOSを起動するドライブにあるCONFIG.SYSファイルで、

```
DEVICE=¥DOS¥SETVER.EXE
```

を指定しておかなければなりません。

・変更したバージョンテーブルは、システムを再起動しないと有効になりません。

CHAPTER 4

外部コマンド

SHARE

機　　能

主にネットワーク上のドライブにあるファイルの共有やロックを監視します。

解　　説

SHARE コマンドは、主にネットワーク上でファイルを共有したりファイルをロック(占有)したりするためのさまざまな設定を行うコマンドです。

〝/F〟スイッチは、ファイルの共有に関する情報を記録するために割り当てるファイルスペースを、バイト数単位で指定します。オープンされる 1 つのファイルにつき、フルパス名の文字数+11 バイトが最低必要です。デフォルト値は 2048 です。

また〝/L〟スイッチはロックするファイル数を指定します。デフォルト値は 20 です。

外部コマンド

SORT

機能

標準入力からデータ(文字列)を読み込み、そのデータを文字コード順に並べ替えて標準出力に出力します。

解説

SORT コマンドは、標準入力から入力されたデータを行単位でソートするコマンドです。パイプ機能やリダイレクトとともに利用されるフィルタです。

<例>

ファイル"ABC.TXT"の内容をソートして画面に表示する

```
TYPE ABC.TXT | SORT
```

注意

- ソートできるデータは最大 65278 バイトまでです。
- ここでいうコード順とは、1 バイト文字は ASCII コード順、2 バイト文字はシフト JIS コード順です。ただし、1 バイト文字の英小文字(a～z)は英大文字(A～Z)とと同じと見なし、出現順だけで処理されます。

関連コマンド

MORE、FIND

外部コマンド

SPEED

機　　能

RS-232C インターフェイスに対するパラメータの設定とその起動を行います。

解　　説

指定したポート番号の RS-232C インターフェイスのパラメータを設定し、インターフェイスを初期化/起動します。

RS232C-1、RS232C-2 は、第 2、第 3 回線用の拡張インターフェイスボード（別売）をコンピュータ本体に実装した場合のみ、パラメータを設定することができます。

SPEED コマンドには、コマンドラインで指定する方法と、メニューで設定する方法とがあります。

すべてのパラメータを省略すると、メニューが表示されます。この画面では、表示されるメッセージにしたがって操作してください。

注　　意

- SPEED コマンドで RS-232C インターフェイスを起動/利用するときは、MS-DOS システムに RS-232C デバイスドライバ（RSDRV.SYS）が組み込まれていなければなりません。
- “AUX”デバイスや COPYA コマンドなどを利用するときは、まずこの SPEED コマンドで RS-232C インターフェイスを初期化/起動しなければなりません。
- RS-232C インターフェイス拡張ポート（1、2）のボーレイトは各ボード上のスイッチで設定するので、SPEED コマンドのパラメータとしてのボーレイト指定は意味がありません（エラーとなります）。また、拡張ポートのボーレイト設定時には、同期モードは必ず“×16”としてください。

関連コマンド

SWITCH

CHAPTER 4

外部コマンド

SUBST

NET

機　能

パス名を仮想ドライブ名に置き替えます。

解　説

指定したディレクトリを、指定した仮想ドライブ名で参照できるようにします。

SUBST コマンド実行後は、指定したディレクトリを指定したドライブ名で参照できるようになり、長いパス名を入力せずにディレクトリを操作できます。もちろん、従来のパス名でも参照できます。

パラメータを省略して〝SUBST″とだけ入力すると、これまでに置き替えたパス名と仮想ドライブ名の関係を画面に表示します。

<例>

〝B：¥USR¥SATO¥DOC″をドライブ Z で参照できるようにする

```
SUBST　Z：　B：¥USR¥SATO¥DOC
```

注　意

- 仮想ドライブ名に、実際に接続されているドライブ名を指定することもできます。しかしその場合、以降〝/D″スイッチで置き替えを解除するまで、そのドライブは本来の名前で参照できなくなります。
- 仮想ドライブ名に対して、物理的にドライブにアクセスするようなコマンド(FORMAT や DISKCOPY など)は利用できません。
- 仮想ドライブ名を設定するときには、MS-DOS を起動するドライブにある CONFIG.SYS ファイルで、LASTDRIVE コマンドを設定してください。

関連コマンド

ASSIGN、JOIN、LASTDRIVE（CONFIG.SYS のコマンド）

CHAPTER 4

外部コマンド

SWITCH

機　能

メモリスイッチの内容を変更/表示します。

解　説

メモリスイッチは、コンピュータ本体内の専用メモリに保持されているソフトウェア的なスイッチです。MS-DOSは起動時にメモリスイッチの内容を参照し、その設定に応じてさまざまなコマンドのデフォルト設定を決めます。したがって、システムを拡張するような増設機器を購入したとき、メモリを増設したとき、NDP(数値演算プロセッサ)を搭載したときなどは、必ずこのSWITCHコマンドでメモリスイッチの内容を変更してください。

SWITCHコマンドには、コマンドラインから指定する方法と、メニュー画面で操作する方法とがあります。

すべてのパラメータを省略して〝SWITCH〟とだけ入力するとメニュー画面が表示され、この画面上でパラメータを変更できます。この画面では、表示されるメッセージにしたがって操作してください。詳しくは、別冊の『インストールガイド』の「2.7 SWITCHコマンドの使い方」を参照してください。

注　意

- 本体のディップスイッチSW2-5をONにしないと、変更したメモリスイッチの内容は保持されません。
- メモリスイッチを変更した後は、ディップスイッチSW2-5がONになっていることを確認の上、リセットしてシステムを再起動してください。MS-DOSはその起動時にしかメモリスイッチを参照しないので、MS-DOSを再起動しないと変更したメモリスイッチの内容が有効になりません。
- ただし、「プリンタ」に関する設定のうち、ANKと漢字の印字比率はメモリスイッチに対する設定ではありません。そのため、これだけはリセットすると無効になるので、注意してください。
- メモリスイッチの中には、動作している画面モード(ハイレゾリューションモードとノーマルモード)によっては指定できないものがあります。
- ハイレゾリューションモードとノーマルモードの両方を持つ機種では、それぞれのモードで別々にメモリスイッチを設定してください。

関連コマンド

SPEED

外部コマンド

SYS

NET

機　能

システムファイル（IO.SYS と MSDOS.SYS）と COMMAND.COM を、指定したドライブにコピーします。

解　説

指定したドライブのディスクに、別のドライブにあるシステムファイル（IO.SYS と MSDOS.SYS）と COMMAND.COM を、この順にコピーします。「ドライブ 1」を省略した場合は、カレントドライブのルートディレクトリからコピーします。

＜例＞

ドライブ A のルートディレクトリにあるシステムファイルと COMMAND.COM を、ドライブ B にコピーする

```
SYS　A：　B：
```

注　意

受け側ドライブには、FAT の先頭から連続で 64K バイトの空きがあるか、またはすでにシステムファイルが存在しているかのどちらかでなければなりません。システムファイルはドライブの特定の場所に書かれている必要があるからです。

関連コマンド

FORMAT

内部コマンド

TIME

機　能

システムが管理する時刻を表示/設定します。

解　説

コンピュータ本体が内蔵しているシステム時計の時刻を表示したり、設定します。

システムが管理する時計の時刻は、ファイルを作成/更新したときにディレクトリに記録されます。また、BACKUPコマンドなど、システムの時計の時刻の情報を参照するコマンドもありますので正しい時刻を設定してください。

〝TIME〟とだけ入力すると、システム時計が現在保持している時刻が次のように表示されます。

```
現在の時刻は　〈hh〉:〈mm〉:〈ss〉.〈cc〉です.
時刻を入力してください:■
```

ここで、時刻を変更する必要がなければそのまま ↵ キーを押してください。変更する必要があるときは、時、分、秒をこの順でコロン(:)で区切りながら、数字で入力します。各数字の範囲は次の通りです。

〈hh〉	00〜23(時)
〈mm〉	00〜59(分)
〈ss〉	00〜59(秒)

TIMEコマンドのパラメータとして、コマンドラインに〈hh〉、〈mm〉、〈ss〉をコロン(:)で区切って指定する方法もあります。

注　意

秒の小数点以下(〈cc〉)は設定できません。表示はいつも〝00〟になります。

＜例＞

時刻を8時20分に変更する

```
TIME　8:20
```

関連コマンド

DATE

外部コマンド

TREE

機　能

指定されたドライブにあるディレクトリおよびファイルの名前を、ツリー構造の図とともに表示します。

解　説

指定したドライブのボリューム名、全ディレクトリのディレクトリ名と、そのサブディレクトリのパス名を表示します。ドライブ名を省略すると、カレントドライブについて表示します。

＜例＞
ドライブＢのすべてのボリューム名とディレクトリ名、あればそのサブディレクトリ名、および各ディレクトリに含まれる全ファイル名を表示する

```
TREE B: /F
```


内部コマンド

TYPE

機　能

指定されたテキストファイルの内容を、画面(標準出力)に表示します。

解　説

指定したドライブ、ディレクトリのテキストファイルの内容を、標準出力に出力します。通常、標準出力は画面に設定されているので、ファイルの内容は画面に表示されます。

1画面分以上の長さがあると、表示がスクロールします。表示を止めるには、［CTRL］＋［S］キーを押してください。どれかの文字キーを押すと表示を再開します。［CTRL］＋［C］キーを押すと表示を中止します。

ただしこのような場合は、MORE コマンドを使って1画面分ずつ表示する方が簡単です。

バイナリファイルは、TYPE コマンドでは正しく表示されません。DUMP コマンドをお使いください。

外部コマンド

UNDELETE

NET

機　能

DEL コマンドで誤って削除したファイルを復旧します。

解　説

UNDELETE コマンドは、DEL コマンドで削除されたファイルを復旧します。復旧の方法は2種類あります。

(1) DEL コマンドで削除されたファイルは、じつは削除されたことを表わすマークが付けられるだけで、内容は消失していません。このマークを検索し、見つかったら付け替えて復旧する方法です。
(2) MIRROR コマンドで作成されたファイル(削除追跡ファイルと呼びます)を利用して復旧する方法です。

(1)の場合、ファイルを削除した後で同じドライブに別のデータを書き込むと、残っていた前のファイルの内容に上書きされることがあります。この場合は前の内容が失なわれるので、復旧できなくなります。このため、誤って削除したら、他のコマンドやプログラムを実行せずに、すぐに UNDELETE コマンドを実行してください。

〝/DOS〞スイッチを指定して UNDELETE コマンドをしたときや、MIRROR コマンドによる削除追跡ファイルがない場合は、この方法で復旧します。このとき、削除したファイルの先頭の文字の入力を求めますので、入力してください。

(2)の場合は、(1)よりも高い確率で復旧できます。MIRROR コマンドを実行して以降に削除したファイルに関しては、情報がすべて削除追跡ファイルに書き込まれています。MS-DOS は削除追跡ファイルに書かれた場所は使わないようにするので、たとえファイルを削除した後にドライブに何か書き込んでも、前の内容が上書きされることはありません。また、ファイルの先頭の文字を入力させることもありません。〝/DT〞スイッチを指定して UNDELETE コマンドを実行したときや、MIRROR コマンドによる削除追跡ファイルが存在する場合は、この方法で復旧します。

〝/ALL〞スイッチを指定して UNDELETE コマンドを実行した場合には、(1)か(2)のどちらかの方法で復旧します。このとき、(1)の方法だけでしか復旧できなくてもファイルの先頭の文字を求めずに、〝#〞が付けられます。これで、もし同じ名前のファイルがあるときは、さらに〝%&−0123456789〞のいずれかの文字が付けられます(さらに同じ名前があるときは、A～Z が付けられます)。

注　意

UNDELETE コマンドは、削除したディレクトリの復旧はできません。

関連コマンド

MIRROR、UNFORMAT、DEL

外部コマンド

UNFORMAT

NET

機　能

FORMAT コマンドで誤って初期化してしまったフロッピィディスクを復旧します。固定ディスクの場合は、誤って領域解放してしまった領域の分割情報を復旧します。

解　説

UNFORMAT コマンドが MIRROR コマンドで作成されたファイルを使えるときは、このファイルの作成された日付と時間を表示し、これにしたがって再構築するかどうか確認します。

MIRROR コマンドで作成されたファイルが存在しないときやそれを使わないときは、そのドライブのルートディレクトリとファイルアロケーションテーブル(FAT)を調べて復旧します。ただし、これで完全に復旧できる保証はないので、万一に備えて MIRROR コマンドを実行しておくことをおすすめします。

実行中に障害(スキップセクタ)を含むファイルを見つけたときは、これをできるかぎり復旧するか、削除するか確認します。こうしたファイルは、一度 RECOVER コマンドで復旧を試みてください。

FORMAT コマンドで領域を解放した直後であれば、MIRROR コマンドに〝/PARTN″スイッチを付けて実行したときに作成される〝PARTNSAV.FIL″というファイルで領域解放前の状態に復旧することができます。UNFORMAT コマンドに〝/PARTN″スイッチを付けて実行してください。しかし、解放した領域に重ねて領域を確保してしまっていると復旧できません。

関連コマンド

MIRROR、UNDELETE、FORMAT、RECOVER

外部コマンド

USKCGM

機　　能

ユーザー定義文字(外字)の文字パターンを作成したり、それを外字ファイルに保存します。また、作成した文字パターンや外字ファイルのパターンを、コンピュータ本体内の専用メモリに読み込んで登録したり、プリンタに送って印字できるようにします。

解　　説

USKCGMコマンドは、ユーザーが定義する文字パターン(ユーザー定義文字、または外字)を作成したり、ファイルに保存したり、ファイルから読み込んだりするユーティリティです。また文字パターンをメモリに読み込んだりプリンタに送ったりすることもできます。

ファイル名を指定すると､指定されたファイルを外字ファイル(ユーザー定義文字パターンを格納したファイル)とみて読み込み､その内容をコンピュータ本体内のメモリに登録します。

すべてのパラメータを省略して〝USKCGM〞とだけ入力すると、メニュー画面が表示されます。この画面では、表示されるメッセージにしたがって操作してください。詳細は、『日本語入力ガイド』を参照してください。

内部コマンド

VER

機　能　MS-DOS のバージョン番号を表示します。

解　説　現在利用している MS-DOS のバージョン番号を知りたいときに使います。

関連コマンド　SETVER

内部コマンド

VERIFY

機　能

ドライブにデータを書き込むときに、ベリファイ(照合)するかどうかを設定します。

解　説

VERIFYコマンドは、MS-DOSがデータを書き込むときに、正しくデータが書き込まれているかどうかをチェックする〝ベリファイ(照合)〟をするかどうかを設定したり、現在ベリファイをするように設定されているかどうかを表示させたりするコマンドです。

VERIFYを〝ON〟にすると、ドライブにデータを書き込むごとに正しく書き込まれているか(書き込み誤りがないかどうか、スキップセクタがないかなど)を検査します。

デフォルトは〝OFF〟(ベリファイをしない)です。ベリファイの状態は、再びVERIFYコマンドで変更するまで変わりません。

現在のベリファイの状態を知りたい場合は、単に〝VERIFY〟とだけ入力してください。

注　意

VERIFYを〝ON〟にすると、データを書き込むごとにベリファイしますので、多少処理時間が長くなります。

内部コマンド

VOL

機　能

ドライブのボリュームラベルを表示します。

解　説

指定したドライブのボリュームラベルを表示します。ボリュームラベルは、FORMAT コマンドの"/V"スイッチや LABEL コマンドで設定します。ドライブ名を省略すると、カレントドライブのボリュームラベルを表示します。

関連コマンド

FORMAT、LABEL

CHAPTER 4

外部コマンド

XCOPY

機　能

ファイルとディレクトリを、サブディレクトリも含めて高速にコピーします。

エラーレベル

0　正常終了
1　コピー元のファイルが見つからない
2　CTRL + C キーによって中断された
4　初期化エラー(メモリ不足、書式のまちがい、ファイルやパスが見つからない)
5　システムコールの INT　24 エラー(ディスクの読み書きエラー)が発生

解　説

XCOPY コマンドは COPY コマンドと異なり、アーカイブ属性や日付でファイルを選択してコピーしたり、サブディレクトリの内容までコピーできるので、より効率的にドライブ内容をコピーできます。

送り側は、ドライブ名、ディレクトリ名、ファイル名のいずれか 1 つは必ず指定しなければなりません。ドライブ名だけを指定するとそのドライブに含まれるすべてのファイルとディレクトリが、パス名だけを指定するとそのディレクトリに含まれるすべてのファイルとサブディレクトリがコピーされる対象になります。

受け側のドライブ名、ディレクトリ名、ファイル名はいずれも省略できます。省略するとカレントドライブのカレントディレクトリがコピー先になります。

XCOPY コマンドは、コピー先の指定がファイル名であるともディレクトリ名であるともとれるときには、確認のメッセージを表示します。

"/D"スイッチで指定する日付の書式は、DATE コマンドと同じです。

＜例＞

ドライブ A にあるアーカイブ属性の付いたすべてのファイルとディレクトリをドライブ B にコピーし、コピー終了後、コピー元になったファイルのアーカイブ属性を解除する

```
XCOPY　A:¥　B:¥　/S　/M
```

アーカイブ属性はファイルを作成/更新したときに自動的に付けられますから、これによって、前回に XCOPY コマンド(または BACKUP コマンド)で保存してからのち、作成/更新したファイルだけを選んで保存できます。

COPY、ATTRIB、BACKUP

CHAPTER 4

4.2 バッチ処理用コマンド

この項では、バッチ処理用のコマンドを解説します。バッチ処理用コマンドはすべて内部コマンドで、バッチファイル内だけに限らず、通常のコマンドと同じようにコマンドラインから使うこともできます。特に、FOR コマンドや ECHO コマンドは、コマンドラインから使っても便利なコマンドです。

また、MS-DOS コマンドの BATKEY コマンドも、バッチファイルに使用すると便利です。

コマンド	機　能
CALL	バッチファイルの中から他のバッチファイルを呼び出す
ECHO	コマンドをエコーするかどうかの設定と、文字列の表示
FOR	反復処理のための制御コマンド
GOTO	ラベルの位置にバッチ処理の流れを移すための制御コマンド
IF	バッチ処理内の条件判断
PAUSE	バッチ処理の一時停止
REM	バッチファイル中の注釈行
SHIFT	バッチ処理中のパラメータのシフト

以降で、各コマンドについて詳しく解説します。

内部コマンド

CALL

機　　能

バッチファイルの中から、そのバッチファイルを終了せずに他のバッチファイルを呼び出します。

解　　説

一般に、バッチファイル内でバッチファイルを呼び出すと、呼び出されたバッチファイルに制御が渡った後は元のバッチファイルには戻りません。しかしこのCALLコマンドを使って呼び出すと、CALLコマンドで呼び出したバッチファイルの実行が終わると、元のバッチファイルの次のコマンドから実行を再開します。呼び出すバッチファイルに渡すパラメータも記述できます。

<例>

〝A：¥BAT〟にある〝CHKSYS.BAT〟を、仮パラメータ〝%1〟と〝/S〟スイッチ付きで実行する

```
CALL  A：¥BAT¥CHKSYS  %1  /S
```

注　　意

・CALLコマンドで呼び出されるバッチファイルは、拡張子が〝.BAT〟でなければなりません。
・CALLコマンドで呼び出されるバッチファイル中にCALLコマンドを使うこともできます。また、終了条件がしっかりしてさえいれば、自分自身(CALLコマンドが記述してあるバッチファイル)を再帰的に呼び出すことも可能です。
・〝%0〟～〝%9〟の仮パラメータと環境文字列は、CALLコマンドで呼び出されたバッチファイルにもそのまま渡されます。
・CALLコマンドのコマンドラインでは、リダイレクト、パイプを使うことはできません。

内部コマンド

ECHO

機　能

バッチファイルの実行中に、コマンド名を表示するかどうかを設定します。また、指定したメッセージを表示することもできます。

解　説

ECHO コマンドは、バッチファイルの実行時に、バッチファイル中に書かれた各コマンド行を標準出力に出力するかどうかを設定します。

デフォルトは〝ON〞で、バッチファイルの実行時に、実行しようとするコマンドを画面(標準出力)に出力します。〝OFF〞に設定すると、この表示をしません。

パラメータを省略して〝ECHO〞だけを入力すると、現在の ECHO の状態(ON または OFF)を表示します。

引数に指定したメッセージは標準出力に出力されます。

ECHO コマンドもコマンドなので、バッチファイルの最初で ECHO を〝OFF〞に設定しても、〝ECHO　OFF〞という文字列だけは表示されてしまいます。これも表示したくないときは、ECHO コマンドの先頭に〝@〞マークを付けて、

```
@ECHO　OFF
```

とします。MS-DOS は、先頭に〝@〞マークがあるコマンドは、ECHO が〝ON〞でも表示しません。

注　意

- ECHO の ON、OFF の状態は、そのバッチファイルの中だけで有効です。
- ECHO が〝OFF〞に設定されていると、バッチファイル中で使用した REM コマンドや PAUSE コマンドのメッセージも表示されません。ただしバッチファイル内で実行しているコマンド自身が表示するメッセージ(ECHO コマンドで表示するメッセージも含む)は、ECHO の設定状態にかかわらず表示されます。

関連コマンド

PAUSE、REM

内部コマンド

FOR

機　能　指定された項目を使って、コマンドを反復処理します。

解　説　FOR コマンドは、カッコで囲んだファイルのセットに対して、指定したコマンドを反復実行します。複数のファイルを一括して処理(たとえばファイルのコピーや削除など)したいときに利用します。

FOR コマンドはバッチ処理用コマンドですが、コマンドラインからでも使えます。特に、ワイルドカードが使えないコマンドに使うと便利です。

変数は、FOR コマンド内でファイルセットの各ファイルに置き替えられます。英字1文字で指定してください。

ファイルのセットには、複数個のファイルをカンマ(,)やスペース(全角または半角の空白)で区切って実行したい順に並べます。

（ファイル名，ファイル名，…）

各ファイル名には、ワイルドカードを使用することができます。

FOR コマンドは、変数にファイル名を1つずつ代入して、指定されたコマンドを実行します。

<例>

カレントディレクトリにある拡張子が"EXE"、"COM"、"SYS"のファイルを、この順に ATTRIB コマンドでリードオンリー属性にする

```
FOR  %F  IN  (*.EXE, *.COM, *.SYS)  DO  ATTRIB  +R  %F
```

この例は、コマンドラインで直接実行するときの書式です。バッチファイル中では、"%"記号を2つ続けて指定してください(この例では%%F のようにします)。COMMAND.COM は"%"記号をコマンドライン上の引数の印と解釈し、バッチファイルを実行するときに記号を1つ取り去るからです。

注　意　FOR コマンドはネストできません。つまり、FOR コマンドで指定するコマンドに FOR コマンドを指定することはできません。

内部コマンド

GOTO

機　能

バッチ処理の流れを、ラベルで定義されている位置に移します。

解　説

GOTO コマンドは、指定したラベルの行に無条件に制御を移すコマンドです。IF コマンドと組み合わせれば、ループ処理や条件ジャンプもできます。

ラベルが定義されていないと、"ラベルが見つかりません."とメッセージを表示してバッチファイルの実行を終了します。

ラベルは、バッチファイル中のコロン(：)で始まる行で、最初の8文字までがラベルとして識別されます。ラベルに指定する文字列には、ピリオド(.)は使えません。

ラベル行は GOTO コマンドのラベルとして働く他は無視されるので、バッチファイル中のコメントとしても利用できます。

関連コマンド

IF、SHIFT

内部コマンド

IF

機　能

指定した条件に応じてバッチ処理を行います。

解　説

IF コマンドは、指定した条件が真のとき("NOT"があわせて指定されていれば条件が偽のとき)に、指定されたコマンドを実行します。次の条件を指定できます。

(1) ERRORLEVEL　番号

エラーレベル(ERRORLEVEL)は、直前に実行したコマンドが返す終了コードです。このコードが「番号」と同じかそれより大きいとき、真となります。

エラーレベルを返さないコマンドは、エラーレベルがつねに0か、あるいは不定なので、ERRORLEVEL を比較しても意味がありません。

(2) 文字列1＝＝文字列2

「文字列1」と「文字列2」が同じときに真となります。文字列には区切り記号(カンマ、スペース、タブ文字など)を含めることはできません。また、大文字と小文字は区別されます。

文字列には、バッチファイルのパラメータ(%1～%9)や"%"記号で囲んだ環境変数も指定できます。

(3) EXIST　ファイル名

指定した名前のファイルが存在するときに真となります。ファイル名にはワイルドカードも指定できます。また、ドライブ名やパス名を付けることもできます。

＜例＞

%1(そのバッチファイルの最初のパラメータ)が空の(存在しない)ときに ECHO コマンドを実行する

```
IF  "%1"  ==  ""  ECHO  パラメータがありません
```

変数をダブルクォート("")で囲んでいるのは、空であることを表現するためです。ダブルクォートを使わないで

```
IF  %1  ==    ECHO  パラメータがありません
```

とすると、「＝＝」の右側の引数がないと解釈されてエラーになります。この意味では、ダブルクォートでなければならない理由はなく、バッチファイル実行の際に COMMAND.COM が特別な意味に解釈しない文字列ならかまいません。

CHAPTER 4

＜例＞

環境変数 HOME が定義されていれば CD コマンドを実行する

```
IF NOT "%HOME%" == "" CD %HOME%
```

環境変数を用いるときは、〝%〞記号で囲んで指定します。また〝NOT〞を利用すれば、等しいときに偽となります。

＜例＞

Y キーが押されたら〝yes〞を、N キーが押されたら〝no〞を画面に表示する

```
@echo off
:start
batkey 1 > nul
if errorlevel == 255 goto no
echo yes
goto start
:no
echo no
goto start
```

エラーレベルの数字は、考えられる大きい方の値から比較しなければなりません。IF コマンドの判定条件が「～かそれ以上」となっているからです。

関連コマンド　GOTO、SHIFT、BATKEY

内部コマンド

PAUSE

機　能　バッチ処理の実行を一時停止し、キー入力を待ちます。

解　説　バッチ処理がPAUSEコマンドに達すると、

準備ができたらどれかキーを押してください...

と表示し、キー入力を待ちます。ここでCTRL＋Cキー以外のキーを押すと、バッチ処理を続けます。CTRL＋Cキーを押すと、バッチ処理を中止することができます。

PAUSEコマンドのパラメータとしてコメントを指定しておくと、確認のメッセージの前にコメントも画面に表示します(ただしECHOが"ON"のとき)。これによって操作の指示を与えることなどができます。

注　意

・コメントは、ECHOが"OFF"のときは表示されません。
・リダイレクト記号(<、>)やパイプ記号(|)など、MS-DOSにとって意味のある記号をコメントに含めることはできません。

関連コマンド　ECHO

内部コマンド

REM

機　能

バッチファイル中の注釈行(コメント)を書くときに使用します。また、コメントを画面に表示することもできます。

解　説

REMコマンドは、ECHOが"OFF"の状態ではコメントは表示されないので、バッチファイルを読みやすくするためのコメントとして利用できます。ECHOが"ON"のときはコメントが表示されるので、メッセージを表示するときなどに利用できます。

PAUSEコマンドと同じように、リダイレクト記号(<、>)やパイプ記号(|)などのMS-DOSにとって意味のある記号をコメントに含めることはできません。

GOTOコマンドで使用するラベルも、コメントとして利用することもできます。ラベルについてはGOTOコマンドを参照してください。

関連コマンド

GOTO、ECHO

内部コマンド

SHIFT

機　能　バッチファイルのパラメータ(%0～%9)を 1 つずつずらします。

書　式　SHIFT

SHIFT コマンドは、バッチファイルの実行時にコマンドラインで指定された(およびバッチファイルのコマンド名自身が入った)パラメータの内容と番号(%0～%9)との対応を 1 つずつずらすコマンドです。

バッチファイル中で使えるパラメータは%0～%9 までです。そして、バッチファイルの実行当初には、%0 にそのバッチファイル名、%1～%9 にバッチファイルのコマンドラインで指定したパラメータが左から順に入っています。

SHIFT コマンドは、この対応を 1 つずつずらして、%0 に以前の%1 の内容、%1 に以前の%2 の内容……を対応させます。直前まで%0 に入っていた内容は捨てられ、コマンドラインで指定したパラメータが残っていれば%9 にはそれが入ります。残っていなければ空になります。

これによって、バッチファイルのコマンドラインに 10 個以上のパラメータを利用することもできます。

4.3 CONFIG.SYS のコマンド

ここでは、CONFIG.SYS ファイルで使うコマンドについて解説します。

CONFIG.SYS ファイルは、デバイスドライバの登録や各種の MS-DOS の設定を行うテキストファイルです。CUSTOM コマンドで作成することもできますが、MS-DOS に添付の sedit などのエディタでつくることもできます。

CONFIG.SYS のコマンドには、次のようなものがあります。

コマンド	内　容
BREAK	CTRL + C キーが押されたかどうかをチェックするレベルを設定
BUFFERS	ディスクバッファの数を設定
DEVICE	デバイスドライバの組み込み
DEVICEHIGH	UMB メモリにデバイスドライバを組み込む
DOS	ハイメモリ領域と UMB メモリの使用
FCBS	FCB による方法で同時にオープンするファイルの数を設定
FILES	ファイルハンドルによる方法でオープンできるファイル数を設定
INSTALL	メモリに常駐するコマンドをロード
LASTDRIVE	アクセス可能な最大のドライブ数を設定
REM	注釈行
SHELL	指定したファイルをコマンドプロセッサ(シェル)として実行

以降で、各コマンドについて詳しく解説します。

BREAK

機　能

CTRL ＋ C キーが押されたかどうかをチェックするレベルを設定します。

書　式

BREAK＝[ON | OFF]

解　説

通常 CTRL ＋ C キーは、実行中のプログラムを中止するときに使います。BREAK コマンドは、どういうときに CTRL ＋ C キーで中止できるかを設定します。

BREAK を"OFF"に設定すると、CON デバイスでの入出力(キーボード入力とディスプレイへの表示)とプリンタ出力のときだけ CTRL ＋ C キーで中止することができます。BREAK のデフォルトは"OFF"です。

BREAK を"ON"に設定すると、ディスク入出力などを含めたすべての場合に CTRL ＋ C キーで中止することができます。ただし、つねに CTRL ＋ C キーを監視することになるので、処理速度は少し低下します。

BUFFERS

機　能　ディスクバッファの数を設定します。

書　式　BUFFERS＝〈n〉[,〈m〉]

解　説

MS-DOSは、ディスクにデータを入出力するとき、一時的に本体メモリの中の「ディスクバッファ領域」と呼ばれる領域にデータを格納します。ディスクバッファの数とはこの領域の大きさのことで、〈n〉で指定します。〈n〉を大きくすると(ディスクバッファの数を増やすと)、ディスクへのアクセス回数を減らすことができ、全体のディスク入出力を速くすることができます。しかし、バッファの数を増やせば増やすだけ、プログラムの使える領域が減ることにもなります。〈n〉に設定できる数は1〜99です。

〈m〉は、二次的なバッファで、これも大きくするとディスクへのアクセスが速くなります。指定できる範囲は0〜8で、デフォルト値は0です。

＜例＞　BUFFERS＝20

DEVICE

機　能

デバイスドライバを組み込みます。

書　式

DEVICE＝[〈d：〉][〈パス名〉]〈デバイスドライバのファイル名〉[〈オプション〉]

解　説

デバイスドライバとは、デバイス(周辺機器)とコンピュータとの入出力をコントロールするためのソフトウェアのことです。デバイスドライバをDEVICEコマンドやMS-DOSコマンドのADDDRVコマンドで組み込んでおかないと、デバイスが使用できません。

＜例＞

プリンタを利用するためのデバイスドライバ"PRINT.SYS"を組み込む

```
DEVICE=PRINT.SYS
```

DEVICEHIGH

機　能　UMB メモリにデバイスドライバを組み込みます。

書式 1　DEVICEHIGH＝[<d：>][<パス名>]<デバイスドライバのファイル名>[<オプション>]

書式 2　DEVICEHIGH　SIZE＝<nnnn>　[<d：>][<パス名>]<デバイスドライバのファイル名>[<オプション>]

解　説

デバイスドライバを UMB メモリに組み込みます。これによって、メインメモリの容量を減らさずに済みます。ただし、UMB メモリが不足していて、デバイスドライバを組み込めないときは、DEVICE コマンドと同様にメインメモリに組み込みます。

このコマンドを使うときは、前もって CONFIG.SYS ファイルで DOS コマンドを実行して、UMB メモリを有効にしておかなければなりません。

DEVICEHIGH コマンドで指定したデバイスドライバが UMB メモリからあふれて、アクセスしようとするとシステムがハングアップすることがあります。この場合には、書式 2 を使ってデバイスドライバが必要とするサイズを指定します。

パラメータの<nnnn>には、サイズを 16 進数のバイト数で指定します。デバイスドライバが必要とするメモリサイズは、MS-DOS コマンドの MEM コマンドで類推することができます。

＜例＞

サイズを 8000(10 進数で 32768)バイトとして、〝A：¥DEV〟にある〝MYDRV.SYS〟というデバイスドライバを組み込む

```
DEVICEHIGH　SIZE=8000　A：¥DEV¥MYDRV.SYS
```

CHAPTER 4

DOS

機　能

ハイメモリ領域(HMA)に DOS の一部をロードします。また、UMB メモリを有効にします。

書　式

```
DOS=[HIGH | LOW][,][UMB | NOUMB]
```

解　説

〝DOS=HIGH″とすると、ハイメモリ領域(HMA)に MS-DOS のシステムの一部をロードします。これによって、その分だけメインメモリの空き容量が増えることになります。〝DOS=LOW″の状態では、従来通りメインメモリに MS-DOS のシステムを格納します。デフォルトは〝LOW″です。

〝DOS=UMB″とすると、UMB メモリが有効になり、CONFIG.SYS ファイルで DEVICEHIGH コマンドや LOADHIGH コマンドが利用できるようになります。〝DOS=NOUMB″の状態では、これらのコマンドは利用できません。デフォルトは〝NOUMB″です。

パラメータは、カンマで区切って一度に指定することもできます。

＜例＞

MS-DOS のシステムの一部をハイメモリ領域にロードし、同時に UMB メモリを有効にする

```
DOS=HIGH,UMB
```

注　意

- 〝DOS=HIGH″を指定するには、XMS ドライバ(HIMEM.SYS)を前もって CONFIG.SYS ファイルで組み込んでおかなければなりません。
- 〝DOS=UMB″を指定するには、XMS ドライバ(HIMEM.SYS)と仮想 8086 モード用 EMS ドライバ(EMM386.EXE)を前もって CONFIG.SYS ファイルで組み込んでおかなければなりません。このとき、EMM386.EXE には〝/UMB″スイッチを付けてください。
- UMB メモリは、386 以上の CPU を搭載した機種でなければ使用できません。

FCBS

機　能

FCB を使って同時にオープンできる最大のファイルの数を設定します。

書　式

FCBS＝<n>

解　説

FCB(ファイルコントロールブロック)は、MS-DOS の古いバージョン(バージョン2.11 以前)で使用されていたファイルオープンの機構です。現在の MS-DOS では次項の"FILES"コマンドで指定する「ファイルハンドル」によるファイルオープンの機構が推奨されているので、FCB を使用することはほとんどありません。

それでも以前に開発されたアプリケーションソフトの中には FCB によるファイルの管理をしているものもありますので、そのようなアプリケーションソフトを使用する可能性がある場合は FCBS の設定が必要です。

<n>は、FCB によって同時にオープンできる最大のファイルの数を指定します。デフォルト値は 4 で、設定できる値は 1～255 です。

CHAPTER 4

FILES

機　能　ファイルハンドルによる方法でオープンできる最大のファイルの数を設定します。

書　式　FILES＝〈x〉

解　説　現在の MS-DOS で推奨されている「ファイルハンドル」を使用した方法でオープンできる最大ファイル数を設定します。〈x〉で設定できる値は 8～255 で、デフォルト値は 8 です。通常は 20 くらいに設定します。

＜例＞
同時にオープンできるファイル数を 20 に設定する

```
FILES=20
```

MS-WINDOWS 3.0 を使用する場合は、FILES を〝30″以上に設定してください。

INSTALL

機　能

メモリに常駐するプログラムをロードします。

書　式

INSTALL＝[〈d：〉][〈パス名〉]〈ファイル名〉[〈オプション〉]

解　説

MS-DOS の常駐コマンドである FASTOPEN、SHARE などのコマンドを、CONFIG.SYS ファイル内で実行し、メモリに常駐させます。

〈ファイル名〉には、各コマンドのファイル名を拡張子を含めて指定してください。〈オプション〉には、常駐させるプログラムが必要としているオプションを指定してください。

COMMAND.COM 上で(AUTOEXEC.BAT ファイルなどの中から)常駐プログラムを組み込むより INSTALL コマンドを使った方が、常駐するサイズが少し減って若干のメモリを節約できます。INSTALL コマンドで実行した常駐プログラムには環境エリアが付かないからです。

ただし、INSTALL コマンドで常駐させるとうまく動作しなくなるプログラムもあります。環境変数を参照しながら動作するプログラムはうまく動作しません。また、ショートカットキーを参照したり、致命的なエラーの処理に COMMAND.COM を必要とするプログラムは、INSTALL コマンドで常駐させないでください。

＜例＞

FASTOPENコマンドを、オプション〝C：＝100″を付けて実行、メモリにロードする

```
INSTALL＝FASTOPEN.EXE　c：＝100
```

CHAPTER 4

LASTDRIVE

機　能

仮想ドライブを含め、アクセス可能な最終論理ドライブ名を設定します。

書　式

LASTDRIVE＝〈x〉

解　説

〈x〉には、仮想ドライブを含め、MS-DOS がアクセスする最後のドライブ名を指定します。〈x〉には A〜Z までのドライブ名文字を指定できますが、実際に接続されている最後のドライブより小さい値を設定することはできません。

ネットワークなどに接続されているドライブや、ASSIGN、SUBST コマンドで設定した仮想ドライブを使用するときには、実際に（物理的に）接続されているドライブよりも多くのドライブ名が必要です。このようなときに、LASTDRIVE コマンドで最終ドライブ名を指定します。

デフォルトは〝E〟なので、LASTDRIVE コマンドの設定がないと、MS-DOS は 5 つのドライブ（A〜E）を認識します。ただし、実際に接続しているドライブが 6 つ以上の場合、デフォルト値はその実ドライブの最後の値となります。

設定を多くするとその分メモリを消費するので、仮想ドライブを使用する可能性がないときには LASTDRIVE コマンドを実行しない方がよいでしょう。

＜例＞

アクセス可能な最終ドライブ名を〝M〟に設定する

```
LASTDRIVE=M
```

REM

機　能　CONFIG.SYS ファイル内の注釈行です。

書　式　REM　〈注釈〉

解　説　〈注釈〉には、任意の文字列を書くことができます。CONFIG.SYS ファイル内でわかりやすくコメントを書いたり、当面必要のないコマンドをファイルから消さないで無効にする場合に使います。

SHELL

機　能　指定したファイルをコマンドプロセッサ(シェル)として実行します。

書　式　SHELL＝[〈d：〉][〈パス名〉]〈コマンドプロセッサのファイル名〉[〈オプション〉]

解　説　システムが使用するコマンドプロセッサのファイル名とその場所を指定します。MS-DOS の標準のコマンドプロセッサは〝COMMAND.COM〞で、MS-DOS を起動したドライブのルートディレクトリからロードされます。SHELL コマンドを使うと、他のドライブやディレクトリからロードすることもできます。

SHELL コマンド自体はオプションスイッチをもっていませんが、指定したコマンドプロセッサがスイッチを必要とする場合は〈オプション〉に指定してください。コマンドプロセッサに COMMAND.COM を使用する場合は、〈オプション〉に〝/P〞スイッチを指定してメモリ中に常駐するようにするのがふつうです。

また COMMAND.COM では、環境変数のためのメモリ領域(環境エリア)の大きさを〝/E〞スイッチで指定することができます。詳しくは COMMAND コマンドの項を参照してください。

SHELL コマンドで指定したドライブ名、パス名、コマンドプロセッサのファイル名などは、環境変数の〝COMSPEC〞に記録されます。

＜例＞

コマンドプロセッサとして〝COMMAND.COM〞を使用し、ドライブ A のルートディレクトリからロードする。同時に環境エリアの大きさは 320 バイトに設定する

```
SHELL＝A：¥COMMAND.COM　A：¥　/E：320　/P
```

CHAPTER 4

第５章
日本語入力リファレンス

アルファベットや数字、カタカナなどは、キーボードのキーを押すだけで入力することができます。しかし、ひらがなや漢字を入力するためには特別な機能が必要です。

MS-DOS には、ひらがな、漢字などを入力するための日本語入力機能が付いています。バッチファイルにメッセージを入力するとき、エディタで文書を作成するときなど、日本語入力機能を使うと自由に日本語を入力することができます。

この章では、日本語入力機能の使い方を簡単に説明します。詳しくは、別売の『日本語入力ガイド』を参照してください。

CHAPTER 5

5.1 入力の方法

日本語は次の順序で入力します。

「読み」を入力する　→　漢字、ひらがななどに変換する　→　確定する

ここではまず、読みの入力のしかたを説明しましょう。

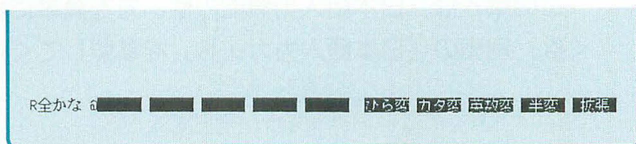
日本語入力モードに入る/出る

日本語入力機能を使える状態のことを、「日本語入力モード」と呼びます。日本語を入力するには、まず日本語モードに入ることが必要です。

日本語入力モードに入るには、CTRL キーを押しながら XFER キーを押します(以降、このような操作を「CTRL + XFER キーを押す」と記述します)。

日本語入力モードから出て元の状態に戻るには、もう一度 CTRL + XFER キーを押します。

日本語入力モードに入ると、画面のいちばん下の行が次のようになります。



日本語入力モードに入ったときのガイドライン表示。

この表示を「ガイドライン」と呼びます。

注意

「(16 進)」と表示された場合は、日本語入力システムが組み込まれていません。MS-DOS の CUSTOM コマンドで日本語入力を指定するか、ADDDRV コマンドを使って日本語入力システムを組み込んでください。

「辞書の指定が不正です」と表示された場合は、辞書ファイル(NECAI.SYS)の存在するドライブとパス名を正しく入力してください。

参考

ガイドラインに表示されている 10 個の枠は、それぞれ f·1 〜 f·10 キーの機能を表わしています。

ファンクションキーへの機能の割り付けは、NECAIKEY コマンドで変更することができます。NECAIKEY コマンドについては、別売の『日本語入力ガイド』を参照してください。

ガイドラインの先頭の表示の意味は次の通りです。

・R …… ローマ字入力可

「R」が表示されているときは、読みをローマ字で入力できます。

表示されていないときは、英字を入力するとそのまま英字として入力されます。

次のように切り替えます。

①日本語入力モードにして、f･10 キーを押します。

②← → キーで「4.ローマ字切替」に反転表示を合わせて ⏎ キーを押します。

・全／半 …… 全角／半角文字の入力

「全」と表示されているときは、入力した文字が全角文字で表示されます。

「半」と表示されているときは、入力した文字が半角文字で表示されます。

日本語入力モードで SHIFT ＋ f･9 キーを押して切り替えます。

・かな／カナ／英数 …… 表示する文字の種類

「かな」と表示されているときは、入力した文字がひらがなで表示されます。

「カナ」と表示されているときは、入力した文字がカタカナで表示されます。

「英数」と表示されているときは、入力した文字が英数字で表示されます。

日本語入力モードで SHIFT ＋ f･6 キーを押すと「かな」に、SHIFT ＋ f･7 キーを押すと「カナ」に、SHIFT ＋ f･8 キーを押すと「英数」になります。

・@ …… AI かな漢字変換を使用

「@」が表示されているときは、AI かな漢字変換が使用できます。

表示されていないときは、AI かな漢字変換を使用しません。

AI かな漢字変換は、前後の文節の意味のつながりをもとに、同音異義語の中からふさわしい語を自動的に選び出して変換する機能です。

参考

CONFIG.SYS ファイルを書き替えるには、MS-DOS の CUSTOM コマンドが便利です。CUSTOM コマンドの操作については、別冊の『インストールガイド』「2.8　CUSTOM コマンドの使い方」を参照してください。

読みの入力

日本語入力モードでは、日本語をまず「読み」で、つまり発音の通りに入力し、次に希望の種類の文字に変換します。

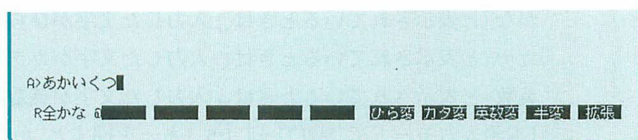
●ローマ字入力とカナ入力

読みの入力のしかたには、ローマ字で入力する「ローマ字入力」と、カナで入力する「カナ入力」があります。

日本語入力モードに入ると、最初はローマ字入力ができる状態になっています。カナ入力に切り替えるときは、カナ キーを押してロックします。もう一度押すとロックが解除され、ローマ字入力に戻ります。

たとえば、「赤い靴」と入力する場合は次のようにします。

・ローマ字入力　…　「akaikutu」と入力します。
・カナ入力　　　…　カナ キーを押してロックし、「アカイクツ」と入力します。



読みを入力したところ。まだ変換していない。

まちがいを修正する

読みをまちがえて入力したときは、まちがえた箇所を削除して入力し直します。削除のしかたは次の３通りです。

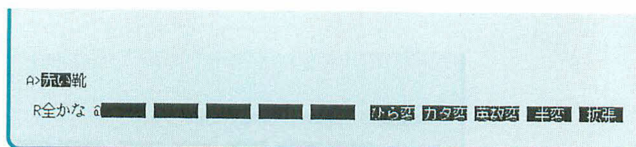
・文末を修正する（BS キー）
　BS キーを押すとカーソルの前の文字が１文字ずつ削除されます。

・文中を修正する（← → DEL キー）
　← → キーで削除する文字にカーソルを合わせます。
　DEL キーを押すとカーソル位置の文字が１文字ずつ削除されます。
　ここで正しい文字を入力すると、カーソル位置に文字が挿入されます。
　修正が終わったら、→ キーでカーソルを読みの右端まで移動しておきます。

・入力した読みを取り消す（ESC キー）
　ESC キーを押すと入力した読みが一度に取り消されます。もう一度入力し直したいときに便利です。

5.2 漢字に変換する —— スペース／XFER

読みを入力したら、スペースキーまたは XFER キーを押して漢字に変換します。



変換してみたところ。最初の候補が表示されている。

参考

- 句読点(、。,. など)を入力すると、スペースキー、XFER キーを押さなくても自動的に漢字に変換されます。
- 「ピアノ」「コップ」などの外来語は変換するとカタカナで表示されます。

一度の変換で希望する漢字が表示された場合は、⏎ キーを押して確定します。

希望する漢字が表示されなかった場合、いくつかの原因が考えられます。次の3つの中から当てはまるものを探して、それぞれの指示にしたがって修正してください。

・原因 1 …… 読みをまちがえて入力した

ESC キーを押すと変換前の状態に戻ります。「5.1　入力の方法」の「まちがいを修正する」を参照して修正してください。

・原因 2 …… 同音異義語に変換されている文節がある

「5.3　変換対象の文節を変更する」を参照して変換し直したい文節を反転表示させ、「5.4　他の漢字に変換する」を参照して他の漢字に変換します。

・原因 3 …… 文節の区切り方がまちがっている

「5.5　文節を区切り直す」を参照して文節を区切り直します。

参考

MS-DOS のプロンプトが出ている状態で日本語を入力して ⏎ キーを押すと、「コマンドまたはファイル名がちがいます.」と表示されます。これは、入力した日本語のファイル名のコマンドがないことを示すメッセージですので、ここでは無視してかまいません。

CHAPTER 5

5.3 変換対象の文節を変更する──[↑]、[↓]／[NFER]

希望通りに変換されていない文節があるときは、その文節に反転表示を合わせます。[↓]（または[NFER]）キーを押すと右に、[↑]キーで左に反転表示が移動します。

```
A>思った通りに返還されていない文節がある。
R全かな                ひら変 カタ変 英数変 半変 拡張
```

```
A>思った通りに返還されていない文節がある。
R全かな                ひら変 カタ変 英数変 半変 拡張
```

文節の切れ目を変更する前と変更した後。

反転表示された文節は、他の漢字に変換し直すことができます。

注意

最後（右端）の文節が反転しているときに[↓]（または[NFER]）キーを押すと確定されます。

CHAPTER 5

5.4 他の漢字に変換する —— スペース／【XFER】

　希望する漢字と異なる漢字に変換されたときは、再度スペースキーまたは【XFER】キーを押します。反転している文節が他の漢字に変わります。

A>思った通りに反響されていない文節がある。
R全かな ａ　ひら変　カタ変　英数変　半変　拡張

A>思った通りに変換されていない文節がある。
R全かな ａ　ひら変　カタ変　英数変　半変　拡張

スペースキーを押すと次の候補に再変換できる。

　スペースキーまたは【XFER】キーを押すたびに表示される漢字が変わります。何回か押して希望の漢字が表示されたら、【↵】キーを押して確定します。

同音異義語が多い場合

　たとえば「かく」などのように同音異義語が多い読みは、スペースキーまたは【XFER】キーを何度か押すと、画面の下の方に同音異義語の一覧が表示されます。

A>確と読むとは大違い。
R全かな ａ　1確と 2かくと 3斯くと 4賀来と 5画と 6書くと 7欠くと 8描くと

同じ読みに対する同音異義語の一覧は、ガイドライン上に表示される。

CHAPTER 5

このときは、次のキーを使って希望の漢字を選びます。

キー	動作
1 ～ 9 キー	その番号の付いた漢字を選択する
⏎ キー	反転している漢字を選択する
← → キー	反転表示を左右に移動する
スペースキー	反転表示を右に移動する
XFER キー	次の一覧を表示する
SHIFT ＋ XFER キー	前の一覧を表示する

参考

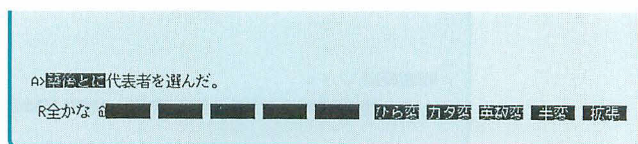
一覧の右端の漢字が反転しているときにスペースキーを押すと、次の一覧が(あれば)表示されます。

CHAPTER 5

5.5 文節を区切り直す —— CTRL ＋ ← ／ →

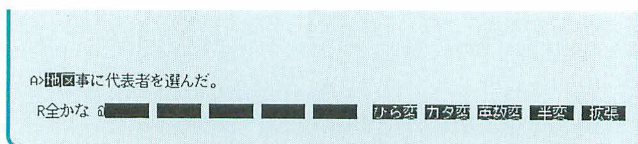
読みや変換候補が表示されているときに CTRL ＋ ← キーを押すと、変換対象の文節が1字分短くなります。また CTRL ＋ → キーを押すと1字分長くなります。

たとえば、「地区ごとに」と入力するために「ちくごとに」と入力して変換したところ、次のように表示されたとします。



変換したときの最初の候補。

この場合、「ちくごとに」が1つの文節として変換対象になっています。ここで CTRL ＋ ← キーを3回押すと、変換対象の文節が「ちく」になります。



文節を2文字分短くしたところ。

これで文節は正しく区切られましたので、必要に応じて同音異義語を選択します。

CHAPTER 5

5.6 ひらがなを入力する

入力した読みをひらがなで入力する場合は、読みを入力した直後にそのまま[⏎]キーを押して確定します。

漢字などに変換した文字をひらがなに戻したいときは、[f･6]キーを押すと、確定前の文字はひらがなに変換されます。

A>ひらがなを入力する
R全かな あ　ひら変　カタ変　英数変　半変　拡張

入力した読みを、そのままひらがなに変換することもできる。

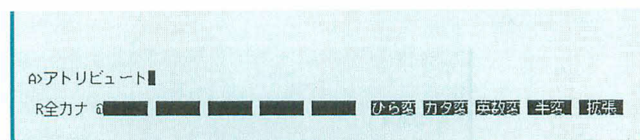
5.7 カタカナを入力する

一般的によく使われる外来語などは、あらかじめ辞書に登録されているので、変換するだけでカタカナで表示されます。

辞書にカタカナの語として登録されていない語をカタカナに変換するには、次の2つの方法があります。

読みをカタカナで入力する

読みを入力する前に[SHIFT]＋[f･7]キーを押すと、ガイドラインに「カナ」と表示され、入力した読みがカタカナで表示されるようになります。



カタカナで入力できる状態のガイドライン。

カタカナで表示された読みは、[⏎]キーを押すとカタカナのまま確定されます。スペースキーまたは[XFER]キーを押すと、通常の変換操作と同じように漢字かな混じり文に変換されます。

参考

読みの表示をひらがなに戻す（ガイドラインの表示を「かな」に戻す）には、読みを入力する前に[SHIFT]＋[f･6]キーを押します。

入力した読みをカタカナに変換する

読みを入力した後で[f･7]キーを押すと、カタカナに変換されます。

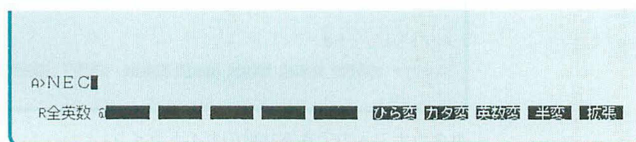
5.8 英数字を入力する

カナ キーを押してキーボードからカナ文字で入力している方は、カナ キーを押してロックを解除しないと、英数字が入力できません。まずカナロックを解除してください。

また、大文字/小文字のどちらを入力するかは CAPS キーの状態や SHIFT キーを押しているかどうかで決まります。

英数字を直接入力する

読みを入力する前に SHIFT ＋ f･8 キーを押すと、ガイドラインに「英数」と表示され、入力した読みが英数字で表示されるようになります。



読みがそのまま英数字で入力できる状態のガイドライン。

英数字で表示されている読みは、⏎ キーを押すと英数字のまま確定されます。スペースキーまたは XFER キーを押すと、通常通り漢字かな混じり文に変換されます。

ローマ字入力が OFF のとき（ガイドライン左端に「R」が付いていないとき）にスペースキーまたは XFER キーを押すと略号変換します。

参考

読みの表示をひらがなに戻す（ガイドラインの表示を「かな」に戻す）には、SHIFT ＋ f･6 キーを押します。

入力した読みを英字に変換する

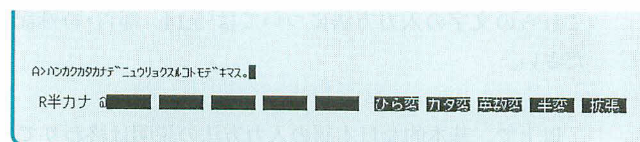
読みを入力した後で f･8 キーを押すと、英字に変換されます。

5.9 半角文字を入力する

半角のカタカナや英数字を入力するには、次の2つの方法があります。

読みを半角文字で入力する

読みを入力する前に SHIFT + f·9 キーを押すと、ガイドラインに「半」と表示され、入力した読みが半角で表示されます。



入力した読みが半角文字で表示される状態のガイドライン。

半角で表示された読みは、⏎ キーを押すとそのまま確定されます。スペースキーまたは XFER キーを押すと漢字かな混じり文に変換されます。

参考

半角の英数字を入力したい場合は、さらに SHIFT + f·8 キーを押します。
読みの表示をひらがなに戻すには、SHIFT + f·6 キーを押します。

入力した読みを半角文字に変換する

読みを入力した後で f·9 キーを押すと、半角文字に変換されます。

CHAPTER 5

5.10 記号を入力する

キーボードの カナ キーを押してカナ文字で入力している方は、キーボード上の英記号(!、?、# など)はカナロックを解除してから入力してください。

キーボードにない記号(〒、※、○など)を入力する場合は、「きごう」という読みで何度かスペースキーまたは XFER キーを押します。記号の一覧が表示されるので、同音異義語を選ぶ要領で選択します。

また、ギリシャ文字やロシア文字、単位などの特殊記号を入力することもできます。これらの文字の入力方法については「5.14　部首・特殊記号の読み一覧」を参照してください。

以上で、基本的な日本語の入力方法の説明は終わりです。

5.11 単語を登録する

MS-DOSのシステムディスクに添付されている辞書ファイルには、使用頻度が比較的高い単語だけが登録されています。辞書にない単語は、スペースキーなどを押しても変換されません。

珍しい人名や会社名のような固有名詞、特殊な専門用語などを頻繁に使う場合は、そういった単語を辞書に登録しておくことをおすすめします。単語登録をすると、通常ではうまく変換されない単語をスムーズに入力できるようになります。

単語登録にはもう1つ利用方法があります。よく使う長い語句(「エスケープシーケンス」など)を短い読み(「えすけ」など)で登録しておくと、キー入力の手間を軽減することができます。

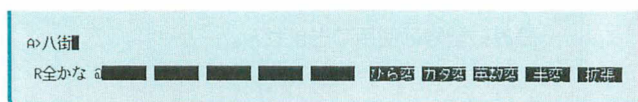
注意

半角文字を含む単語は登録できません。

ここでは、「八街」という語を「やちまた」という読みで地名として登録してみましょう。

単語登録の手順

①日本語入力モードに入り、登録したい単語を画面に表示させて確定させます。



単語を登録するには、まず登録したい語を画面に表示させる。

このときは登録前ですから、素直には変換されません。たとえば「はち」「まち」のように読みを別々に入力して、なんとか変換しておきます。

②確定させてから f･10 キーを押し、← → キーで「1.単語登録」にカーソルを合わせて ⏎ キーを押します。

登録単語を選択する画面になります。



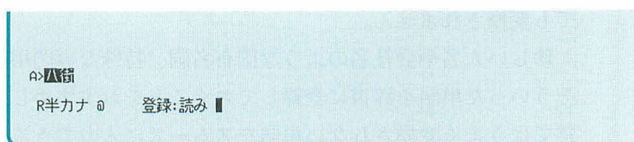
登録したい単語の最初の文字と最後の文字で ⏎ キーを押して選択する。

登録中はいつでも ESC キーを押して中止することができます。

CHAPTER 5

③登録したい単語を画面から選択して、範囲を指定します。
まず、[↑] [↓] [←] [→] キーでカーソルを単語の先頭文字に重ね、[⏎] キーを押します。次に、単語の最後の文字にカーソルを重ねて [⏎] キーを押します。

④指定した単語が反転表示されます。またガイドラインの表示が次のように変わり、半角入力モードになります。



登録したい単語を選択すると、次は読みの入力になる。

注意

登録できる文字数は、単語、読みともに 16 文字以内です。半角文字は登録できません。

⑤その語に対応した読みを考えて、16 文字以内で入力し、[⏎] キーを押します。

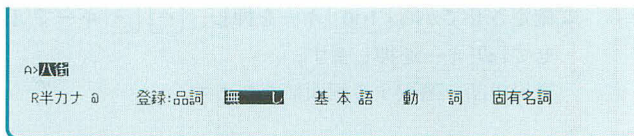


読みは 16 字まで。この読みで、登録単語を変換することになる。

注意

読みに記号は使用できません。

⑥登録する単語の品詞を指定します。[←] [→] キーで指定する品詞にカーソルを合わせ、[⏎] キーを押します。
品詞とは、日本語を語学的に見たときの語の分類方法です。



品詞の指定のしかたによって変換効率が変わるので要注意。

参考

品詞を指定したくないときは、「無し」を選択してください。

注意

・AIかな漢字変換システムは、品詞のつながりを考えながら入力された読みをかな漢字混じり文に変換します。したがって、品詞を正しく指定すれば変換効率が上がりますが、単語に適した品詞を指定しないと、正しく変換されないことがあります。

・動詞、形容詞、形容動詞を登録する場合は、語幹（活用しない部分）だけを登録してください。

⑦品詞をより細かく指定します。選択できる項目は数画面にわたっているので、[↑][↓][←][→]キーで指定する品詞にカーソルを合わせ、[⏎]キーを押します。

```
A>八街
R半カナ @    登録:品詞  苗字    名 前    地 名    団体名
```

品詞の種類は細かく分かれている。

⑧単語が辞書ファイルに書き込まれて登録されます。
以上で単語登録の操作は終わりです。

参考

登録単語を削除する場合は、削除する単語を表示させ、[f·10]キーで表示される拡張機能メニューで「2. 単語削除」を選択します。以後、登録のときとほぼ同じ手順で操作します。辞書ファイルにもともと入っていた語（システム単語）は削除できません。

単語登録の注意

効率よくかな漢字変換をするためには、単語登録は不可欠です。次のような点に注意するとよい登録ができるでしょう。

(1) 単語を、あまり短い読みや他の語と混同しやすい読みで登録すると、誤変換の原因になることがあります。
たとえば、「エスケープシーケンス」という単語を「え」という読みで登録した場合、「絵を描く」と入力するつもりが、「エスケープシーケンスを描く」と誤変換されてしまうことも考えられます。

(2) 辞書ファイルには、公共機関名などはあらかじめ略号で登録されています。たとえば「WHO」は「世界保健機関」に変換されます（略号変換）。

CHAPTER 5

5.12 日本語入力モードの環境設定

日本語入力モードに入った状態で f･10 キーを押すと、次のような拡張機能メニューが表示されます。

1.単語登録 2.単語削除 3.辞書切替 4.ローマ字切替 5.入力形式 6.補助機能

拡張メニューを表示したところ。

このメニューで、学習の有無、使用する辞書など、日本語入力モードの環境を変更することができます。

元の画面に戻る場合は、 ESC キーを押します。

注意

ここでの設定は一時的なもので、システムを再起動させると元の設定に戻ります。記録させておくことはできません。

メニューの選び方

← → キーで設定したい項目にカーソルを合わせて、 ⏎ キーを押します。

学習機能

ある漢字を同音異義語から選択すると、次に同じ読みを入力したとき、その漢字が最初に表示されるようになります。これは、前回どの漢字が選択されたかを辞書が記憶しているためです。この機能を「学習機能」といいます。

学習機能があるため、かな漢字変換を繰り返すと、よく使う漢字ほど一覧の最初のほうに表示されるようになります。

しかし、他の人の辞書を使う場合や、一時的に特殊な語を使う場合など、学習効果を残さない方がよいこともあります。このようなとき、学習をしないように設定することができます。

①拡張機能メニューで「6. 補助機能」を選択します。
②「1. 学習」を選択します。
③学習機能を使うときは「1. 学習有り」、使わないときは「2. 学習無し」を選択します。

辞書の変更

かな漢字変換に使用する辞書ファイルを確認したり、変更したりできます。

①拡張機能メニューで「3. 辞書切替」を選択します。
現在使用している辞書のドライブ名とパス名、ファイル名が表示されます。
②変更の必要がない場合は ⏎ キーを押します。変更する場合は、使用したい辞書のあるドライブ名と辞書へのパス名およびファイル名を入力して ⏎ キーを押します。

変換方式の変更

かな漢字変換の変換方式を変更します。

①拡張機能メニューで「5. 入力方式」を選択します。
②「1. 変換方式」を選択します。
③「1. 逐次」「2. 連文(先読あり)」、「3. 連文(先読なし)」のいずれかを選択します。

コード体系の変更

コード入力の際に使用するコード体系を変更します。

①拡張機能メニューで「5. 入力方式」を選択します。
②「2. コード」を選択します。
③「1. JIS」「2. シフト JIS」、「3. 区点」のいずれかを選択します。

句読点変換の設定

読みとして「、」や「。」を入力したときに、スペースキーなどを押したときと同様に漢字への変換を行うかどうかを設定します。

初期状態では、これらのキーで句読点変換をするように設定されています。

①拡張機能メニューで「6. 補助機能」を選択します。
②「2. 句読点変換」を選択します。
③「1. する」「2. しない」のどちらかを選択します。

同音語表示方法の設定

入力された読みに対して複数の同音異義語があるとき、それらをどのように表示するかを設定します。次のような表示方法があります。

・**直接表示**

スペースキーなどを押すたびに、カーソル位置に1つずつ同音語が表示されます。

・**一覧表示**

同音語の一覧をガイドラインに表示します。

・**直接／一覧の切り替え**

最初は直接表示をし、スペースキーなどが一定の回数押されると一覧表示に切り替わります。初期状態ではこの表示方法になっています。

CHAPTER 5

何回変換キーが押されたら表示を切り替えるかの回数も設定できます。

①拡張機能メニューで「6. 補助機能」を選択します。
②「3. 同音語指定」を選択します。
③表示方法を選択します。「3. 直接／一覧の切り替え」を選んだ場合は、続いてキーを押す回数を指定します。

入力位置の設定

入力した読みや確定前の漢字をどの位置に表示するかを設定します。次の2つの入力のしかたがあります。

・直接入力
カーソル位置に直接、読みや変換結果が表示されます。
・間接入力
読みや確定前の漢字はガイドラインに表示され、[⏎]キーなどで確定して初めて、カーソル位置に表示されます。

①拡張機能メニューで「5. 入力方式」を選択します。
②「3. 直／間切替」を選択します。選択するたびに入力位置が切り替わります。

参考

単語登録、単語削除については「5.11　単語を登録する」で、ローマ字切替については「5.1　入力の方法」で、それぞれ説明しています。

CHAPTER 5

5.13 ローマ字入力の規則

ローマ字入力をするときは、「ローマ字入力規則表」にしたがって入力してください。
句読点などの入力のしかたは、「特殊な文字の入力方法」をご覧ください。

注意

ローマ字入力のときは[カナ]キーをロックしないでください。
「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」「ヴャ」「ヴュ」「ヴョ」は必ずカタカナになります。

ローマ字入力規則表

あ	い	う	え	お
A	I (YI)	U (WU)	E	O
か	き	く	け	こ
KA	KI	KU	KE	KO
さ	し	す	せ	そ
SA	SI (SHI)	SU	SE	SO
た	ち	つ	て	と
TA	TI (CHI)	TU (TSU)	TE	TO
な	に	ぬ	ね	の
NA	NI	NU	NE	NO
は	ひ	ふ	へ	ほ
HA	HI	HU (FU)	HE	HO
ま	み	む	め	も
MA	MI	MU	ME	MO
や	い	ゆ	いぇ	よ
YA	YI	YU	YE	YO
ら	り	る	れ	ろ
RA	RI	RU	RE	RO
わ	うぃ	う	うぇ	を
WA	WI	WU	WE	WO
が	ぎ	ぐ	げ	ご
GA	GI	GU	GE	GO
ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
ZA	ZI (JI)	ZU	ZE	ZO
だ	ぢ	づ	で	ど
DA	DI	DU	DE	DO
ば	び	ぶ	べ	ぼ
BA	BI	BU	BE	BO
ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ
PA	PI	PU	PE	PO
きゃ	きぃ	きゅ	きぇ	きょ
KYA	KYI	KYU	KYE	KYO
しゃ	しぃ	しゅ	しぇ	しょ
SYA (SHA)	SYI	SYU (SHU)	SYE (SHE)	SYO (SHO)
ちゃ	ちぃ	ちゅ	ちぇ	ちょ
TYA (CHA) (CYA)	TYI (CYI)	TYU (CHU) (CYU)	TYE (CHE) (CYE)	TYO (CHO) (CYO)
にゃ	にぃ	にゅ	にぇ	にょ
NYA	NYI	NYU	NYE	NYO
ひゃ	ひぃ	ひゅ	ひぇ	ひょ
HYA	HYI	HYU	HYE	HYO
みゃ	みぃ	みゅ	みぇ	みょ
MYA	MYI	MYU	MYE	MYO

りゃ	りぃ	りゅ	りぇ	りょ
RYA	RYI	RYU	RYE	RYO
ぎゃ	ぎぃ	ぎゅ	ぎぇ	ぎょ
GYA	GYI	GYU	GYE	GYO
じゃ	じぃ	じゅ	じぇ	じょ
ZYA (JA) (JYA)	ZYI (JYI)	ZYU (JU) (JYU)	ZYE (JE) (JYE)	ZYO (JO) (JYO)
ぢゃ	ぢぃ	ぢゅ	ぢぇ	ぢょ
DYA	DYI	DYU	DYE	DYO
でゃ	でぃ	でゅ	でぇ	でょ
DHA	DHI	DHU	DHE	DHO
びゃ	びぃ	びゅ	びぇ	びょ
BYA	BYI	BYU	BYE	BYO
ぴゃ	ぴぃ	ぴゅ	ぴぇ	ぴょ
PYA	PYI	PYU	PYE	PYO
てゃ	てぃ	てゅ	てぇ	てょ
THA	THI	THU	THE	THO
ふぁ	ふぃ	ふ	ふぇ	ふぉ
FA	FI	FU	FE	FO
ヴァ	ヴィ	ヴ	ヴェ	ヴォ
VA	VI	VU	VE	VO
ぁ	ぃ	ぅ	ぇ	ぉ
LA	LI	LU	LE	LO
ゃ	ぃ	ゅ	ぇ	ょ
LYA	LYI	LYU	LYE	LYO
つぁ	つぃ		つぇ	つぉ
TSA	TSI		TSE	TSO
くぁ	くぃ	くぅ	くぇ	くぉ
KWA (QA)	KWI (QI)	KWU (QU)	KWE (QE)	KWO (QO)
ぐぁ	ぐぃ	ぐぅ	ぐぇ	ぐぉ
GWA	GWI	GWU	GWE	GWO
ヴャ	ヴィ	ヴュ	ヴェ	ヴョ
VYA	VYI (VI)	VYU	VYE (VE)	VYO
ふゃ	ふぃ	ふゅ	ふぇ	ふょ
FYA	FYI	FYU	FYE	FYO
とぁ	とぃ	とぅ	とぇ	とぉ
TWA	TWI	TWU	TWE	TWO
どぁ	どぃ	どぅ	どぇ	どぉ
DWA	DWI	DWU	DWE	DWO
っ				
LTU				
ん				
NN N' N(子音)				

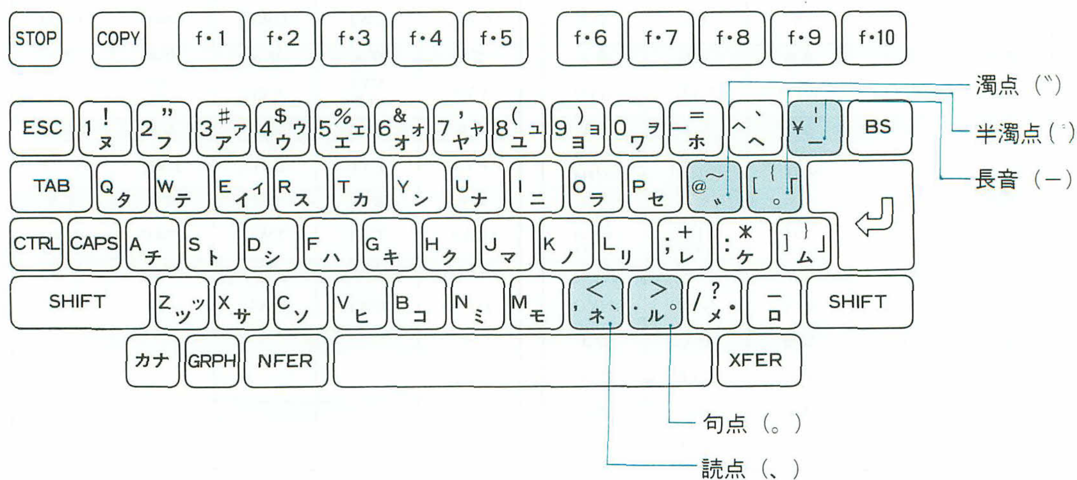
CHAPTER 5

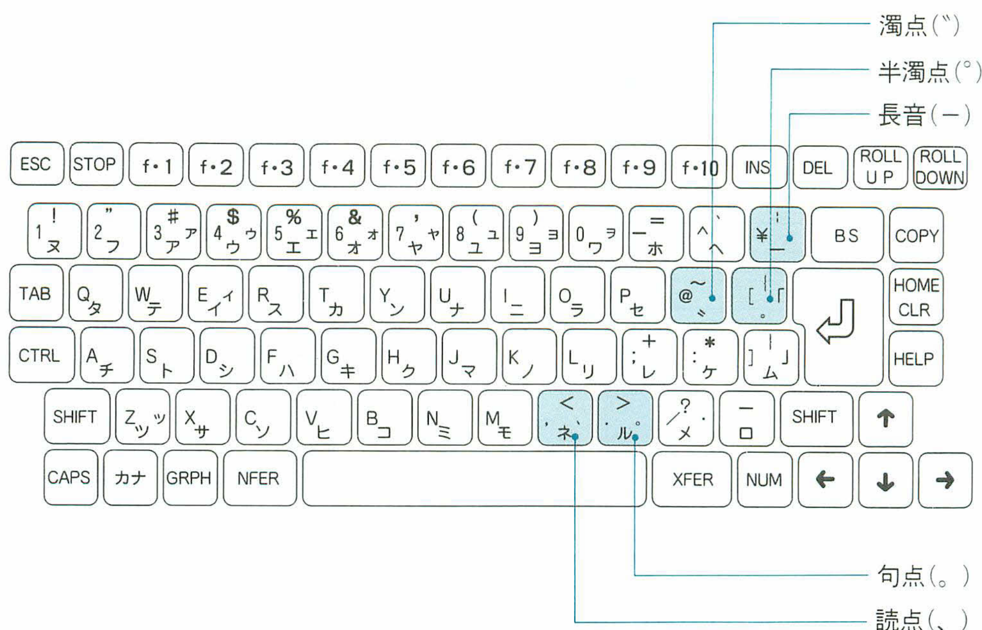
5.14 カナ入力の規則

特殊な文字の入力方法

文　字	キー操作	タイプ例	表　示
長音記号(ー)	[¥ ¦ ー]	カーソル	かーそる
かな小文字	[SHIFT] を押しながら，ア，イ，ウ，エ，オ	[SHIFT] ＋ [3 # ア ァ]	ぁ
"を"	[SHIFT] ＋ [0 ワ ヲ]	——	を
句点（。）	[SHIFT] ＋ [> . ル 。]	——	。
読点（、）	[SHIFT] ＋ [< , ネ 、]	——	、
濁点	文字の後で [@ ~ ゛]（濁点キー）を押す	[カ] [@ ~ ゛]	が
半濁点	文字の後で [[{ ゜ 「]（半濁点キー）を押す	[ハ] [[{ ゜ 「]	ぱ

注意：カナ入力を行うときは，必ず [カナ] キーをロックしておいてください．
　　　なお，表中の"表示"はガイドラインが「かな」の場合の例です．





5.15 部首・特殊記号の読み一覧

漢字は、読みを入力して変換するほか、漢字の部首の読みを入力して表示させることもできます。

また、ギリシャ文字や記号などは特殊な読みで変換することもできます。

部首や特殊記号の読みはあらかじめ決められています。ここでは、部首・特殊記号の読み一覧を掲載します。

部首選択の手順

①日本語入力モードに入ります。

②部首の読み一覧で調べた部首の読みを入力して、GRPH＋XFERキーを押します。
指定した部首を持つ漢字が表示されます。

③スペースキーまたはXFERキーを押すと次の漢字が表示されます。SHIFT＋XFERキーで前の漢字に戻ります。希望の漢字を表示させ、⏎キーで確定します。

記号や特殊な文字の入力

部首選択と同様の手順で、ギリシャ文字、ロシア文字、記号などを入力できます。②で部首の読みを入力するかわりに、記号の種類ごとに決められた読みを入力してください。

部首の読み一覧

画	部首	読み
一画	一	いち
	ノ	の
二画	亠	なべ ふた
	人	にん ひと
	儿	ひとあし る
	刂 *	りっとう
	刀 *	かたな
	八	はち
	匚, 冂, 门	かまえ
	冖	わ
	冫	ん に
	几	つくえ
	凵	うけばこ
	力	か ちから
	勹	つつみ く
	十	じゅう
	卩	ふし せつ
	厂	がん
	又	また ぬ
三画	口	くち ろ
	氵 *	さん し
	犭 *	けもの
	忄 *	りっしん
	扌(手)	て
	土	つち ど
	士	さむらい
	夕	ゆう
	大	だい
	女	おんな
	子	こ
	宀	う
	寸	すん
	小(⺌)	しょう つ
	尸	しゃく
	山	やま
	己	おのれ
	巾	はば
	广	ま
	廴	えん
	弋	しき
	弓	ゆみ
	彳	ぎょう
	(左) 阝 (阜)	こざと
	(右) 阝 (邑)	おおざと
	辶(⻌)	しん
	艹	くさ
四画	心 *	こころ
	火 *	ひ
	灬 *	れっか
	文	のぶん
	方	ほう
	日	にち
	月 *	つき
	木	き
	欠	けつ あくび
	歹	いちた
	殳	るまた
	毛	け
	气	きがまえ
	水 *	みず すい
	爪	つめ
	片	かた
	牛(牜)	うし
	犬 *	いぬ
	礻 *	ね
	王(玉)	おう たま
	戈	ほこ
五画	瓜	うり
	示 *	しめす
	衤 *	ころも
	田 *	た
	疒	やまい
	癶	はつ
	白	しろ
	皮	かわ

画	部首	読み	画	部首	読み	画	部首	読み
五画	皿	さら	六画	血	ち	九画	革	かく
	目	め		衣	きぬ		韋	なめし
	矢	や		襾(西)	にし		音	おと
	石	いし	七画	臣	おみ		頁	おおがい／ぺーじ
	禾	のぎ		見	みる／けん		風	かぜ
	穴	あな		言	ごん		食	しょく
	立	たつ／りつ		谷	たに		首	くび
	四	よん		豆	まめ		香	かおり／こう
	瓦	かわら		豕	いのこ		面	めん
六画	糸	いと		貝	かい	十画	馬	うま
	缶	かん		赤	あか		骨	ほね
	竹	たけ		走	はしる／そう		髟	かみ
	羊	ひつじ		足(⻊)	あし		鬥	とう
	羽	はね		身	み		鬼	おに
	老	おい／ろう		車	くるま		高	たかい
	耒	すき		辛	からい	十一画	鳥	とり
	耳	みみ		酉	さけ／ひよみ		魚	うお
	聿	ふで		釆	のごめ		鹿	しか
	肉 *	にく		豸	むじな		麥(麦)	ばく／むぎ
	米	こめ		角	つの	十二画	黑	くろ
	臼	うす	八画	金	かね	十四画	鼻	はな
	舌	した		門	もん	十五画	齒	は
	舟	ふね		隹	ふるとり	十六画	龜	かめ
	虍	とら		雨	あめ			
	虫	むし		非	あらず			

注意：＊のついたものは，同一部首で表現が２つあるものを示します．

（忄ー心，礻ー示，衤ー衣，刀ー刂，犭ー犬，氵ー水，火ー灬，月ー肉）

CHAPTER 5

特殊記号の読み一覧

読　み	記　　号
．か	‘ ’ “ ” （ ） 〔 〕 ［ ］ ｛ ｝ 〈 〉 《 》 「 」 『 』 【 】 〝 〟
．が	＋ － ± × ÷ ＝ ≠ ＜ ＞ ≦ ≧ ∞ ∴ ♂ ♀ ≒ ≡ ∫ ∮ Σ √ ⊥ ∠ ∟ ⊿ ∵ ∩ ∪
．き	＃ ＆ ＊ ＠ § ※ 〒 〃 仝 々 、 。 ， ． ・ ： ； ？ ！ ゛ ゜ … ‥ ⬭ ― ‐ － ／ ＼ ～ → ← ↑ ↓ ＝ ヽ ヾ ゝ ゞ ☆ ★ ○ ● ◎ ◇ ◆ □ ■ △ ▲ ▽ ▼ 〆 ´ ｀ ¨ ＾ ￣ ＿ ∥ ｜
．ぎ	Α Β Γ Δ Ε Ζ Η Θ Ι Κ Λ Μ Ν Ξ Ο Π Ρ Σ Τ Υ Φ Χ Ψ Ω α β γ δ ε ζ η θ ι κ λ μ ν ξ ο π ρ σ τ υ φ χ ψ ω
．け	─ ━ │ ┃ ┄ ┅ ┆ ┇ ┈ ┉ ┊ ┋ ┌ ┏ ┍ ┎ ┐ ┓ ┑ ┒ └ ┗ ┕ ┖ ┘ ┛ ┙ ┚ ├ ┣ ┝ ┠ ┞ ┟ ┡ ┢ ┤ ┫ ┥ ┨ ┦ ┧ ┩ ┪ ┬ ┳ ┯ ┰ ┭ ┮ ┱ ┲ ┴ ┻ ┷ ┸ ┵ ┶ ┼ ╋ ┿ ╂ ┽ ┾ ╀ ╁ ╃ ╄ ╅ ╆ ╇ ╈ ╉ ╊
．た	° ′ ″ ℃ ￥ ＄ ¢ £ ％ ㍉ ㌔ ㌢ ㍍ ㌘ ㌧ ㌃ ㌶ ㍑ ㍗ ㌍ ㌦ ㌣ ㌫ ㍊ ㌻ ㎜ ㎝ ㎞ ㎎ ㎏ ㏄ ㎡
．と	№ ㏍ ℡ ㊤ ㊥ ㊦ ㊧ ㊨ ㈱ ㈲ ㈹ ㍾ ㍽ ㍼ ㍻
．は	─ ━ │ ┃ ┄ ┅ ┆ ┇ ┈ ┉ ┊ ┋ ┌ ┍ ┎ ┏ ┐ ┑ ┒ ┓ └ ┕ ┗ ┘ ┙ ┚ ┛ ┛ ├ ┝ ┞ ┟ ┠ ┡ ┢ ┣ ┤ ┥ ┦ ┧ ┨ ┩ ┪ ┫ ┬ ┭ ┮ ┯ ┰ ┱ ┲ ┳ ┴ ┵ ┶ ┷ ┸ ┹ ┺ ┻ ┼ ┽ ┾ ┿ ╀ ╁ ╂ ╃ ╄ ╅ ╆ ╇ ╈ ╉ ╊ ╋
．ま	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳
．ろ	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ Ⅵ Ⅶ Ⅷ Ⅸ Ⅹ
．ろしあ	А Б В Г Д Е Ё Ж З И Й К Л М Н О П Р С Т У Ф Х Ц Ч Ш Щ Ъ Ы Ь Э Ю Я а б в г д е ё ж з и й к л м н о п р с т у ф х ц ч ш щ ъ ы ь э ю я
きごう	〒 ※ § ○ ◎ ☆ ゝ ゞ 々 ヽ ヾ ＋ － × ÷ 〆 ⬭ ‥ ゛ ゜ ´ ｀ ¨ ＾ ￣ ＿ 〃 仝 ― ‐ － ／ ＼ ～ ∥ ｜ … ‘ ’ “ ” 〔 〕 ｛ ｝ 〈 〉 《 》 「 」 『 』 【 】 ± ＝ ≠ ＜ ＞ ≦ ≧ ∞ ∴ ♂ ♀ ° ′ ″ ℃ ¢ £ ％ ＃ ＆ ＊ ★ ● ◇ ◆ □ ■ △ ▲ ▽ ▼ → ← ↑ ↓ 〝 〟

注意・「.」印はピリオドです．テンキーにあるピリオドや「。」(句点)も使用できます．
・「平成」は，機種により表示されるものと表示されないものがあります．

CHAPTER 5

第６章
スクリーンエディタ

この章では、MS-DOS 5.0 に付属しているスクリーンエディタ「sedit」の操作方法について解説します。

MS-DOS には「EDLIN」というエディタも付属しています。EDLIN が行単位で編集する「ラインエディタ」であるのに比べて、この sedit はカーソルキーやファンクションキーなどを利用して画面上で文字を見ながら約 10K バイトまでのファイルを編集できる「スクリーンエディタ」です。

CHAPTER

6.1 スクリーンエディタの起動方法

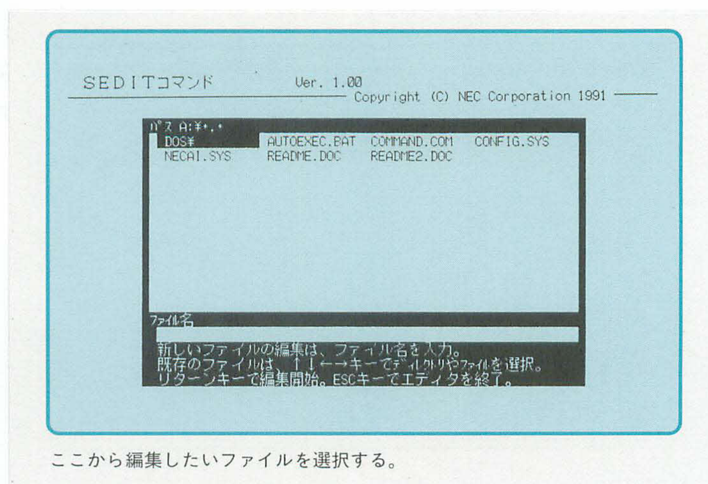
スクリーンエディタの起動方法には、起動時にファイル名を指定する方法としない方法があります。

いちばん簡単な起動方法

もっとも簡単な起動方法は、MS-DOS のプロンプト(A>)が表示されている状態で、次のように入力します。

sedit [↵]

すると、画面には次のようなウィンドウが表示されます。これが「ファイル選択ウィンドウ」です。



ここから編集したいファイルを選択する。

ファイル選択ウィンドウでは、スクリーンエディタで編集したいファイルを選んだり、新しくつくりたいファイル名を入力するウィンドウです。ウィンドウ内に表示されているファイルの一覧は、カレントドライブのカレントディレクトリのものです。

ウィンドウの詳細については「6.2　ファイル選択ウィンドウ」を参照してください。

CHAPTER 6

ファイル名を指定して起動する

スクリーンエディタの起動時にファイル名も指定すると、任意のファイルを編集することができます。MS-DOSのプロンプト(A>)が表示されている状態で、次の書式で入力します。

sedit 〈ファイル名〉⏎

〈ファイル名〉は編集したいファイル名です。必要に応じてドライブ名やパス名も含めて指定します。

参考

ドライブ名については『さあ始めよう MS-DOS』「第1章 紹介! DOSシェル」で、パス名については「第2章 使いやすい環境をつくる」で説明しています。

たとえば、

sedit a:¥doc¥readme.doc⏎

と入力すると、ドライブAのルートディレクトリにあるDOCというディレクトリの中の"README.DOC"というファイルの内容が読み込まれ、編集が始まります。指定した名前のファイルがなければ、新しく作成します。

〈ファイル名〉にはワイルドカードの指定も可能です。この場合は、ワイルドカードに該当するファイルがすべてファイル選択ウィンドウに表示されます。たとえば

sedit a:¥doc¥*.txt⏎

とすれば、ドライブAのDOCというディレクトリの中にある、拡張子が"TXT"であるファイルの一覧がファイル選択ウィンドウに表示されます。

ワイルドカードについては、「第1章 コマンドプロンプトでの基本操作」を参照してください。

注意

ファイル中に文字コード128、253~255(いずれも10進)の未定義文字があると、スクリーンエディタは読み込み時に、自動的に"?"(文字コード63)に置き替えます。

また sedit は、最大250行(約10Kバイト)までのファイルを編集できます。

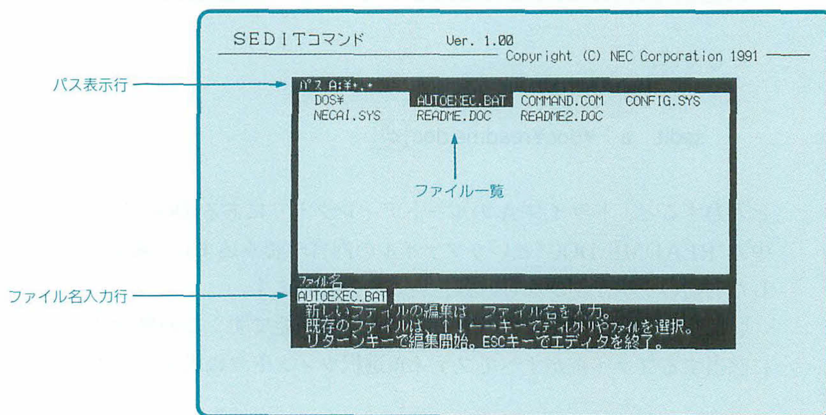
CHAPTER 6

6.2 ファイル選択ウィンドウ

スクリーンエディタをファイル名を指定しないで起動した場合や、ワイルドカードを指定して起動した場合は、画面にファイル選択ウィンドウが表示されます。また、エディタを実行中に f･4 [ファイル挿入]コマンドを選んだときも、このウィンドウで読み込むファイルを選択します。

ファイル選択ウィンドウの各部の名前

ファイル選択ウィンドウの各部分の名前と役割は次のようになっています。



ファイル選択ウィンドウの例。

〈パス表示行〉

どのドライブのどのディレクトリのファイル一覧が表示されているかが、ドライブ名を含む絶対パスで表示されています。

〈ファイル一覧〉

カレントディレクトリ(パス表示行のディレクトリ)に存在するファイルの一覧で、↑ ↓ ← → キーでファイル名やディレクトリ名が選択できます。

ワイルドカードを用いてスクリーンエディタを起動した場合は、そのワイルドカードに該当するファイル名の一覧が表示されます。

ファイル名は、アルファベット順に並べ替えられて表示されます。

〈ファイル名入力行〉

直接、ファイル名やディレクトリ名を指定したり、ドライブを変更するときに使います。

またファイル一覧から選択したファイル名や、ディレクトリ名はいったんここに転記されます。ここにワイルドカードを指定すると、それに該当するファイル名が〈ファイル一覧〉に表示されます。

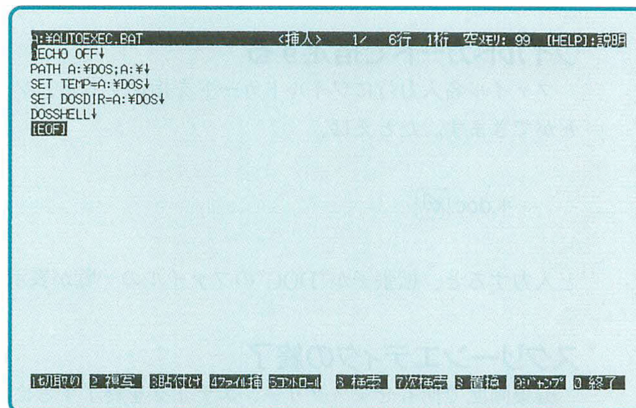
ファイルを選ぶ

↑ ↓ ← → キーで反転部分を動かして、編集したいファイルや移動したいディレクトリ名(ファイル名の末尾に"¥"が付いている)に合わせたら、⏎キーを押します。ファイル名がファイル名入力行に転記されるので、確認してもう一度⏎キーを押してください。

また、ディレクトリを選んだ場合は、指定したディレクトリのファイル一覧になりますので、同じように任意のファイルを選んでください。

ファイル読み込み中は、最下行に読み込んだ割合がパーセントで表示されます。

指定したファイルの読み込みが終了すると、次のような編集画面になります。



AUTOEXEC.BAT ファイルを読み込んだところ。

なお、拡張子が"BAK"のファイルは編集することができません。拡張子が"BAK"のファイルについては、「6.4　ファンクションキーの編集機能」の「終了、または文書の保存」をご覧ください。

ファイルを新しくつくる

新しくファイルをつくる場合は、ファイル名入力行にファイル名(8バイト)+拡張子(3バイト)でファイルの名前を指定します。

それぞれ8バイト、3バイトを越えた文字については無視されます。

ドライブを変える

編集したいファイルが別のドライブにある場合には、ファイル選択ウィンドウのファイル名入力行にドライブ名を入力し、[⏎]キーを押します。

たとえば、ドライブBに変更するときには、

b：[⏎]

というように入力します。

b：¥windows3¥[⏎]

というように入力すると、ドライブの変更と合わせてディレクトリの指定もできます。

ワイルドカードで指定する

ファイル名入力行にワイルドカードを指定すると、ファイル名を絞り込んで探すことができます。たとえば、

*.doc[⏎]

と入力すると、拡張子が"DOC"のファイルの一覧が表示されます。

スクリーンエディタの終了

編集画面で何もせずスクリーンエディタを終了するには、[f･10]キーを押してください。メニューが表示されますから、[↓]キーで[文書を保存せずエディタを終了]コマンドを反転させ[⏎]キーを押してください。ファイルの内容を変更せずにスクリーンエディタを終了し、MS-DOSのプロンプトに戻ります。

6.3 編集画面の基本機能

編集するファイルを選択すると、実際にファイルを編集する「編集画面」になります。まず編集画面の各部の名前と役割、そして文字の挿入や削除などの編集の基本機能を解説します。

入力できる文字や記号

入力できる文字の種類は、1バイト系半角文字、2バイト系全角文字、コントロールコード、タブ文字です。ただし、1バイト系半角文字のセミグラフィックキャラクタは入力できません。

コントロールコードとは、キャラクタコードが10進数で0〜31までの文字のことで、seditでは通常はキーボードから入力することができません。これを入力するには、「6.4　ファンクションキーの編集機能」の「コントロールコードを入力する」を参照してください。

ファイル選択ウィンドウでも日本語が入力できますから、ファイル名を漢字にすることも可能です。

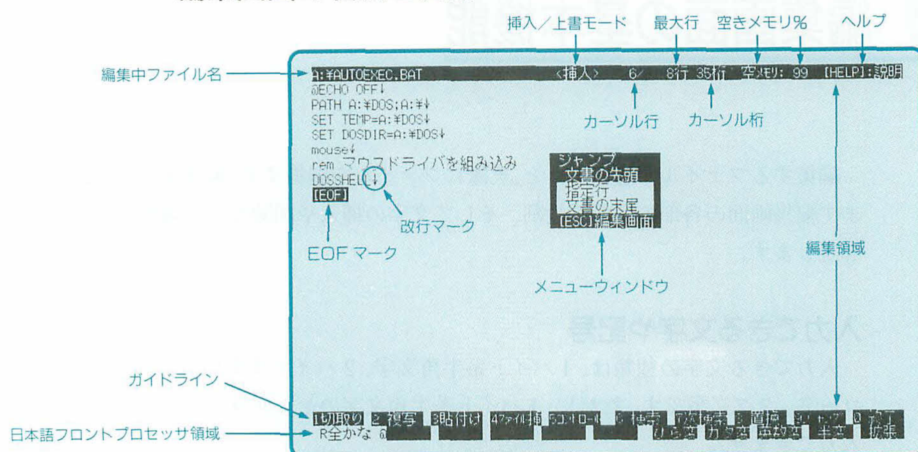
かな漢字変換中はFEPがファンクションキーを(場合によっては[ROLL UP] [ROLL DOWN]キーや[HELP]キーも)使用しますので、エディタの機能を呼び出せないことがあります。このような場合は、いったん日本語入力モードから抜けてエディタをお使いください。

注意

2バイト系半角文字を含むファイルを編集することも可能です。ただしこのエディタでは単なる2バイト系文字として表示するため、画面には"AABB"といったように半角2文字のように見えます。ファイルには正しく2バイト系半角文字として保存されるので、MS-DOSのTYPEコマンドなどで内容を表示させれば、2バイト系半角文字として読むことが可能です。

2バイト系半角文字については、「付録C　用語集」を参照してください。

編集画面の名前と役割



ジャンプコマンドを実行したので、ウィンドウが開いている。

〈編集中ファイル名〉

いま編集しているファイルのドライブ名、パス名、ファイル名が表示されています。パス名は、ドライブのルートディレクトリからの絶対パスで表示されています。

また、ディレクトリ名が長くてこの欄に表示できない場合は、ディレクトリ名+ファイル名が左から 32 文字分だけ表示されます。

ディレクトリ名については、別冊の『さあ始めよう MS-DOS』の「第 3 章　ファイルを探すテクニック」で説明しています。

> **注意**
>
> MS-DOS の APPEND コマンドでデータファイル検索パスを設定して、エディタを起動するときにファイルを指定すると、データファイル検索パス内のファイルが読み込まれることがあります。しかしこのときも、〈編集ファイル名〉にはカレントドライブのカレントディレクトリにそのファイルがあるかのように表示されます。これは、MS-DOS ではデータファイル検索パスを経由して見つけたファイルを操作しているのか、カレントディレクトリにあるその名前のファイルを操作しているのかが、プログラム側から区別できないしくみになっているからです。

〈挿入/上書モード〉

現在の編集モードが表示されます。〈挿入〉の場合は、カーソル位置の左側に入力した文字が挿入されます。〈上書〉の場合は、入力した文字でカーソル位置の文字が書き替わります。〈上書〉のときは入力しただけ文字が書き替わってしまいますので、注意してください。

〈カーソル桁〉

カーソル位置の行の左端からの桁数が表示されています。なお、桁数は行の左端が第 1 桁、右端が第 80 桁です。

〈カーソル行〉

カーソルがある行がファイル中で何番目の行かが表示されています。この行は、スクリーンエディタの画面上で何行に見えるかを表わした「物理行」による表示です。ファイルの先頭が第1行です。

参考

スクリーンエディタでは1行を80桁と定めています。たとえば先頭から100文字目で初めて改行マークがあったときは、論理的には100文字で1行ですが、画面上では2行にわたって見えます。これが「物理行」です。

〈最大行〉

編集中のファイルの末尾行の行番号が物理行で表示されています。〈カーソル行〉の表示と合わせて見ると、現在表示されている画面がファイル全体のどの位置にあたるかがわかります。sedit では、最大250行(約10K バイト)まで編集できます。

〈空きメモリ〉

あとどのくらい文書が編集できるかをパーセント(%)で表示しています。

数字が0に近付くにつれ、編集できる文書の大きさの限界になりつつあります。この値が0になると、「編集用のメモリが足りなくなりました。」という警告メッセージが表示されます。

〈[HELP]:説明〉

HELP キーを押すと、簡単な説明が表示されることを表わしています。

〈改行マーク〉

改行を表わすマークです。文のどこで改行しているか下向きの矢印で表示されています。論理行は、前の改行の次の文字からこの改行マークまでで1行です。

〈EOF マーク〉

ファイルの終わり(End Of File)を示すマークです。このマークより右側や下にカーソルを移動することはできません。

〈編集領域〉

ファイルの内容を表示したり、編集するための領域です。横80桁×縦22行の広さがあり、半角文字で最大1760文字の編集ができます。この画面を超えた部分は、↑ ↓ キーや ROLL UP / ROLL DOWN キーを押すと〈編集領域〉に表示させることができます。この操作を「スクロール」と呼びます。スクロールについては、「スクロールいろいろ」で後述します。

〈ガイドライン〉

通常はファンクションキーに割り当てられている内容が表示されていますが、スクリーンエディタからの簡単なメッセージや説明なども表示されます。

CHAPTER 6

〈日本語フロントエンドプロセッサ領域〉

日本語フロントエンドプロセッサのガイドライン用に割り当てられている行です。スクリーンエディタはこの部分に何も表示しません。

日本語フロントエンドプロセッサの役割と操作については、「第5章　日本語入力リファレンス」か、別売の『日本語入力ガイド』を参照してください。

〈メニューウィンドウ〉

エディタの機能を選択するときに表示されるメニューです。反転カーソルを [↑] [↓] キーで動かして、[⏎] キーを押すとコマンドが実行されます。

スクリーンエディタの編集操作

ここでは、スクリーンエディタの編集操作のうちもっとも大切な、文字の挿入や削除、カーソルの移動について解説します。

●漢字を入力する

バッチファイルなどで、メッセージに漢字を使いたいときがあります。そんなときは、AIかな漢字変換システムのような「日本語フロントエンドプロセッサ」(以下、日本語FEPと略記)を使って、漢字を入力します。

ただし、日本語FEPがデバイスドライバとしてMS-DOSに組み込まれていなければ、漢字の入力はできません。日本語FEPの組み込み方は、『インストールガイド』や別売の『日本語入力ガイド』を参照してください。

●文字の挿入

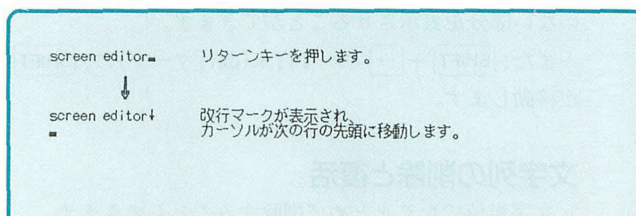
スクリーンエディタでは、[↑] [↓] [←] [→] キーでカーソルを挿入したい場所に移動させて文字を入力するだけで文字を挿入することができます。

編集モードが〈挿入〉であるときには、入力した文字がカーソルのすぐ左に挿入され、カーソル位置の文字から改行マークまでが右にスライドします。

編集モードが〈上書〉のときは、カーソル位置の文字を消しながら新しい文字が入力されていきます。

●改行とタブ

改行するときは[⏎]キーを押します。画面に改行マークが表示され、カーソルが次の行の先頭に移ります。



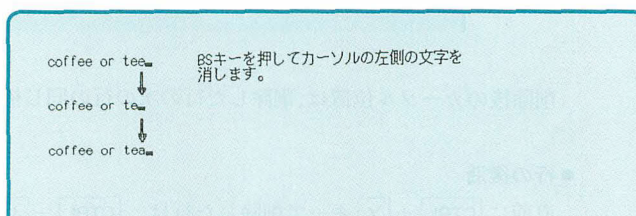
また、[TAB]キーでタブ文字が入力できます。タブ文字を入力すると、カーソル位置より右側の、もっとも近いタブ位置にカーソルが移動します。

文字の削除

まちがって入力した文字、不用になった文字を消すには2つの方法があります。

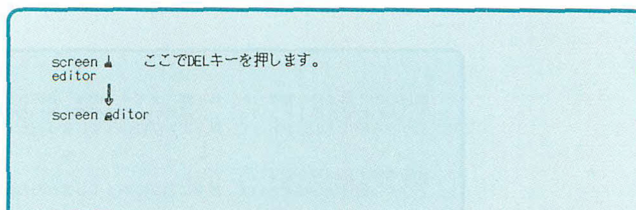
●カーソルの左の文字の削除は[BS]キー

[BS]キーを押すと、カーソルの直前(左)の文字を消し、カーソルが一つ左に移ります。



●カーソル位置の削除は[DEL]キー

[DEL]キーを押すと、カーソル位置の文字を消します。カーソル位置は変わりません。改行マークにカーソルを合わせて[DEL]キーを押すと、2行に分かれた文を1文につなげることができます。



CHAPTER 6

カーソルを移動する

文字のあるところには、[↑][↓][←][→]キーでカーソルを自由に移動できます。

たとえば、文書が大きくて画面に入り切らない場合などでも、編集領域の最上行で[↑]キーを押したり、編集領域の最下行で[↓]キーを押すと、画面の画面に表示されていない部分を表示させることができます。

また、[SHIFT]＋[→]キーで行末(改行マーク)に、[SHIFT]＋[←]キーで行頭にカーソルが移動します。

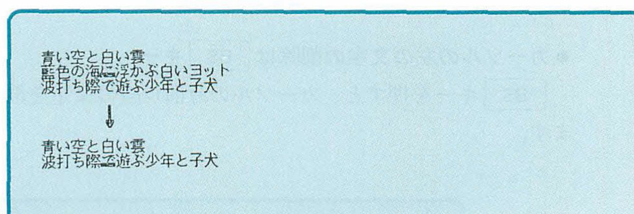
文字列の削除と復活

文字単位でなくまとめて削除することもできます。

●行の削除は[CTRL]＋[Y]キー

不用な文を一気に削除するときは、[CTRL]＋[Y]キーを利用します。[DEL]キーや[BS]キーで1文字ずつ消すのに比べ、素早く削除することができます。

削除したい行の上にカーソルを移動して[CTRL]＋[Y]キーを押します。このときの桁位置は、行内であればどこでもかまいません。



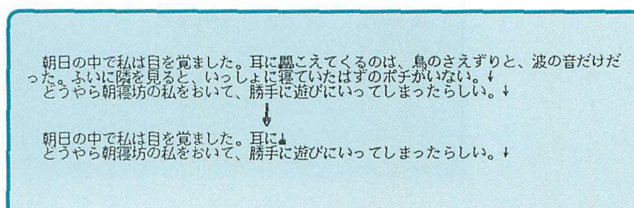
削除後のカーソル位置は、削除した行の次の行の同じ桁(なければ行末)になります。

●行の復活

直前に[CTRL]＋[Y]キーで削除した行は、[CTRL]＋[L]キーを押すとカーソルのある行に復活できます。

●カーソル以降の削除は[CTRL]＋[K]キー

カーソル位置からその行の行末の改行マークまでを一気に消去するときには、[CTRL]＋[K]を利用します。画面上で(物理行が)複数行に渡っているように見えても、カーソル位置から改行マークまでを消すことができます。



CHAPTER 6

スクロールいろいろ

「スクロール(scroll)」という語は、「巻物」を意味する英語です。限られた行数しか一度に表示できない画面には、大きな文書を全部表示することができません。巻物の見えない部分は巻物をグルグルまわして読みたい所を探します。これと同じように画面で見えない部分を表示させる操作が「スクロール」です。

スクリーンエディタでは、読みたいところがすぐに探せるように、2行ずつスクロールしたり、半画面ずつスクロールしたりといったいろいろなスクロールが利用できます。

スクロールの種類と操作方法は次の通りです。

キー操作	スクロールの種類
↑ / ↓	カーソル移動
↑ / ↓ 連続	連続カーソル移動
SHIFT + ↑ / ↓	2行スクロール(カーソル行固定)
SHIFT + ↑ / ↓ 連続	連続2行スクロール(カーソル行固定)
ROLL UP / ROLL DOWN	11行スムーズスクロール(カーソル行固定)
ROLL UP / ROLL DOWN 連続	スムーズスクロール(カーソル行固定)
SHIFT + ROLL UP / ROLL DOWN	11行クイックスクロール(カーソル行固定)
SHIFT + ROLL UP / ROLL DOWN 連続	連続11行クイックスクロール(カーソル行固定)

※「連続」は、そのキーを押し続けることを表わします。

キー操作ガイドを表示する

基本的な編集キーの操作を忘れてしまったり、ファンクションキーの編集機能が何をするのかわからなくなったときには、HELP キーを押してください。簡単な操作ガイドが表示されます。このガイドは3ページあり、ROLL UP キー(またはスペースキー)を押すと次のページが、ROLL DOWN キー(または BS キー)を押すと前のページが、それぞれ表示されます。ヘルプを終了して編集画面に戻るには ESC キーを押します。

注意

編集中に"編集作業に必要なメモリが足りなくなりました。"の警告が出ることがあります。これは、文字入力や貼り付け、挿入読み込み、文字列の置き替えなどによってテキストの量が増え、空きメモリが足りなくなったことを示しています。

この警告が出たときには、ただちに f·10 キー([終了コマンド])を実行し、「文書を保存しエディタを終了」を選択してください。これ以外のコマンドを選んだときの動作は保証されません。

CHAPTER 6

6.4 ファンクションキーの編集機能

基本的な編集機能の他にも、ファンクションキー(f･1 ～ f･10 キー)にいろいろな編集機能が組み込まれています。ここでは、これらの編集機能について解説します。

行単位で移動（行の切り取り）

行単位で内容を移動するには、移動したい内容をいったん行単位で切り取って、それを目的の場所に貼り付けます。切り取ったまま貼り付けずにいれば削除と同じことになります。

切り取りは f･1 キー、貼り付けは f･3 キーで行います。たとえば、

1　赤白がんばれ
2　ビシバシいこうぜ
3　やじをとばすな
4　なかまじゃないか

の第 1 行と第 2 行を第 3 行の下に移動する手順は、次のようにします。

①移動したい範囲の先頭行(ここでは第 1 行)にカーソルを合わせて、 f･1 キー([切取り]コマンド)を押します。ガイドラインには、「行範囲指定中」と表示されます。

② ↑ ↓ キーや ROLL UP ／ ROLL DOWN キーを押すと、それらのキーでカーソルが移動する範囲が反転表示になります。同様に、「6.3　編集画面の基本機能」の「スクロールいろいろ」で解説しているスクロールのキーや、「6.4　ファンクションキーの編集機能」の「ジャンプ」で取り上げているジャンプのコマンドも利用できます。

[切取り]コマンドの実行を中止して編集画面に戻るには、 ESC キーを押します。

③範囲を指定したら、もう一度 f･1 キーを押します。すると反転していた部分が画面から消えます。

画面上では消えましたが、実は「カットバッファ」と呼ばれるところに転送され、一時的に記憶されています。カットバッファの内容は、[貼付け]コマンド(f･3 キー)を実行すれば、別の場所に貼り付けることができます。

また、このまま入力を続けたりすれば、範囲指定した部分は削除したのと同じことになります。

④貼り付けを行います。貼り付けた行はカーソルのある行とその前の行の間に挿入されますので、元の第 4 行(現在は第 2 行)にカーソルを合わせて、 f･3 キー([貼付け]コマンド)を押します。

先ほど切り取った内容が貼り付けられて、行の移動ができました。

カットバッファの内容は、次に[切取り]や[複写]コマンド(f･2 キー)を実行して新しい内容をカットバッファに入れるか、エディタを終了するまで残っています。したがって、1箇所で切り取った内容をいつでも何度でも貼り付けることができます。

たとえば元の第3行(新しい第1行)の行にカーソルを合わせて f･3 キーを押せば、

赤白がんばれ
ビシバシいこうぜ
やじをとばすな
赤白がんばれ
ビシバシいこうぜ
なかまじゃないか

のようになります。

行単位で複写

行単位で複写する場合も、範囲を指定してカットバッファに入れ、別の場所に貼り付けます。このとき指定した範囲が画面から消えないので、結果的に複写したことになるわけです。

基本的な操作は、 f･1 キー([切取り]コマンド)の代わりに f･2 キー([複写]コマンド)を使う以外は前項の「行単位で移動」と同じです。指定した部分は画面から削除されませんが、カットバッファに転送されます。

[切取り]コマンドのときと同じように、カットバッファに転送された内容は保持されます。したがって、複写した内容を何回でも貼り付けることができます。

注意

ファイルの最終行(EOF行)は、切り取りや複写の対象にできません。
また、 CTRL + Y キーや CTRL + K キーで削除した内容はカットバッファには格納されません。

ファイルを挿入して読み込む

いま編集しているファイルに他のファイルの内容を挿入したい場合には、 f･4 キー([ファイル挿入]コマンド)を利用します。このことを「挿入読み込み」といいます。

挿入読み込みで読み込んだ内容は、[貼付け]コマンドのときと同じように、カーソルのある行の直前に挿入されます。

f･4 キーを押すとファイル選択ウィンドウが表示されますから、挿入したいファイルを選択します。ファイル選択ウィンドウの使い方については、「6.2　ファイル選択ウィンドウ」をご覧ください。

[ファイル挿入]を中止して編集画面に戻るには、 ESC キーを押します。

ファイルを選択すると挿入が始まり、しばらくすると編集画面に戻ります。

コントロールコードを入力する

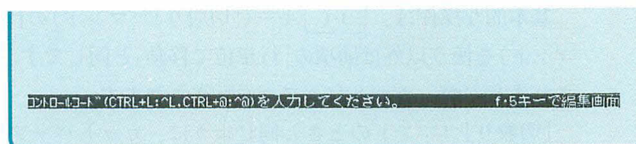
コントロールコードとは、文字コードのうち実際の文字が割り当てられていないコードを一般的に呼ぶときの名前です。文字は割り当てられていなくても、さまざまな機能が割り当てられています。

たとえばバッチファイルなどで文字に色を付けたり、反転文字を表示したりといったことをするには、MS-DOS の「エスケープシーケンス」を使います。このときの「エスケープコード」はコントロールコードの一種です。これらのコントロールコードをスクリーンエディタで入力するための機能が、f･5 キー([コントロール]コマンド)です。

参考

「エスケープシーケンス」は、エスケープ文字といわれる文字と別の文字を組み合わせて、画面や周辺装置を制御するしくみです。詳しくは別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

コントロールコードを入力するには、コントロールコードを入力したいところで f･5 キーを押します。ガイドラインが次のように変わり、コントロールコード入力モードになります。



コントロールコード入力モードであることを表わす表示。

コントロールコードは CTRL +文字キーの形式で入力してください。入力したコントロールコードは画面では「^コード名(半角文字･記号 1 文字)」のように表示され、少し色が変わって見えます。

まちがってコントロールコード入力モードにしてしまった場合などは、もう一度 f･5 キーを押すとモードが解除され、編集画面に戻ります。スクリーンエディタでは一般に ESC キーでコマンドを取り消しますが、このモードでは ESC キーを押すとエスケープコードが入力されてしまいますので注意してください。

注意

コントロールコードを入力するときには、そのコントロールコードの意味をよく理解した上で入力してください。特に CTRL + Z (画面では"^Z")を文書中に入力してファイルを保存すると、"^Z"以降の内容は読み出せなくなってしまいます。"^Z"は MS-DOS では EOF マークとして機能しているからです。

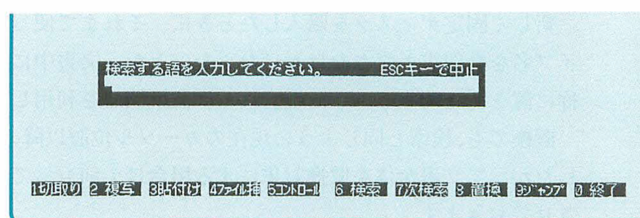
検索してみる

大きな文書を編集しているときは、特定の語を検索できると便利です。

●検索する（検索語入力）

スクリーンエディタでは、検索は現在カーソルがある行・桁位置から後ろに進みます。したがって編集中の文書全文にわたって検索したい場合は、あらかじめ文書の文頭にカーソルを移しておかなければなりません。文書の文頭にカーソルを移す方法は、「6.4　ファンクションキーの編集機能」の「ジャンプ」を参照してください。

①［f･6］キーを押します。次のようなウィンドウが画面に表示されます。このウィンドウを「検索ウィンドウ」と呼びます。



検索したい文字を入力する検索ウィンドウ。最初は空になっている。

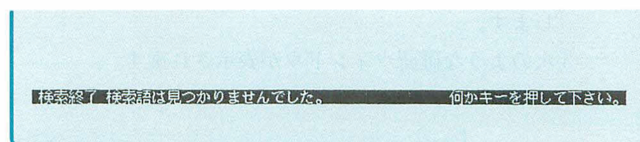
②検索したい語を検索ウィンドウに入力します。検索語は半角文字でも全角文字でもかまいませんが、半角文字で50文字までです。たとえば、〝日本語〟という語を検索するときは、

日本語

と入力します。

③［⏎］キーを押すとただちに検索が始まります。検索語が見つかると反転文字で表示され、文字やコマンドが入力できる状態になります。

④検索語が見つからなかった場合は、ガイドラインに



検索文字が見つからなかったときには、このように表示される。

と表示されます。

検索ウィンドウに入力した検索語は、再び［f･6］キーで検索語を入力するまで保持されます。したがって、次項で説明する［f･7］キーの「次検索」を使うと、次々に同じ検索語を探すことができます。

●前回検索した検索語を検索する

一度検索ウィンドウに入力した検索語は、再び別の検索語を入力するまで保持されています。

保持されている検索語で順次検索するのが、f･7 キー([次検索]コマンド)です。[検索]コマンドは、あらかじめ検索語が入力されていなければ使えません。ですから、1度も検索語を入力していないのに f･7 キーを押すと、自動的に検索ウィンドウが表示されます。

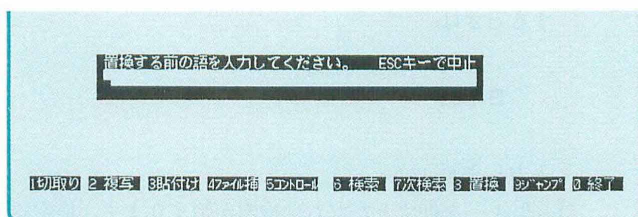
この機能も f･6 キーの[検索]コマンドと同様に、現在のカーソル位置の行から文末へ向けて検索します。したがって、文書の全体を検索するにはカーソルをあらかじめ文書の先頭に移動しておかなくてはなりません。

置換してみる

新しく固定ディスクを購入したときに、それまで使っていたバッチファイルのドライブ名を全部書き直さなければならないとか、文書中に入れておいた仮名称を正式名称に置き替えたいといった場合には、置換機能を利用します。

置換でも、検索と同じように現在のカーソル位置以降の文書から置換語を探します。したがって文書全体を置換対象にする場合は、前もって文書の先頭にカーソルを移動させておきます。

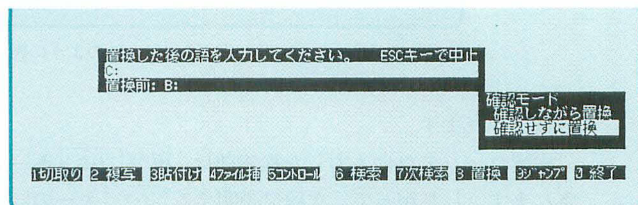
①f･8 キー([置換]コマンド)を押すと、画面に置換される語を入力するウィンドウが表示されます。置換する前の言葉(語)を50文字(半角換算)以内で入力します。



このウィンドウで、置き替えの対象になる語を指定する。

②⏎キーを押すと、置換後の文字を入力するようになります。入力して⏎キーを押します。

③次のような確認ウィンドウが表示されます。



置き替える文字などを確認する。誤って置き替えてしまうと後で戻すのがたいへんなのでよく確認すること。

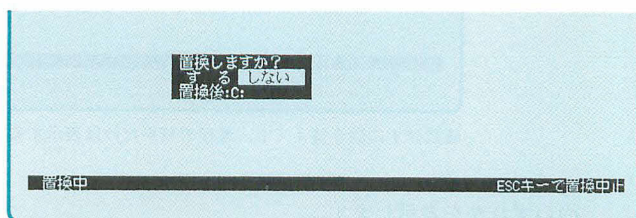
[確認しながら置換]は、置換前の語を見つけるたびに置き替えるかどうかをたずねるメッセージを表示します。

[確認せずに置換]は、置換前の語をすべて確認なしで置き替えます。

↑ ↓ キーでどちらかを選び、⏎ キーを押します。

●確認しながら置換する

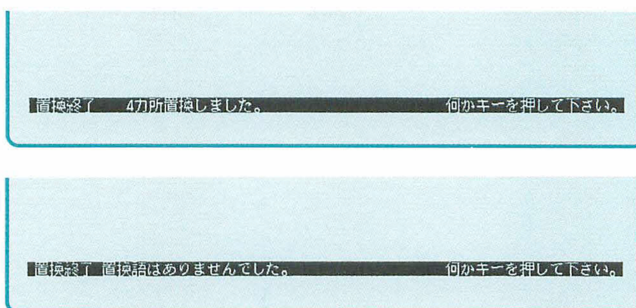
[確認しながら置換]を選ぶと、置換前の語を見つけると次のようなメッセージを表示します。



この語を置き替えるかどうかを、このウィンドウで指定する。

置換するかしないか、希望の方を ← → キーで反転させ、⏎ キーを押します。[する]を選ぶと置換後の語に置き替えます。[しない]を選ぶと置き替えません。

これを繰返して、文末まで置換前の語を探します。文末までいくと、ガイドラインに



置き替え対象の文字が１つも見つからなければ、エディタはその旨も表示する。

のいずれかを表示します。

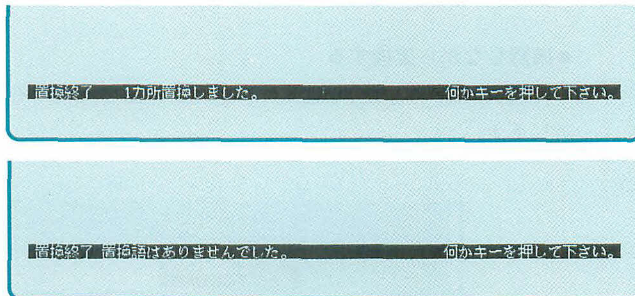
何かキーを押すと、再び編集作業を続行できます。

途中で置換を中断するときは、ESC キーを押します。それまでに置換した語があれば、ガイドラインに語数を表示してコマンドを終了します。

CHAPTER 6

●確認せずに置換する

［確認せずに置換］を選ぶと、見つかった置換前の語をすべて置換後の語に置換します。文書の末尾まで探し終えるとガイドラインに、



確認せずに置き替えても、最後の結果だけは表示するようになっている。

のいずれかを表示します。

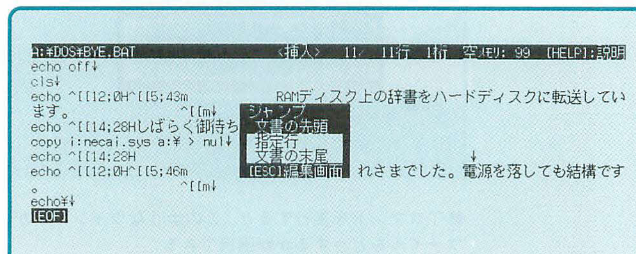
［確認せずに置換］を選ぶときには、文書の内容と置換語をよく確認してください。むやみにこれを選ぶと、予期しない語が置き替えられてしまうことがあります。いったん置き替えられた語は手作業で戻すしかありません。このような事故を防ぐためにも、大規模な置換をする前にいったん文書をファイルに保存しておくとよいでしょう。

ジャンプ

文書の大きな範囲でカーソルを移動させたいときは、[f･9]キー([ジャンプ]コマンド)を利用します。特に大きな文書を編集しているときには便利な機能です。

[ジャンプ]コマンドは、[切取り]や[複写]コマンドでの範囲を指定するときにも利用できます。

[f･9]キーを押すと、次のようなウィンドウが表示されます。

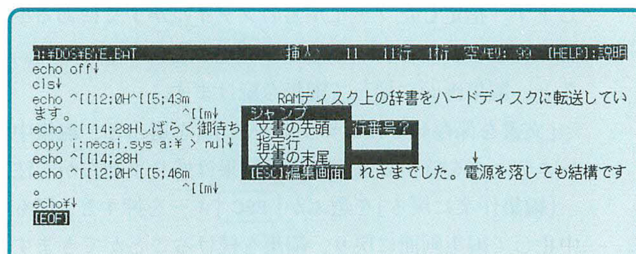


ジャンプコマンドを実行すると、このようなウィンドウが表示される。この中からジャンプ先を選択する。

[↑][↓]キーで反転部分を移動させ[↵]キーを押します。

[文書の先頭]を選ぶと、文書の先頭行の1文字目にカーソルが移動します。[文書の末尾]を選ぶと、文書の末尾行(EOFマーク)にカーソルが移動します。

[指定行]を選択すると、行番号を指定するウィンドウが表示されます。

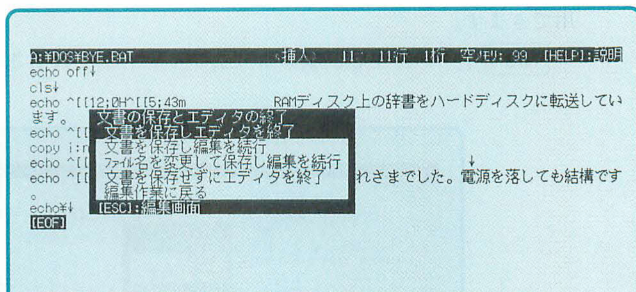


特定の行にジャンプしたいときは、ウィンドウでジャンプ先の行番号も指定する。

移動先の行番号を半角数字で入力して[↵]キーを押します。

終了、または文書の保存

スクリーンエディタを終了したり、文書を保存するときには f･10 キー([終了]コマンド)を押します。次のようなウィンドウが表示されます。



終了コマンドを実行すると、このようなウィンドウが表示される。編集中のファイルをどうするかが選択できる。

反転部分を ↑ ↓ キーで移動し ⏎ キーを押して選択します。

[文書を保存しエディタを終了]を選ぶと、編集中の文書をディスクに書き込んでスクリーンエディタを終了します。

[文書を保存し編集を続行]を選ぶと、編集している文書をディスクに書き込み、編集画面に戻って編集を続けます。

[ファイル名を変更して保存し編集を続行]を選ぶと、編集している文書を別のファイル名でディスクに書き込みます。新しく付けるファイル名を入力して、⏎ キーを押します。指定したファイル名のファイルがすでにある場合は上書きをするかどうかを聞いてきますから、するかしないかを選んでください。ディスクへの書き込みが終わると、編集画面に戻って編集を続けます。

[文書を保存せずにエディタを終了]を選ぶと、編集中の文書を保存せずにスクリーンエディタを終了します。編集結果は残りませんから注意してください。

[編集作業に戻る]を選ぶか ESC キーを押すと、何もしないまま[終了]コマンドを中止して編集画面に戻り、編集を続けることができます。

[文書を保存しエディタを終了]と[文書を保存し編集を続行]の2つでは、編集中の文書をパス表示行に表示されているファイル名で保存します。すでに存在していたファイルを編集していた場合は、同時に編集前のファイルを拡張子〝BAK〞で残します。後で編集結果が思わしくないと判断されたような場合は、拡張子〝BAK〞のファイルを利用してファイル内容を戻すことができます。

ちなみにスクリーンエディタでは、拡張子が〝BAK〞のファイルはバックアップファイルであるとみなされ、編集することができません。バックアップファイルを編集するには、MS-DOSのRENコマンドで拡張子を〝BAK〞以外に直してください。

6.5 エラーが出ても落ち着いて

文書の編集中にエラーが表示されても、あわてることはありません。このマニュアルを調べているうちに文書が壊れてしまうようなことはありませんから、どのエラーが表示されているかを調べてじっくり読み、対処してください。

「拡張子が「.BAK」のファイルは編集できません。」(起動時、またはファイル選択ウィンドウ)

拡張子が".BAK"のファイルはバックアップファイルで、seditでは編集できません。MS-DOSのRENコマンドなどでファイル名の拡張子を別のものに変えてから再度起動してください。

「拡張子に「.BAK」は使えません。」

拡張子が".BAK"のファイルはバックアップファイルで、seditでは指定できません。他の拡張子を指定してください。

「警告　編集作業に必要なメモリが足りなくなりました。これ以上のファイルは編集できません。エディタを終了して下さい。」

このメッセージが表示されたら、ただちに f･10 キー(終了)の[文書を保存しエディタを終了]を選んでエディタを終了してください。このメッセージを無視して編集を続けると、編集中の文書が破壊される恐れがあります。

「このファイル名は使用できません。」

既存のディレクトリと同じ名前や、MS-DOSのシステムが予約しているファイル名は使えません。別のファイル名を指定してください。

「指定のディレクトリが見つかりません。」

存在しないディレクトリを指定しました。指定したドライブ名やディレクトリ名を確認してください。

「挿入ファイルが大きすぎてメモリに入りきりません。」(ファイル挿入読み込み時)

挿入しようとする文書が大きすぎます。編集中の文書は挿入読み込みを実行する前の状態に戻っていますから、いったん文書を保存して、EDLINやお手持ちのエディタ/日本語ワープロをお使いください。

「ディスクが異常です。確認してください。」(ディスク読み書き中)

ディスクが初期化されていないか、壊れている可能性があります。ディスクを確認して、初期化済みのディスクに交換してください。 Y キーを押すと文書の読み込み/保存を再開します。 A キーを押すと中断して編集画面に戻ります。

「ディスクが書き込み禁止状態です。」(ディスク読み書き中)

ディスクが書き込み禁止(ライトプロテクト)になっています。ディスクを確認して Y キーを押すと、文書の保存を再開します。A キーを押すと文書を保存せずに編集画面に戻ります。ライトプロテクトをはずす場合は、そうなっている理由をよく考えてからはずしてください。

「ディスクに異常が発生しました。ディスクを確認してください。」(ディスク書き込み中)

文書を保存中にディスクでエラーが発生しました(このエラーはディスク読み書き中のエラーに続いて表示されることがあります)。

このエラーだけが表示された場合は、ディスクの空き容量が足りなくなった場合がほとんどです。ディスクを交換してもう一度文書を保存してください。

固定ディスクやRAMドライブに文書を保存しようとしてこのエラーが表示された場合は、ディスクを交換することができませんから、次の手順でフロッピィディスクに文書を保存してください。

① f･10 キー[終了]の[ファイル名を変更して保存し編集を続行]を選択します。
②フロッピィディスクドライブにファイル名を指定します。または、最初に保存しようとした固定ディスクとは別の(もっと空き容量のある)ドライブにファイル名を指定します。
③文書を別のドライブのファイルに保存したら、 f･10 キー[終了]の[文書を保存せずにエディタを終了]を選びます。

「ドライブの準備ができていません。」(ディスク読み書き中)

ドライブにディスクが入っているか、ドライブを正しく閉じているかを確認してください。Y キーを押すと文書の読み込み/保存を再開します。A キーを押すと中断して編集画面に戻ります。

「ドライブの準備ができていません。」(その他の場合)

ディスクが正しく挿入されているかを確認してください。

「ファイル名を指定してください。」

文書を保存する場合には、ファイル名の指定が必要です。ドライブ名やパス名以外にファイル名も入力してください。

「編集用のメモリが足りませんのでプログラムを中断します。」(起動時)

sedit を起動できるだけの空きメモリがありません。他のプログラムの子プロセスとして起動しようとしたのであれば、いったん親プロセスに戻ってから再度起動してください。

「編集ファイルが大きすぎてメモリに入りません。」(起動時)

文書ファイルが大きすぎて、sedit では編集できません。EDLIN を使うかお手持ちのエディタまたは日本語ワープロをお使いください。

付録 A
困ったときに開くページ

ここでは、コマンドプロンプトからMS-DOSを使っているときに表示される、COMMAND.COMが発するエラーメッセージを「デバイスエラーメッセージ」とその他の一般メッセージの2種類に分けて、原因と処理法を解説します。

MS-DOSではこの他、実行しているプログラム（コマンドやアプリケーションソフト）が独自に表示するエラーメッセージもあります。このマニュアルでは取り上げていませんから、別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』やアプリケーションソフトのマニュアルを参照してください。

また、COMMANDコマンドについては「第4章　コマンドリファレンス」のCOMMANDコマンドの項、あるいは別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』を、DOSシェルが発するメッセージについては別冊の『さあ始めようMS-DOS』「第6章　トラブルレスキュー隊」を参照してください。

APPENDIX

A.1 周辺装置が原因のエラー —— デバイスエラーメッセージ

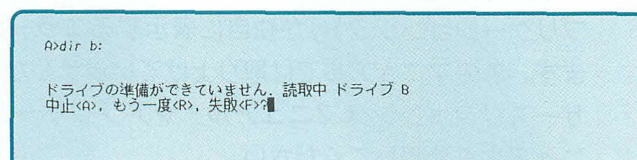
「デバイスエラーメッセージ」は、MS-DOSが表示するエラーメッセージの中でも特に重要なメッセージで、周辺装置が原因で表示されます。ディスクドライブやプリンタ、ディスプレイなどの周辺装置(デバイス)に対してデータを読み出したり書き込みんだりしたときになんらかの障害が起きたことを示しています。

デバイスエラーメッセージの形式

デバイスエラーメッセージは、次のような形式で表示されます。

〈エラーのタイプ〉〈読取中/書込中〉〈デバイス名〉
中止＜A＞，もう一度＜R＞，無視＜I＞，失敗＜F＞？

(例)　フロッピィディスクが入っていないドライブを指定してDIRコマンドを実行



ディスクが入っていないドライブにアクセスすると、このようなメッセージが表示される。

〈エラーのタイプ〉

起きているエラーの簡潔な説明です。エラーメッセージの本体です。ここに表示されるメッセージの種類と原因は「デバイスエラーメッセージの形式」で、対処法は「デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法」で後述します。

〈読取中/書込中〉

どのような処理をその装置に試みているときにエラーが発生したかを示しています。「読取中」か「書込中」のいずれかです。

〈デバイス名〉

エラーが起きた装置名です。ドライブ名、デバイスファイル名などが表示されます。

中止〈A〉，もう一度〈R〉，無視〈I〉，失敗〈F〉？

この後の処理をどうしたらよいかをユーザーにたずねています。ユーザーは[A]、[R]、[I]、[F]のいずれかのキー(半角英文字1字、大文字小文字問わず)を入力して、この後の処理を指示します(これら以外の文字は受け付けられません)。それぞれの文字の意味は次の通りです。

A (Abort)	しようとしていた処理もその後の処理もすべて中止し、そのままMS-DOSに戻る。
R (Retry)	もう一度処理を試みる。
I (Ignore)	エラーを無視して次の処理に進む(正常であるように見せる)。
F (Failure)	エラーとして処理する。

●デバイスエラーメッセージの種類と原因

デバイスエラーメッセージの〈エラーのタイプ〉で表示されるメッセージは次のようなものです。これですべてではなく、他のメッセージが表示されることもあります。

エラーです.

このエラーは他のどのエラーにも当てはまらないときに表示され、めったに起きません。「デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法」を参照して、[A]キーか[R]キーで対処します。

書込みができません.
読込みができません.

表示されたデバイス(多くはディスクドライブ)でデータを読み書きできないときに表示されます。ディスクが正しく挿入されているかを確かめて[R]キーを押します。それでも同じメッセージが表示されるようなら[A]キーを押します。「デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法」を参照してください。

書き込み禁止です.

ライトプロテクトが施されているディスクに対して書き込もうとしたときに表示されます。ライトプロテクトをはずせば書き込めるようになりますが、ライトプロテクトが施されている理由をよく考えた上ではずしてください。[R]キーを押して再度書き込むときには、同じディスクを挿入してください。別のディスクを挿入すると破壊されます。

このディスクは扱えません.

ディスクが他のOS(たとえばディスクBASIC)で初期化されているなどの原因で、MS-DOSが認識できないときに表示されます。「デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法」、「ディスクやファイルの異常によるデバイスエラーメッセージへの対処法」を参照してください。

MS-DOSで使用するにはFORMATコマンドで初期化し直してください。ただし、初期化するとディスク上のファイルは消えてしまいます。

シークエラーです.

MS-DOSが、ディスク上の情報を見つけられないときに表示されます。フロッピィディスクがドライブに正しく入っているかどうかを確かめてください。他のドライブに入れ替えて試してみるのも有効です。「デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法」、「ディスクやファイルの異常によるデバイスエラーメッセージへの対処法」を参照してください。

セクタが見つかりません.

ディスクの欠陥のためにMS-DOSが要求されている情報を見つけられないときに表示されます。「デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法」、「ディスクやファイルの異常によるデバイスエラーメッセージへの対処法」を参照してください。

データエラーです.

ディスクに欠陥(スキップセクタ)があるため、MS-DOSが正しくデータを読み書きできなかったときに表示されます。「デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法」、「ディスクやファイルの異常によるデバイスエラーメッセージへの対処法」を参照してください。Rキーで何度か再試行するとうまくいくこともあります。

ディスクは交換できません.

ディスクの交換が許されていないときにフロッピィディスクを入れ替えようとすると表示されます。元のディスクに戻してRキーを押します。

ドライブの準備ができていません.

表示されているドライブやデバイスの準備ができていないときに表示されます。フロッピィディスクが正しく挿入されているか、プリンタの電源がONになっているかなどを調べ、Rキーを押します。

ドライブの指定が違います.

接続されていないドライブ名を指定したときに表示されます。

無効な機能です.
無効なパラメータです.
無効なユニットです.

表示されたデバイスに対して、デバイスドライバが正しくないコマンドを送りました。「デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法」を参照してください。

用紙がありません.

接続されたプリンタに紙がないか、電源が入っていません。紙を補給するか、電源を入れて「デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法」を参照してください。

ロック違反です.
共有違反です.

いずれも、ネットワークドライブなどで、他のプログラムで使用されているファイルをアクセスしようとしたときに表示されます。「デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法」を参照してください。Aキーを押すか、しばらくしてからRキーを押します。

デバイスエラーメッセージへの一般的な対処法

デバイスエラーメッセージが表示されたときには、一般的には次のような手順で対応します。

①まずメッセージを読んで、なにがエラーの原因かを考えます。
たいていの場合は、ちょっとした操作のし忘れが原因です。たとえば、「ドライブの準備ができていません.」の原因は、フロッピィディスクをセットし忘れていたとか、ドライブの蓋をきちんと閉めていなかったなどでしょう。「書き込み禁止です.」の場合は、フロッピィディスクにライトプロテクトシールを貼ったままにしていた(5インチフロッピィディスクの場合)などです。

②原因に応じた正しい処置をします。
いったんディスクを抜いてライトプロテクトシールをはがすとか、別の新しいディスクを入れる、プリンタに紙を補給するなどです。

③エラーの原因を取り除いて R キーを押してみてください。
回復の望みがあれば、まず R キーを入力してみます。エラーの原因が軽ければ、1〜数回 R キーを押すとそのまま処理を続行できることがあります。

注意

フロッピィディスクが原因でエラーが発生した場合は、必ずエラーが発生したときと同じディスクのままで R (Retry)を選択してください。他のディスクに差し替えて R を選択すると、そのディスクが破壊される恐れがあります。MS-DOS がディスクが差し替えられたことを検知できずに、そのまま前のディスクの情報を書き込もうとするかもしれないからです。

④ R キーでも繰り返しエラーメッセージが出るようであれば、処理を中止します。
ほとんどの場合は A キーを押すと MS-DOS のプロンプト表示状態に戻りますから、じっくりと原因と対策を考えます。
A キーは、エラーが発生したときに実行中だった処理を中断させるわけですから、処理結果は保証されません。

F キーは、バッチ処理のように続けていろいろな処理をしているとき、エラーが発生した処理は無視してでも次の処理を行いたければ選択します。

ディスクやファイルの異常によるデバイスエラーメッセージへの対処法

たとえばファイルの読み書き中にエラーが発生すると、デバイスエラーメッセージが表示されます。何度か R キーを押しても続行できなければ、いくつかのファイルは使用できなくなっていたり、ディスクそのものが不良になっている可能性が非常に高いと考えられます。

●スキップセクタ

MS-DOSは、「セクタ」という細かい区画に分けてディスクを管理しています。ディスクをこのセクタに分けることも、じつはディスクの初期化の大きな役割なのです。

セクタになんらかの異常が発生すると、そこは記録には使えません。この部分を「スキップセクタ」と呼んでいます。

セクタの異常は、ディスクの劣化や傷、適当でない環境などによる物理的な障害が原因で起こることが多いようです。フロッピィディスクになにか液体物をこぼしてしまったとか、固定ディスクを運搬中に強い衝撃を与えてしまった、停電や不注意で固定ディスクの電源が急に切断されてしまったような場合にも、ディスクの記録面に物理的な障害が起きます。

固定ディスクやフロッピィディスクなどのディスクドライブは、磁性体を塗った円盤に磁気で情報を記録しています。したがって、他の磁気(磁石あるいは強い磁気を発生するなにか)が原因で異常が発生することもあります。熱に弱いこともあります。あまりにも永い間アクセスせずに置いておいたフロッピィディスクの磁気記録が弱くなって読めなくなることもあります。

●異常からの復旧

ディスクのスキップセクタは、ファイルを読み書きするときに発生するデバイスエラーメッセージによって発見されることがほとんどです。きのうまで正常に読み書きできていたディスクなのに、突然〝データエラーです.〞というメッセージが出たら、それはほとんどの場合スキップセクタが発生してディスクが正常に読み書きできなくなったことを示します。

たまたまファイルの記録に使っていた部分がスキップセクタになると、それがファイルの一部であっても、MS-DOSはそのファイル全体に対してアクセスできなくなります。

ディスクの読み取り中にエラーが発見された場合には、どのファイルに問題があるかを突き止めるとともに他の正常なファイルを別の安全なディスクにコピーします。DOSシェルやCOPYコマンドなどで、問題のディスク上のファイルを1つずつ、他のディスクにコピーしてください。コピー中に再びエラーが発生したファイルが問題のファイルです。

```
A>copy b:¥*.* a:¥system
B:¥DOSSHELL.0ID
B:¥DOSSHELL.0RB
B:¥DOSSHELL.1ID
B:¥DOSSHELL.1RB
B:¥DOSSHELL.COM
B:¥DOSSHELL.EXE
B:¥DOSSHELL.HLP

データエラーです. 読取中 ドライブ B
中止<A>, もう一度<R>, 無視<I>, 失敗<F>?
```

いったん書き込んだデータが、何らかの原因で読み込めなくなったときのエラーの例。

このようなバックアップのときは、エラーを無視してもコピーを取る必要がありますから、［F］キーを押して他のファイルのコピーを続けます。

参考

一度データエラーなどの問題が起きたディスクはすぐ捨てずに、もう一度初期化(フォーマット)し直してみることをおすすめします。磁石(磁気)によるダメージなら、初期化し直すだけで問題なく回復します。初期化し直してもまたエラーを起こすようであれば、そのディスクはなるべく使用せずに廃棄したほうよいでしょう。

また、後述のRECOVERコマンドで処理すると、そのディスクのスキップセクタの箇所には特別な印が付き、MS-DOSは以後そのセクタを使用しなくなります。したがって、ディスク全体にアクセスするコマンド(DISKCOPYコマンドなど)でなければ通常通り使用できます。

他のファイルを別のディスクに退避したら、RECOVERコマンドで問題のファイルの復旧を試みます。RECOVERコマンドは、スキップセクタを含むファイルやディスクからスキップセクタの部分を切り離して、正常な部分の情報だけを復旧するコマンドです。

RECOVERコマンドについては、「第4章　コマンドリファレンス」のRECOVERコマンドの項、あるいは別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

問題のファイルに対してRECOVERコマンドを実行します。

```
A>recover b:¥dosshell.hlp

どれかキーを押してください.
ドライブ B:: のファイル修復を始めます.


XXXXXX バイト (XXXXXX バイト中)修復しました.
```

特定のファイルに対してRECOVERコマンドを実行する例。

復旧が終わると、スキップセクタが切り離されて、その分ファイルのサイズが小さくなっているでしょう。

RECOVERコマンドはスキップセクタ上にあったデータを捨ててしまうので、そこを記録に使っていたファイルは、完全に元の状態に修復できるわけではありません。データが欠落してしまうからです。したがって、問題のファイルがテキストファイルの場合は、内容が一部欠落したり順序が入れ替わった状態に修復される可能性があります。このファイルも、他のディスクにコピーしておきます。

問題のファイルがプログラムなどのバイナリファイルの場合は、残念ながら修復はほとんど不可能でしょう。内容が欠落してしまうと、プログラムとしての正常な動作はまったく期待できないからです。

続いて、CHKDSKコマンドでディスク上のセクタのチェイン情報を直します。

RECOVERコマンドはスキップセクタを単純に切り離すだけなので、切り離されたセクタのディスク上でのチェイン情報がおかしくなっています。そこで、CHKDSKコマンドでセクタのチェイン情報を修正します。

RECOVERコマンドでスキップセクタを切り離したファイルを含むディスクを、CHKDSKコマンドにかけてみます。

```
A>chkdsk b:
ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
エラーが発見されました.
Fパラメータが指定されていないのでディスクの修復は行われません.

B:¥DOSSHELL.HLP
    アロケーションエラーです. サイズを調整しました.

    XXXXXX バイト : 全ディスク容量
    XXXXXX バイト : XX 個のユーザーファイル
      XXXX バイト : スキップセクタ
     XXXXX バイト : 使用可能ディスク容量

      XXXX バイト : クラスタサイズ
     XXXXX 個     : 全クラスタ
     XXXXX 個     : 使用可能クラスタ

     XXXXX バイト : 全メモリ
     XXXXX バイト : 使用可能メモリ
```

スキップセクタを切り離すと、ディスクの中のセクタのつながりが切れる。
CHKDSKコマンドはそれを発見する。

少し長い実行結果が表示され、指定したドライブのディスクでエラーが発見されたこと、スキップセクタがあったことなどがわかります。CHKDSKコマンドでディスクのセクタのチェインを修復するには、CHKDSKコマンドに"/F"スイッチを指定して実行しなければなりません。

```
A>chkdsk b: /f
ボリュームシリアル番号は XXXX-XXXX
B:¥DOSSHELL.HLP
    アロケーションエラーです. サイズを調整しました.

    XXXXXX バイト : 全ディスク容量
    XXXXXX バイト : XX 個のユーザーファイル
      XXXX バイト : スキップセクタ
     XXXXX バイト : 使用可能ディスク容量

      XXXX バイト : クラスタサイズ
     XXXXX 個     : 全クラスタ
     XXXXX 個     : 使用可能クラスタ

     XXXXX バイト : 全メモリ
     XXXXX バイト : 使用可能メモリ
```

CHKDSKコマンドの"/f"スイッチは、スキップセクタを切り離して切れたチェイン情報を復旧する。

"/F"スイッチを付けてCHKDSKコマンドを実行すると、スキップセクタを切り離したことによってばらばらになった正常なセクタを、ファイルに変換します。

コマンド実行後のディスクには、拡張子が"CHK"になったファイルができていますから、このファイルも他のディスクにコピーしましょう。

これで、RECOVERコマンドで作成された少し短いファイルと、"/F"スイッチ付きのCHKDSKコマンドで作成された"CHK"ファイルとができました。これらを組み合わせて、できるだけ元のテキストファイルを復元してください。

A.2 その他のエラーメッセージと対策

ここでは、デバイスエラーメッセージ以外にMS-DOSが比較的よく表示するエラーメッセージをアルファベット順と五十音順で並べ、原因(▼印)と対策(▽印)を説明します。

：以下のファイルが無効または見つかりません：〈ファイル名〉

▼CONFIG.SYSファイルのDEVICEコマンドまたはINSTALLコマンドで指定されたファイルが、指定されたパスにありません。
〈ファイル名〉が「コマンドインタプリタ」のときは、CONFIG.SYSファイルのSHELLコマンドで指定したディレクトリか起動ドライブのルートディレクトリにCOMMAND.COMファイルがありません。

▽正しいシステムディスクでMS-DOSを起動し、〈ファイル名〉のファイルまたはCOMMAND.COMファイルをコピーしてください。

0で除算をしました.

▼実行しようとしたコマンドのプログラム内部のエラーです。

▽コマンドの実行は自動的に中止され、MS-DOSに戻ります。コマンドやアプリケーションのプログラム自体に問題があるので、プログラムの修正が必要です。

COMMANDがロードできません, リセットしてください.

▼システムディスクに、COMMAND.COMファイルがありません。または、CONFIG.SYSファイル中のSHELLコマンドで指定したパス位置と、実際にCOMMAND.COMファイルの存在しているディレクトリ位置がちがっています。

▽他のシステムディスクでMS-DOSを起動し直した後に、エラーメッセージの出たシステムディスクにCOMMAND.COMファイルがなければ、これをコピーします。また、CONFIG.SYSファイルのSHELLコマンドで指定されたパスの位置が、実際にCOMMAND.COMファイルの存在しているディレクトリとちがっているときは、CONFIG.SYSファイルを修正するか、SHELLコマンドで指定したパス位置のディレクトリにCOMMAND.COMをコピーします。

COMMAND.COMが違います.

▼メモリの大部分を使用するプログラムを実行した後に、MS-DOSがCOMMAND.COMファイルをロードし直すことがあります。このとき、あるいはDOSシェルから〈コマンドプロンプト〉を実行したとき、COMMAND.COMファイルが見つからないか、またはMS-DOSの別のバージョンのCOMMAND.COMを実行しようとした場合に表示されます。

▽ MS-DOS を起動したときと同じシステムディスクをカレントドライブに入れ、どれかのキーを押してください。またはシステムディスクをドライブに入れ、リセットを押して再起動させます。CONFIG.SYS ファイルの SHELL コマンドで、COMMAND.COM の再ロードのパスを正確に指定しておくのもよいでしょう。

CONFIG.SYS に無効なコマンドかパラメータがあります.

▼ CONFIG.SYS ファイルの中で、正しくないコマンドが使われています。

▽ CONFIG.SYS ファイルの内容を確認して、コマンドのつづりや CONFIG.SYS ファイルでは利用できないコマンドが入っていないか調べます。正しいコマンドとコマンドの書式については、「第 4 章　コマンドリファレンス」、または別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

EXE ファイルのエラーです.

▼実行しようとしたコマンドのファイルの拡張子が"EXE"なのに、EXE 形式のファイルの正しい形式ではありません。

▽ファイル名が変更されていないかどうか確認してください。正しい EXE 形式のファイルをコピーしてください。

FOR コマンドは入れ子にはできません.

▼ FOR コマンドのコマンドラインで、〈コマンド〉の指定に FOR コマンドを使っています。

▽ FOR コマンドの中で FOR コマンドを使うことはできません。

オープンされているファイルの数が多すぎます.

▼ CONFIG.SYS ファイル中の FILES コマンドに指定した数より多くのファイルをオープンしようとしました。

▽ FILES にもっと大きな値を設定して、MS-DOS を再起動してください。

環境変数のためのメモリが足りません.

▼環境変数を記憶しておくメモリ領域(環境メモリ)が足りず、これ以上環境変数を設定できません。

▽ CONFIG.SYS ファイル内の SHELL コマンドで COMMAND.COM を起動するとき、"/E："スイッチで環境メモリの大きさを指定してください。指定がないときのデフォルトの大きさは 256 バイトです。

コピーすることはできません.

▼ COPY コマンドで指定した、コピー元ファイル名とコピー先ファイル名が同じです。たとえば、

```
copy   file1   file1
```

を実行すると、このエラーが表示されます。

▽同じディレクトリ内で同名のファイルを作成することはできません。ファイル名を変えてコピーし直してください。

コピー前に送り側の内容が失われました.

▼ COPY コマンドで、コピー完了前に複写元ファイルが重ね書きされてしまいました。たとえば、

```
copy　aaa+bbb　bbb
```

を実行すると、コピーの終わる前に"bbb"の内容が破壊されてこのエラーが表示されます。

▽複写元と複写先に同じファイル名を指定しないようにします。上の例では"bbb"は破壊され、内容が失なわれて復旧できません。以後、COPY コマンドの書式には十分注意してください。また、このようなときのためにも、バックアップをつくるようにしてください。

コマンドまたはパラメータが違います. ー〈パラメータ〉

▼ CONFIG.SYS ファイル内で指定したコマンドのパラメータが正しくありません。

▽あわせて表示される行番号と〈パラメータ〉を参考に、正しい値に設定し直して MS-DOS を再起動してください。

コマンドまたはファイル名が違います.

▼指定したコマンドやアプリケーションのプログラムファイルが見つかりません。コマンド名(ファイル名)をまちがえたか、ディスクにそのファイルがないか、コマンド検索パス(PATH)の設定が正しくありません。

▽ファイル名をまちがえていたら、正しく入力し直します。コマンド検索パスが設定されていなければ設定するか、ファイル名をフルパスで指定するか、プログラムファイルがあるディレクトリをカレントディレクトリにしてから実行します。
すでにコマンド検索パスが設定されていれば、設定したパスのディレクトリかカレントディレクトリに目的のコマンドファイルがあるかどうかを確認してください。
コマンド検索パスを PATH コマンドで調べ、正しい状態でコマンドを使うようにしてください。

時刻の指定が違います.

▼ TIME コマンドで指定した時刻の書式がちがいます。

▽正しい書式で時刻を指定してください。

そのデバイスからバイナリ形式の読取はできません.

▼ COPY コマンドで、デバイスファイルをコピー元にしているときに"/B"スイッチを指定しています。

▽"/B"スイッチの指定をやめるか、"/A"スイッチを指定します。

ディスクがいっぱいです.

▼ディスクの空き容量がなくなり、指定されたコマンドを実行できません。

▽ディスク中の不用なファイルを消去して空き容量を作るか、別のディスクを使用してください。

ディレクトリの指定が違います.

▼指定したディレクトリが存在しないか、または不良です。

▽入力したディレクトリ名を調べ、正しいディレクトリ名を入力してください。

ディレクトリは作成できません.

▼ MKDIR コマンドで、指定したディレクトリが作成できません。指定した名前がすでにファイル名として使われているか、またはディスクに空き容量がありません。

▽ DIR コマンドでカレントディレクトリの内容を調べ、同じ名前のファイル名があれば別のディレクトリ名で指定します。ディスクの空き容量がなければ、不要なファイルを消去するか、別のディスクを使用してください。

デバイス名の指定が違います.

▼指定したデバイス名が正しくありません。

▽正しいデバイス名を指定してください。MS-DOS で標準に使用できるデバイスファイル名は〝CON〟〝NUL〟〝AUX〟〝PRN〟です。

パイプ処理用の中間ファイルを作成できませんでした.

▼ MS-DOS のパイプ処理では、パイプの前のコマンドの実行結果を中間ファイルにしてパイプの後ろのコマンドに渡し、コマンドの終了時に自動的に中間ファイルを削除しています。この中間ファイルがなんらかの原因で作成できませんでした。

▽中間ファイルはカレントドライブのカレントディレクトリに作成されるので、カレントドライブのディスクがライトプロテクトされていないかどうか、空き容量があるかどうかを調べてください。

パスの指定が違うか，ディレクトリでないか，またはディレクトリが空ではありません.

▼ RMDIR コマンドで指定したディレクトリ名のつづりがまちがっているか、指定したディレクトリの中にまだファイルやサブディレクトリが残っています。

▽消去しようとしたディレクトリのパス名を正しく指定してください。また、ディレクトリに〝.〟および〝..〟以外のファイルやディレクトリがあると、そのディレクトリは消去できません。ファイルやディレクトリをすべて消去してから、RMDIR コマンドを実行してください。

パスのドライブの指定が違います.

▼コマンド検索パスで設定されたドライブが存在しません。

▽コマンド検索パスに存在しないドライブを指定すると、コマンドを実行しようとしてコマンド検索パスを検索するたびにこのメッセージが出ます。PATH コマンドでコマンド検索パスを設定し直してください。

パスは定義されていません.

▼ PATH コマンドを実行したときに、コマンド検索パスがなにも設定されていないと表示されます。

▽ PATH コマンドでコマンド検索パスを設定してください。

バッチファイルを終了しますか <Y/N>?

▼バッチファイルを実行中に STOP キーや CTRL + C キーを押したとき表示されます。

▽バッチファイルの実行を中止する場合は Y キー(Yes)を、続行する場合は N キー(No)を押してください。いずれの場合も、CTRL + C キーを押したときに実行中だったコマンドの処理結果は保証されません。

バッチファイルのあるディスクをドライブに差込み,
準備ができたらどれかキーを押してください...

▼実行中のバッチファイルが入っていたフロッピィディスクが、ドライブにありません。バッチ処理の進行中にフロッピィディスクを入れ替えたりすると、このメッセージが表示されます。

▽バッチファイルの入っているフロッピィディスクを元のドライブに挿入し直してから、どれかキー(スペースキーや ⏎ キーなど)を押してください。

パラメータがありません.

▼コマンドにパラメータを指定していません。

▽このエラーが発生するコマンドは、1つ以上のパラメータが必要です。コマンドの書式を調べ、正しいパラメータを指定してください。

日付の指定が違います.

▼ DATE コマンドで指定した日付の書式がちがいます。

▽正しい書式で日付を指定してください。

ファイルアロケーションテーブルが不良です, ドライブ〈ドライブ名〉

▼〈ドライブ名〉に挿入されたディスクが正しく初期化されていません。または、ディスクが MS-DOS 以外の OS のディスクです。

▽ RECOVER コマンドを実行してディスクを修復してください。それでも復旧できず、MS-DOS で使用したければ、MS-DOS で初期化し直してください。ただし、初期化すると現在の内容はすべて消えてしまいます。

ファイルが作れません.

▼新しいファイルをつくれませんでした。あるいは既存のファイルを新しい内容に置き替えることができませんでした。

▽既存のファイルにリードオンリー属性が設定されています。必要なら、なぜリードオンリー属性が設定されているのかを考えてから、リードオンリー属性を解除して置き替えてください。

〈ファイル名〉ファイルが見つかりません.

▼〈ファイル名〉で指定したファイルが見つかりません。

▽指定されたファイルが存在しているかどうか、またはファイル名が正確かどうかを調べてください。

ファイル名が重複しているか, またはファイルが見つかりません.

▼ RENAME コマンドで、指定した変更元ファイルが見つからないか、または変更先のファイル名のファイルがすでに存在しています。

▽ファイルが存在しているかどうか、またはファイル名のつづりを調べてください。

プログラムが大きすぎてメモリに入りません.

▼コマンドまたはアプリケーションの実行に必要な空きメモリ容量が不足しています。

▽メモリの増設が必要です。ただし、MS-DOS を再起動することにより、そのまま実行できることもあります。再起動してもなおこのメッセージが表示された場合は、メモリを増設してください。

文法が違います.

▼入力したコマンドの書式がまちがっています。

▽コマンドの書式が正しいかどうか調べてください。

メモリアロケーションエラーです.

▼ディスク中の MS-DOS のシステムファイルに問題があります。または、不良なコマンドを実行しています。

▽システムディスクが壊れています。オリジナルディスク、またはバックアップディスクから新しいシステムディスクを作成して、MS-DOS を起動し直してください。

ラベルが見つかりません.

▼バッチファイル中の GOTO コマンドで指定したラベルが、そのバッチファイル中に存在しません。

▽バッチファイル中のラベル名を確認してください。

付録 B
目的別索引

ここでは、MS-DOS の主なコマンドを、実行したい作業別にまとめてあります。各コマンドの詳細については、「第４章　コマンドリファレンス」、または別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

APPENDIX

MS-DOSの規則関連

● MS-DOSのファイル名の規約

(1) ファイル名は、半角(1バイト)文字で1～8文字です。
(2) 拡張子は、半角(1バイト)文字で1～3文字です。
(3) 拡張子の前には半角のピリオド"."を付けます。

●ファイル名に使用できる文字

ファイル名と拡張子に使用できる文字は次の通りです。

半角(1バイト)文字	アルファベット(A～Z)、数字(0～9)、半角カタカナ、記号 ($ & # % ' - @ _ ^ ( ) { } ~ !)
全角(2バイト)文字	すべての全角文字(ひらがな、カタカナ、漢字、アルファベット、記号など)

●ユーザーが使用できないファイル名

次のファイル名は、MS-DOSのデバイスファイル名として予約されているので、ユーザーは使用できません。

AUX　CON　PRN　NUL　CLOCK

●ワイルドカードの使い方

ワイルドカードを使うと、複数のファイル名を一度に表わすことができます。ワイルドカードには次の2種類があります。

?　任意の1文字を表わします。
*　任意の文字数の文字列を表わします。

(例1)　ファイル名に共通な文字を持つファイルを指定するには、

FILE1.TXT　FILE2.TXT　FILE3.TXT

上の3つのファイルは、?で次のように表わすことができます。

FILE?.TXT

ただし、"FILE10.TXT"をこれで表すことはできません。

APPENDIX B

（例2）　ファイル名が任意で拡張子を指定するには、

ABC.XXX　　DEF.XXX　　GHI.XXX

上の3つのファイルは、*で次のように表わすことができます。

*.XXX

（例3）　拡張子が任意でファイル名を指定するには、

NAME.TXT　　NAME.DOC　　NAME.DAT

上の3つのファイルは、*で次のように表わすことができます。

NAME.*

（例4）　すべてのファイルを指定するには、

.

とすると、すべてのファイルを表わすことができます。拡張子の有無は問いません。

●ドライブの指定

ドライブを指定するには、アルファベット1文字とコロン（：）を組み合わせて、〝A：〟、〝B：〟のように入力します。ドライブを指定するコマンドでドライブを指定しないと、カレントドライブとみなされます。

●カレントドライブの変更

カレントドライブをたとえばAからBに変更するなら、

A>B：［↵］

と入力します。するとプロンプトは次のように変わり、カレントドライブがBになったことが示されます。

B>

●階層ディレクトリ構造

MS-DOSのファイルは階層ディレクトリ構造によって管理されています。ディスクを初期化したときに自動的に作成されるディレクトリがルートディレクトリで、その下にサブディレクトリをつくることができます。また、サブディレクトリの下にさらにサブディレクトリをつくることもできます。ディレクトリ名に使用できる文字と文字数は、ファイル名の場合と同様です。

●パス名

階層ディレクトリ内のある特定のディレクトリを示すには、ルートディレクトリを起点にして、そのディレクトリまでのディレクトリ名を〝¥″記号で区切って並べます。これをパス名と呼びます。パス名は、最長64バイトまでです。

(例1)　サブディレクトリREPORTの下のディレクトリUSERを示します。

```
¥REPORT¥USER
```

また、ディレクトリ内のファイルを表わすには、そのディレクトリのパス名のあとにファイル名を、〝¥″記号で区切って並べます。

(例2)　例1のディレクトリUSERの中のファイルNAME.DATを示します。

```
¥REPORT¥USER¥NAME.DAT
```

●ディレクトリの作成

ディレクトリは、パス名を指定して、MKDIR(MD)コマンドで作成します。

(例)　カレントディレクトリの下にサブディレクトリREPORTを作成します。

```
MKDIR　REPORT　　または　　MD　REPORT
```

●ディレクトリの変更

ディレクトリの変更は、CHDIR(CD)コマンドでパス名を指定します。

(例)　カレントディレクトリを¥REPORT¥USERに変更します。

```
CHDIR　¥REPORT¥USER　　または　　CD　¥REPORT¥USER
```

APPENDIX B

●カレントディレクトリの表示

CHDIRコマンドでパス名を指定しないと、カレントディレクトリを表示します。

（例1）　カレントディレクトリがドライブAの¥REPORT¥USERのときに、

CHDIR

と入力すると、画面に次のように表示されます。

A：¥REPORT¥USER

また、ドライブ名だけを指定すると、指定したドライブのカレントディレクトリを表示します。

（例2）　上の例1で、

CHDIR　A：

と入力すると、画面に次のように表示されます。

A：¥REPORT¥USER

●ディレクトリ名の変更

ディレクトリ名の変更は、RENDIRコマンドでパス名を指定します。

（例）　ドライブAのディレクトリTESTの名前をDATAに変更します。

RENDIR　A：¥TEST ¥DATA

●ディレクトリの削除

ディレクトリの削除は、パス名を指定して、RMDIR(RD)コマンドを使います。ただし、指定したディレクトリ内にファイルやディレクトリがあると削除できません。ディレクトリを削除する場合には、その中のファイルやディレクトリをあらかじめ削除しておく必要があります。

（例）　ドライブBのディレクトリMEMOを削除します。

RMDIR　B：¥MEMO　　または　　RD　B：¥MEMO

ディスク関連

●ディスクの初期化

MS-DOSで使うフロッピィディスクや固定ディスク(光ディスク)は、使う前に、MS-DOSで使えるように初期化しなければなりません。この初期化はFORMATコマンドで行います。固定ディスク(光ディスク)を初期化するときは、/Hスイッチまたは/Eスイッチを指定します。

(例1)　ドライブBのフロッピィディスクを初期化します。

```
FORMAT　B:
```

(例2)　上の例1で、/Sスイッチを指定すると、ドライブBのフロッピィディスクの初期化後にシステムファイルを転送し、MS-DOSを起動できるディスク(システムディスク)を作成します。

```
FORMAT　B:/S
```

(例3)　上の例1で、/Vスイッチを指定すると、ドライブBのフロッピィディスクの初期化後にボリュームラベルを付けます。ボリュームラベルは1バイト文字の場合11文字、2バイト文字の場合は5文字以内です。

```
FORMAT　B:/V
```

(例4)　上の例1で、/9スイッチを指定すると、ドライブBのフロッピィディスクを1トラックあたり9セクタで初期化します。ただしこの指定は、2DDタイプのフロッピィディスクに対してのみ有効です。

```
FORMAT　B:/9
```

(例5)　固定ディスクを初期化します(ドライブ名の指定は無効です)。

```
FORMAT　/H
```

APPENDIX B

●ディスクのバックアップ

ディスクのバックアップを行うには、ディスクの種類に応じて、次のような方法があります。

(1)フロッピィディスクのバックアップ

フロッピィディスクのバックアップを行うには、DISKCOPY コマンドを使います。このとき、受け側のディスクが初期化されていなければ、初期化も実行されます。

(例)　ドライブ A にあるフロッピィディスクのバックアップをドライブ B にあるディスクに作成します。

```
DISKCOPY　A：　B：
```

(2)固定ディスクのバックアップ

固定ディスクのバックアップには、BACKUP コマンドか HDUTL コマンドを使います。

① BACKUP コマンド

固定ディスクからフロッピィディスクに、1 つ以上のファイルのバックアップを行います。このとき、/A スイッチを指定しないと、受け側のディスクにあるファイルはすべて削除されます。

(例 1)　ドライブ A のディレクトリ SAMPLE にあるファイルをすべてドライブ B にバックアップします。

```
BACKUP　A：¥SAMPLE　B：
```

(例 2)　上の例 1 で、/S スイッチを指定すると、ディレクトリ SAMPLE のサブディレクトリ内のファイルも含めてドライブ B にバックアップします。

```
BACKUP　A：¥SAMPLE　B：/S
```

(例 3)　上の例 2 で、/A スイッチを指定すると、ドライブ B のディスクにディレクトリ SAMPLE 内のファイルが追加されます(ドライブ B のディスクのもとの内容は削除されません)。

```
BACKUP　A：¥SAMPLE　B：/A　/S
```

APPENDIX B

② HDUTL コマンド

同じタイプ(同容量、同インターフェイス)の2つの固定ディスク間で、装置全体をコピーするのに使用できます。HDUTL コマンドで固定ディスクをバックアップするには、

```
HDUTL
```

と入力して HDUTL コマンドのメニュー画面を表示させ、"ディスクのボリュームコピー"を選択します。

●ディスクの状態を調べる

ファイルおよびディスクの状態を調べるには、ドライブを指定して、CHKDSK コマンドを使います。指定したドライブ内のファイルやディレクトリ情報に誤りや矛盾があればエラーメッセージが表示されます。なければドライブの使用可能領域の容量などが表示されます。

(例1)　ドライブBの状態を調べます。

```
CHKDSK　B：
```

(例2)　上の例1で、/F スイッチを指定すると、ドライブBに論理エラーが発見された場合に自動的に修復が行われます。

```
CHKDSK　B：/F
```

APPENDIX B

ファイル関連

●ディレクトリ情報の表示

ディレクトリ内にあるファイル名を表示するには、DIRコマンドを使います。ファイル名の指定にワイルドカードを使うことができます。

(例1)　カレントドライブにあるすべてのファイルを表示します。

```
DIR
```

(例2)　カレントドライブにあるADDRESSという名前のファイルを表示します。

```
DIR　ADDRESS
```

(例3)　ドライブBにある、ファイル名がPHONEで、拡張子が任意のファイルを表示します。

```
DIR　B：PHONE.*
```

(例4)　ドライブBにある、ファイル名が任意で、拡張子がTXTのファイルを表示します。

```
DIR　B：*.TXT
```

(例5)　上の例1で、/Pスイッチを指定すると、カレントドライブのすべてのファイルを1画面分ずつ区切って表示します。

```
DIR　/P
```

(例6)　上の例1で、/Wスイッチを指定すると、カレントドライブのすべてのファイルのファイル名だけを表示します(ワイドディスプレイ)。

```
DIR　/W
```

(例7)　ドライブBにある、ファイル名にFILEという文字を持つファイルのファイル名だけを表示します。

```
DIR　B：FILE　/B
```

(例8)　カレントドライブの内容に関する情報をプリンタに出力します。

```
DIR　>　PRN
```

●ファイル名の変更

ファイル名を変更するには、ファイル名を指定して、RENAME(REN)コマンドを使います。ファイル名の指定にワイルドカードを使うことができます。

(例1)　ドライブBのファイルTEST.TXTの名前をSCORE.DATに変更します。

```
RENAME  TEST.TXT  SCORE.DAT
または
REN  TEST.TXT  SCORE.DAT
```

(例2)　カレントドライブで、拡張子がTXTのファイルをすべて、ファイル名は元のままで拡張子だけをDATに変更します。

```
RENAME  *.TXT  *.DAT    または    REN  *.TXT  *.DAT
```

(例3)　カレントドライブで、ファイル名がSTEPで拡張子が任意のファイルをすべて、拡張子は元のままでファイル名だけをCHAPに変更します。

```
RENAME  STEP.*  CHAP.*    または    REN  STEP.*  CHAP.*
```

●ファイルのコピー

ファイルをコピーするには、ファイル名を指定して、COPYコマンドを使います。ファイル名の指定にワイルドカードを使うことができます。

(例1)　カレントドライブのファイルMEMO.TXTを、同一ドライブのファイルPAD.TXTにコピーします。

```
COPY  MEMO.TXT  PAD.TXT
```

(例2)　上の例1で、コピー先をドライブBにしたいときは、次のように指定します。

```
COPY  MEMO.TXT  B:PAD.TXT
```

(例3)　上の例1で、/Vスイッチを指定すると、コピーとともに書き込みが正しく行われたかどうかもチェックします。

```
COPY  MEMO.TXT  PAD.TXT  /V
```

(例4)　カレントドライブの拡張子がDATのファイルをすべて、ドライブBにコピーします。

```
COPY  *.DAT  B:
```

APPENDIX B

(例5)　ドライブAのファイルをすべてドライブBにコピーします。

```
COPY A：*.*　B：
```

(例6)　カレントドライブのファイルREPORTをディレクトリ¥DOCにコピーします。

```
COPY　REPORT　¥DOC
```

●ディレクトリの全ファイルのコピー

COPYコマンドで、ディレクトリにある全ファイルのコピーもできます。

(例1)　ディレクトリ¥ADDRESSのすべてのファイルをカレントディレクトリにコピーします。

```
COPY　¥ADDRESS
```

(例2)　ディレクトリ¥PHONEのすべてのファイルをディレクトリ¥NUMBERにコピーします。

```
COPY　¥PHONE　¥NUMBER
```

(例3)　カレントドライブのディレクトリ¥ZIPにあるすべてのファイルを、ドライブBのディレクトリ¥NUMBERにコピーします。

```
COPY　¥ZIP　B：¥NUMBER
```

●ファイルの連結

COPYコマンドで、ファイルを連結することができます。

(例1)　カレントドライブの拡張子がBAKのファイルを連結して、ドライブBのファイルBACKUPにコピーします。コピーされる順序は、DIRコマンドで表示される順です。

```
COPY　*.BAK　B：BACKUP
```

(例2)　ファイルPHONEとファイルZIPを連結して、ファイルADDRESSにコピーします。

```
COPY　PHONE+ZIP　ADDRESS
```

●ファイルの削除

ファイルの削除には、ファイル名を指定して、DEL(ERASE)コマンドを使います。ファイル名の指定にはワイルドカードが使えます。また、/Pスイッチを指定すると、指定したファイルを削除するかどうか確認を求めてきます。

(例1)　ドライブAのファイルNOTEを削除します。

```
DEL　A：NOTE
```

(例2)　カレントドライブの拡張子がBAKのファイルをすべて削除します。

```
DEL　*.BAK
```

(例3)　カレントドライブのすべてのファイルを削除します。

```
DEL　*.*
```

この操作は危険なので、確認のメッセージが表示されます。

●削除追跡情報の記録

MIRRORコマンドを使うと、ファイルを削除したときにその追跡情報をファイルとして保存しておくことができます。UNDELETEコマンドはファイルを復旧するときに、この削除追跡情報を参照します。MIRRORコマンドで削除追跡情報を保存しておくと、誤ってファイルを削除してしまったときに、UNDELETEコマンドでそのファイルを復旧することができます。

(例)　ドライブAの削除追跡情報を、ドライブAに記録します。

```
MIRROR　/TA
```

●削除したファイルの復旧

UNDELETEコマンドを使うと、DELコマンドで削除したファイルを復旧することができます。UNDELETEコマンドを起動すると、削除追跡ファイル内に記録されているファイルが1つずつ表示され、復旧するかどうかの確認を求めてきます。削除追跡ファイルがない場合は、ファイル名の最初の1文字を指定すると、その文字で始まるファイル名を1つずつ表示し、確認しながら復旧します。

(例1)　カレントドライブのカレントディレクトリにあったファイルを復旧します。

```
UNDELETE
```

（例2）　上の例1で、/LIST スイッチを指定すると、カレントドライブのカレントディレクトリで、その時点で復旧できるファイルを表示します。ファイルの復旧は行われません。

UNDELETE　/LIST

（例3）　上の例1で、/ALL スイッチを指定すると、カレントドライブのカレントディレクトリで復旧できるファイルを、確認せずに復旧します。

UNDELETE　/ALL

●ファイルの内容の表示

ファイルの内容を表示するには、ファイル名を指定して、TYPE コマンドを使います。内容の変更はできません。また、バイナリファイルは正常に表示されません。

（例）　カレントドライブの README.DOC ファイルの内容を表示します。

TYPE　README.DOC

●長さが1画面を超えるような長いファイルを1画面分ずつ表示する

TYPE コマンドはファイルの中身を一度に表示してしまうので、長いファイルだと内容を目で確認することができません。このような場合は MORE コマンドを使います。MORE コマンドは TYPE コマンドとちがい、ファイルを1画面分ずつ表示します。

（例）　カレントドライブの README.DOC ファイルの内容を、1画面分ずつ表示します。

MORE　<　README.DOC

●ファイルの内容をプリンタに出力する

ファイルの内容をプリンタで印刷するには、ファイル名を指定して、PRINT コマンドを使います。また、TYPE コマンドでも">　PRN"を指定すれば、プリンタに出力することができます。

（例1）　ファイル README.DOC をプリンタで印刷します。

PRINT　README.DOC

（例2）　上の例1を TYPE コマンドで実行します。

TYPE　README.DOC　>　PRN

その他

●コマンド検索パスの設定

PATHコマンドでパス名を指定すると、外部コマンドを探すディレクトリをカレントディレクトリ以外に設定することができます。このとき、パス名をセミコロン(；)で区切って、複数のパスを設定することができます。

(例)　外部コマンドを、ドライブAのルートディレクトリとディレクトリ¥BINと¥WORDの3つのディレクトリから探すように設定します。

```
PATH　A：¥；A：¥BIN；A：¥WORD
```

●コマンドプロンプトの設定・変更

MS-DOSのプロンプト(たとえばA>)は、PROMPTコマンドで変更することができます。プロンプトに指定できる文字については、「第4章　コマンドリファレンス」のPROMPTコマンドの説明を参照してください。

(例)　コマンドプロンプトを、カレントドライブとカレントディレクトリのあとに不等号の">"を付けたものにします。

```
PROMPT　$P$G
```

●バッチファイルについて

バッチ処理で実行される一連のコマンドを納めたファイルをバッチファイルといいます。バッチファイルの拡張子は必ず"BAT"です。

(例)　ABC.BAT

●バッチファイルの作成・変更

バッチファイルはテキストエディタやワードプロセッサで作成・変更できます。バッチファイルの各行には、実際にキーボードから各コマンドを入力するときと同じものを書きます。

(例)　ドライブAのディスクのバックアップをドライブBに作成するバッチファイルです。

```
@ECHO　OFF
DISKCOPY　A：　B：　/P
```

●バッチファイルの実行
バッチファイルを実行するには、そのバッチファイルのファイル名を入力します(拡張子は省略できます)。

(例)　バッチファイル ABC.BAT を実行するには、次のように入力します。

```
ABC
```

●バッチファイルの実行の中止
バッチファイルの実行を途中で中止するときは、キーボードから CTRL ＋ C キーを押すか、または STOP キーを押します。

● AUTOEXEC.BAT ファイルについて
AUTOEXEC.BAT というファイル名は、MS-DOS の起動と同時に実行される特別なバッチファイル名として予約されています。

● CONFIG.SYS ファイルについて
CONFIG.SYS ファイルは、MS-DOS の起動時に、使用するシステムの構成を指定するための情報を納めたファイルです。CONFIG.SYS ファイルには次に関する情報が納められています。

①デバイスドライバの登録
②同時にオープンできる最大ファイル数の設定
③ディスクバッファのサイズの設定
④ COMMAND.COM の再読み込みパスの指定

● CONFIG.SYS の作成・変更
CONFIG.SYS ファイルは、バッチファイルと同様、エディタやワードプロセッサで作成・変更することができます。また、CUSTOM コマンドを使うと、メニュー選択画面で作成・変更することができます。

●デバイスドライバの登録
デバイスドライバの登録には、CONFIG.SYS ファイル内で、DEVICE コマンドを使ってデバイスドライバのファイル名を指定します。

(例)　マウスドライバを登録します。

```
DEVICE＝MOUSE.SYS
```

●同時にオープンできる最大ファイル数の設定

プログラムが同時に使うことができるファイル数は、CONFIG.SYSファイル内で、FCBSコマンドかFILESコマンドを使って設定します。どちらのコマンドを使うかは、使用するアプリケーションのマニュアルを参照してください。

（例）　ファイル数を10個に設定します。

FCBS＝10　　または　　FILES＝10

●ディスクバッファのサイズの設定

ディスクのアクセスが遅い場合、ディスクバッファ（ディスクをアクセスする際にデータを一時的に保存するメモリ領域）の容量を大きくすると処理が速くなることがあります。ディスクバッファの容量を指定するには、CONFIG.SYS内で、BUFFERSコマンドを使います。

（例）　BUFFERS＝10

付録 C
用語集

ここでは、「MS-DOS 5.0 基本機能セット」に添付されたマニュアルでよく使われている専門用語を解説します。

APPENDIX

用語は、英数字はアルファベット順に、その他は読みのあいうえお順に並べてあります。

本文中の〝→半角文字〟のような表記は、用語集の中で関係する事項が解説されている箇所を示しています。

▼英数字

1バイトコード文字、2バイトコード文字、2バイト半角文字

コンピュータでは、すべての文字が〝コード〟に変換されて処理されます。〝1バイトコード文字〟はコードに変換したときに1バイトの情報量で表わされる文字のことです。キーボードからふつうに入力した英数字文字が、1バイトコード文字です。

〝2バイトコード文字〟は、コードに変換したときに2バイトの情報量で表わされる文字です。日本語処理機能によって入力した文字(漢字、ひらがななど)は、2バイトコード文字です。

〝2バイト半角文字〟については、〝半角文字〟の項を参照してください。

→半角文字、全角文字

AIかな漢字変換

コンピュータで日本語を入力するための、かな漢字変換方式の一つ。ローマ字やカナで入力した読みを、簡単な操作で漢字かな混じり文に変換することができます。AI変換機能とAI辞書を併用することにより、効率のよいかな漢字変換が可能です。

AIかな漢字変換は、MS-DOSのCONFIG.SYSファイルまたはADDDRVコマンドでAIかな漢字変換ドライバを組み込むことによって使用できるようになります。

AUTOEXEC.BATファイル

MS-DOSの起動時に自動的に実行される、特別なバッチファイル。AUTOEXEC.BATファイルを使えば、MS-DOSの起動と同時に希望の操作環境を設定したり、特定のプログラムを自動実行したりできます。

CONFIG.SYSファイル

MS-DOSの起動時に自動的に参照される、環境設定用の特別なファイル。MS-DOSの操作環境を決定する働きがあります。MS-DOSの起動と同時に組み込みたいデバイスドライバを組み込んだり、同時にオープンできるファイルの数、コマンドプロセッサ(COMMAND.COM)の位置などを指定することができます。

CPU（Central Processing Unitの略）

コンピュータの中心となる部分。ソフトウェアからの命令を解析したり、メモリやディスクなどの周辺装置を制御したりします。

EMB（Extended Memory Blockの略）

拡張メモリのうち、XMSドライバで確保されたメモリからHMAを除いた部分。

→HMA

EMS（Expanded Memory Specification の略）

MS-DOSから使用できるコンピュータのメモリ容量を増やすための一方式。最初に提唱した企業の頭文字をとって〝LIM EMS〟などともいわれます。MS-DOS 5.0では、LIM EMS規格のバージョン4.0に準拠した方式のEMSメモリを使用できます。

EMSメモリは、本来ならばMS-DOSの管理外にあたる1Mバイトより高位に増設したメモリ（拡張メモリ）を使います。EMSメモリをあつかうデバイスドライバ（EMSドライバ）を組み込むと、1Mバイトまでの範囲（メインメモリ）に「ページフレーム」と呼ばれる覗き窓を設け、MS-DOSやアプリケーションはページフレームを介してEMSメモリに読み書きします。

コンピュータのCPUの種類や増設メモリの種類によって、EMSメモリにアクセスする方式やEMSドライバが異なります。

386以上のCPUを使用する場合は、XMSメモリに割り当てられたメモリをEMSメモリとしてエミュレートするEMM386.EXE（仮想8086モード用EMSドライバ）を使用した方がよいでしょう。80286以下のCPUを使用している場合は、EMM.SYS（汎用EMSドライバ）を使用します。

→XMS、拡張メモリ

FEP（Front End Processor の略）

コンピュータのうち、もっともユーザーに近い側で特別な処理をするプログラムの一般的な呼び方。

パソコンでは、日本語を入力するのにどうしても必要な「かな漢字変換」処理をするためのかな漢字変換ドライバを特にFEPと呼ぶことが多いようです。

→かな漢字変換ドライバ

HMA（High Memory Area の略）

XMSメモリのうちの、最初の約64Kバイトの領域。拡張メモリが1Mバイト以上あってCPUが80286以上の機種で、XMSドライバを組み込んだときに使えるようになります。「ハイメモリ領域」ともいいます。特定のアプリケーションだけが利用できます。

→XMS、拡張メモリ

HIMEM.SYS

MS-DOS 5.0やWindows 3.0に付属しているXMSドライバのファイル名。

→XMS

RAM（Random Access Memory の略）、RAMディスク、RAMドライブ

コンピュータの部品の1つで、データやプログラムなどを記録しておく部分。RAMには自由に情報を読み書きすることができますが、一般に電源が切断されるとその内容は消去されます。

「RAMディスク」は、RAMの読み書きの高速性を生かして、RAMの一部をディスクドライブと同じように使えるようにしたものです。CONFIG.SYSファイルでRAMディスクドライバを組み込んで利用します。ただしメモリは電源がないと記憶内容を保てないので、コンピュータの電源を切る前にRAMディスクの内容を消えない媒体（固定ディスクなど）に保管しておく必要があります。

「RAMドライブ」はRAMディスクと同じ意味です。電源を切っても記憶が消えないように電池でバックアップされているので、フロッピィディスクと同様にあつかうことができます。 →ROM、メモリ

ROM (Read Only Memoryの略)

コンピュータの部品の1つで、データやプログラムなどを記録しておく部分。RAMとのちがいは、あらかじめ情報が書き込まれて出荷されていること、読み出し専用で書き込みができないこと、電源を切っても記憶内容がなくならないこと、などです。

→RAM、メモリ

RS-232Cインターフェイス

コンピュータと外部装置をつなぐ通信のためのインターフェイスの規格名。やり取りする情報を、1ビットずつ連続して転送(シリアル転送)するところに特徴があります。パーソナルコンピュータの外部インターフェイスの標準規格として広く採用され、コンピュータと一部のプリンタ、コンピュータとモデムなどを接続するのに使われています。

情報を転送する速度(通信速度)は、1秒に何ビットを転送したかで表現するのが一般的です。

SASI (Shugart Associates System Interfaceの略)、SCSI (Small Computer System Interfaceの略)

いずれも、コンピュータと外部装置(特に固定ディスク装置)を接続するインターフェイスの規格名です。

SASIは、米国シュガート社が開発したパソコン用磁気ディスクの規格です。

SCSIは、1986年にANSI(アメリカ規格協会)が制定したパーソナルコンピュータと周辺装置を接続するための規格です。固定ディスクのインターフェイスとして使用される他に、CD-ROM、光ディスク、プリンタ、イメージスキャナなどの入出力装置に対して使用できる汎用インターフェイスとしても用いられます。

SMARTDrive

→固定ディスクキャッシュ

UMB (Upper Memory Blockの略)

メインメモリのうち、640Kバイト以上1Mバイト以下の間。この領域は本来、画面表示用のメモリ(グラフィックRAM)やEMSのページフレームなど、システムが専用に使うことになっています。UMBは、ここに仮想的にEMBの範囲のメモリを割り当ててMS-DOSのシステムファイルなどの置き場に使う機能です。割り当て機能には386以上のCPUがもつ「仮想アドレス機能」を使うので、UMBは386以上のCPUを搭載した機種でしか使えません。

→CPU、EMB、EMS、XMS、拡張ファイル、システムファイル、ページフレーム

XMS（eXtended Memory Specificationの略）

MS-DOSから使用できるコンピュータのメモリ容量を増やすための一方式。XMSメモリは、本来ならばMS-DOSの管理外にあたる1Mバイトより高位に増設されたメモリ（拡張メモリ）を利用し、CONFIG.SYSファイルでXMSドライバ（HIMEM.SYS）を組み込んで使用できるようにします。

XMSメモリがEMSメモリと異なる点は、ページフレームなどのような機構を設けないでCPUが直接1Mバイト以上のメモリにアクセスする点です。したがって、1Mバイト以上のメモリにアクセスできる機能を持つ80286以上のCPUでなければ、XMSメモリは使用できません。

MS-DOS 5.0では、XMSドライバを組み込むことによって、HMAやEMBなどのXMSメモリを使えるようになります。

→EMB、EMS、HMA、拡張メモリ、ページフレーム

▼あ行

アイコン

アプリケーションの機能やファイルの内容を、絵柄で表現したものです。MS-DOS 5.0のDOSシェルでは、プログラムや文書ファイル、ディレクトリ、ドライブなどがアイコンで表現されます。その絵柄の実際の意味は、そのアイコンが置かれている場所とアイコンの形、アイコンの下に書かれている名前（アイコン名）で区別することができます。

アーカイブ属性

MS-DOS上のファイルやディレクトリが持っているファイル属性の一つ。ファイルを変更したり新しく作成したりするとファイルに付加される印です。

アーカイブ属性は、MS-DOSのBACKUPコマンドやXCOPYコマンドなどで参照できます。これらのコマンドで固定ディスクの内容を保管（バックアップ）するときにアーカイブ属性を解除しておくと、それ以後新しく作成されたり変更されたりしたファイルはアーカイブ属性が設定されるので、次のバックアップ時にバックアップするファイルの目印として使うことができるのです。ちなみに〝archive〟には、古文書を保管する保管所の意味があります。

アクセス（読み書き）

情報のやりとりをすること。特にコンピュータと周辺装置の間で、データのやりとりをすることを表わします。たとえばディスクを読み書きすれば「ディスクへのアクセス」、メモリを読み書きすれば「メモリをアクセスする」などと使います。

アスキーファイル

→テキストファイル

アプリケーション

ある特定の仕事をするために開発されたソフトウェアのことで、ワードプロセッサや表計算、ゲームなどのソフトウェアは、すべてアプリケーションです。「アプリケーションソフト」ともいいます。「プログラム」と同義で使うこともあります。

インストール

コンピュータやソフトウェアを使える状態にするための準備の総称。具体的には、特定のソフトウェア(ファイル)やハードウェアを決められた場所に装着して、システム(使用するコンピュータやソフトウェア)に装着したことを知らせて必要な設定をすることです。

インターフェイス

ソフトウェアとハードウェア同士、異なる種類のハードウェア同士など、互いに性質が異なるものをつなぐ接点となる境界部分の総称。コンピュータと外部機器をつなぐ接点となる部品やソフトウェア、人間とコンピュータの間を取り持つハードウェアやソフトウェアがインターフェイスです。

たとえば、〝プリンタインターフェイス〟とは、コンピュータ本体とプリンタをつなぐ回路やコネクタなどと、プリンタを制御するプログラムを指します。

エディタ

ファイルの内容を編集(内容を追加したり変更したり削除したりすること)する道具となるソフトウェア。テキストファイルを編集するのが「テキストエディタ」。

MS-DOS 5.0では、古くからある〝EDLIN〟の他に、画面全体で編集できるスクリーンエディタである〝sedit〟が添付されています。

親ディレクトリ

階層ディレクトリ構造で、あるディレクトリの1階層上のディレクトリのこと。たとえば、〝¥ETC〟の親ディレクトリは、ルートディレクトリ(¥)です。MS-DOSでは、カレントディレクトリの親ディレクトリを〝..〟で表わすことができます。

→階層ディレクトリ構造

オンラインヘルプ

何かを実行中にその場で画面に表示する、その操作方法などを説明したヘルプメッセージのこと。

MS-DOS 5.0のDOSシェルでは、オンラインヘルプ機能によって操作方法や機能の意味や特徴などのさまざまな情報を画面に表示することができます。

コマンドプロンプトからは、〝/?〟スイッチを指定すればすべてのコマンドのヘルプ画面を表示することができます。

▼か行

階層ディレクトリ構造

ファイルを整理して登録、管理するための工夫の1つ。ディレクトリを複数持つことによって、ファイルを分類して管理することができます。

MS-DOSでは、複数のディレクトリがビルのような階層を形成します。このため、こうしたディレクトリ構造を「階層ディレクトリ構造」と呼びます。「ツリー構造」ということもあります。

→ディレクトリ

外部コマンド

ふだんはプログラムファイルの形でディスクに収められており、必要に応じてメモリに読み込まれて実行されるコマンド。外部コマンドのプログラムファイルには、〝COM〞、〝EXE〞などの拡張子が付いています。

→拡張子、内部コマンド

隠しファイル属性

MS-DOS上のファイルやディレクトリが持っているファイル属性の一つ。ATTRIBコマンドで設定/解除します。

隠しファイル属性が設定されているファイルは、DIRコマンドでは〝/AH〞スイッチを指定しない限り表示できません。また、DELコマンドでは削除できません。

拡張子

ファイル名の一部。ファイル名に拡張子を付けるには、ファイル名本体と拡張子の間をピリオド(.)で区切ります。拡張子は3文字以内で、おもにファイルの種類を判別するために使用します。

拡張メモリ

アドレス1Mバイトよりも高位にあるメモリの総称。MS-DOSの本来の機能ではアクセスできません。CONFIG.SYSファイルでXMSドライバやEMSドライバを登録して初めて使えるようになります。

かな漢字変換、かな漢字変換ドライバ

コンピュータで日本語を入力するときに、キーボードからローマ字やカナ文字で入力した読みを漢字に変換すること。そのような機能を持ったデバイスドライバをかな漢字変換ドライバと呼びます。MS-DOS 5.0には標準のかな漢字変換システムとして「AIかな漢字変換システム」が添付されています。

カレント

操作の対象になっているもののこと。ディレクトリの階層構造の中でディレクトリの移動によってたどり着いた現在のディレクトリを「カレントディレクトリ」、複数あるドライブのうちで現在のドライブを「カレントドライブ」などと呼びます。

MS-DOSは、特にディレクトリを指定せずにコマンドを実行すると、カレントドライブのカレントディレクトリを参照します。

また、カレントドライブはコマンドプロンプトに表示されます。たとえば、プロンプトが"B>"ならば、カレントドライブは"B"です。

間接入力

日本語処理で、まずガイドライン上で読みの入力や変換を行った後、画面上のカーソル位置に確定した文字を移す方法。　→直接入力

関連付け

データファイルの拡張子に着目して、ある特定の拡張子とアプリケーションとを結び付けること。関連付けを行ったデータファイルをDOSシェルで選択すると、関連付けられているアプリケーションがまず起動され、そのデータファイルがオープンされます。

記憶密度

フロッピィディスクなどの記憶容量を決める要素のひとつ。単密度(D)、倍密度(DD)、高密度(HD)などの種類があります。フロッピィディスクの記憶容量は、記憶密度とディスクサイズ(3.5インチ、5インチなど)と記憶形態(片面、両面など)で決定されます。

キャッシュ、キャッシュメモリ

→固定ディスクキャッシュ

クリック

マウスのボタンを1回だけ短く押す操作。ポイントしているものを選択するような場合に使います。

固定ディスク

ディスク装置の1種類。磁性体を付着させた金属の円盤にデータを記録します。フロッピィディスクのようにディスクを交換できないのでこう呼ばれます。固定ディスクはフロッピィディスクよりも高速に読み書きでき、かつ多くの情報を蓄えることができます。「ハードディスク」とも呼ばれます。

固定ディスクキャッシュ

メモリの助けを借りて固定ディスクに対する読み書きを高速化する仕組み。MS-DOS 5.0やWindows 3.0では、「SMARTDrive」という名前の固定ディスクキャッシュシステムが標準添付されています。MS-DOSでの作業はかなり頻繁にディスクを読み書きするので、これを高速化すれば全体の動作も高速化できることになります。

SMARTDriveは、コンピュータとディスクとの間に、特別に用意したメモリ(キャッシュメモリ)を介在させます。キャッシュメモリは、MS-DOSを起動するドライブのCONFIG.SYSファイルに固定ディスクキャッシュドライバ(SMARTDRV.SYS)を組み込んで確保します。

SMARTDriveは、ディスクからコンピュータに情報を読み込むときに、求められた情報だけでなくそのまわりの情報もキャッシュメモリ内に読み込んでおきます。情報はディスク内の連続した場所に書かれていることが多いので、次の情報はディスクをアクセスすることなくキャッシュメモリから読み込むことができます。メモリはディスクよりも高速に読み書きできるので、これで全体の動作が高速化できるわけです。

MS-DOS 5.0やWindows 3.0のSMARTDriveは、XMSメモリをキャッシュメモリとして使います。他のメモリ関係のドライバ——XMSドライバ(HIMEM.SYS)、仮想8086モード用EMSドライバ(EMM386.EXE)、RAMディスクドライバ(RAMDISK.SYS)など——とつねに協力して、システム全体がもっとも効率よく動作するよう、メモリの融通や配分ができるのが特徴です。　→XMS

コマンド検索パス

MS-DOSがコマンドを捜すディレクトリをあらかじめ指定したもの。コマンド検索パスは、PATHコマンドで設定します。

コマンドプロセッサ

MS-DOSで、入力されたコマンドを解釈して、求められたコマンドを実行する機能を持つソフトウェア。MS-DOSの標準のコマンドプロセッサは〝COMMAND.COM〞です。

コマンドプロンプト

MS-DOSのコマンドを直接実行するときに、MS-DOSがコマンドを待っていることを示す印です。この後にMS-DOSのコマンドをキーボードから入力します。単に「プロンプト」、または「MS-DOSのプロンプト」ともいいます。ふつう〝A>〞のような形をしていて、カレントドライブを示す文字(A、Bなど)と〝>〞記号でできています。

DOSシェルのSHIFT＋f･9キーの操作も、「コマンドプロンプト」と名付けられています。これは、この操作によってDOSシェルを一時的に抜け、コマンドプロンプトの状態に戻すからです。

▼さ行

サブディレクトリ

あるディレクトリの下に作成されたディレクトリ。ファイルを整理して管理するために用い、目的に応じてユーザーがつくることができます。　→ディレクトリ

辞書ファイル

日本語処理に必要な、漢字や熟語などの語句を収めたファイル。かな漢字変換機能は、この辞書を用いながら入力された読みがなを漢字に変換します。

→かな漢字変換機能

APPENDIX C

システム属性

MS-DOS上のファイルやディレクトリが持っているファイル属性の一つ。システムにとって不可欠なファイルであることを示します。ATTRIBコマンドで設定/解除します。

システムファイル属性が設定されているファイルは、DIRコマンドでは〝/AS″スイッチを指定しない限り表示できません。また、DELコマンドでは削除できません。

システムファイル

MS-DOSの中核となるファイル。MS-DOSのシステムファイルは、〝IO.SYS″、〝MSDOS.SYS″の2つです。MS-DOSを起動するためには、さらに〝COMMAND.COM″が必要です。

システム構築ファイル

MS-DOSの起動時に、デバイスドライバを組み込んだり、動作環境を設定したりするファイル。ファイル名は〝CONFIG.SYS″に決まっています。CONFIG.SYS内に、必要な情報を書き込むことにより、自分の環境を変更できます。

実行可能ファイル

MS-DOSで実行できるファイル。ファイル名を入力する(拡張子は省略できます)だけで実行できます。MS-DOSの実行可能ファイルは、拡張子が〝COM″〝EXE″〝BAT″でなければなりません。

周辺装置、周辺機器

コンピュータ本体以外の装置のこと。〝デバイス″ともいいます。具体的には、プリンタやディスクドライブ、ディスプレイなどを指します。MS-DOSでは、周辺装置をファイルとしてあつかうことができるようになっています(デバイスファイル)。

初期化

フロッピィディスクや固定ディスクなどの、読み書き可能な外部記憶媒体を、データを保管できる状態にすること。ディスクを初期化すると、内容が消えてしまいます。

書式

命令などの書き表わし方に関する規則。コマンドごとに書式が決まっています。

ショートカットキー

DOSシェルで、ごく簡単な操作でなんらかの機能を実行するためのキーの組み合わせ。たとえば[GRPH]＋[f･4]キーでDOSシェルを終了できます。

スクロール(バー、ボックス、矢印)

ウィンドウ内の表示内容を順次表示する方法。画面に表示しきれなかった部分を、次々に画面に表示することができます。画面の縦方向に表示を流して、いま表示されている内容の前後を見るスクロールを縦スクロールと呼びます(DOSシェルでは横スクロールはありません)。

DOSシェルでは、ウィンドウ内に表示できない部分があると「スクロールバー」と呼ばれるものが同時に表示されます。スクロールバー内には「スクロールボックス」と「スクロール矢印」があり、これらを使うことによってウィンドウ内の表示をスクロールさせることができます。

全角文字

漢字やひらがななど、通常入力できる英数字文字(半角文字)の倍の幅で表示される文字。全角文字はすべて2バイトコード文字です。→半角文字、2バイトコード文字

▼た行

タイトルバー

DOSシェルの最上部にある水平の棒。「MS-DOSシェル」と表示されています。

タスク

コンピュータ上で実行している一つ一つのプログラム(アプリケーション)のこと。

MS-DOS 5.0のDOSシェルやWindows 3.0では、複数のアプリケーションを動作させることができます。この一つ一つがタスクにあたり、タスクを切り替えて使用することを「タスクスイッチング」、動作中のタスクを「アクティブなタスク(またはフォアグラウンドのタスク)」といいます。→タスクスワップ

タスクスワップ

MS-DOS 5.0上で複数のタスクを実行して、それらを切り替えながら使う方法。またはその機能。→タスク

ダブルクリック

マウスのボタンをすばやく2回連続して押す操作。ポイントしている特定の操作対象をその場で発揮させるような場合に使います。→クリック

タブ、タブ文字、タブ位置

「タブ」は、同じ行内で決められた桁位置にカーソルを進めるしくみ。[TAB]キーを押すと「タブ文字」が入力され、「タブ位置」までカーソルが進みます。タブ位置は、通常半角計算で8桁ごとに設定されています。

タブ文字を使うと、1バイトで最大半角8文字分の空白を空けることができるので便利です。

APPENDIX C

直接入力

日本語処理で、画面上のカーソル位置に読みを入力して、そこで変換/確定する方法。

→間接入力

ディップスイッチ

コンピュータ本体や増設ボードなどで、ハードウェア的にさまざまな設定をするためのスイッチ。小さなスイッチなので、マニュアルでよく確認しながら慎重に設定する必要があります。

ディレクトリ

ディスクの中で、ファイルやサブディレクトリをまとめた集合体。ディスクにはただ一つの「ルートディレクトリ」があり、その下に複数のディレクトリを作成してファイルやそのまた下位のディレクトリを収めます。すべてのディレクトリはルートディレクトリのサブディレクトリであるといえるでしょう。

MS-DOSでは、ディレクトリを木(ツリー)状に重ねて階層ディレクトリ構造として、ファイルの効率的な管理を助けています。

ディレクトリ名

ディレクトリに付ける名前。ルートディレクトリ以外のサブディレクトリには、すべてディレクトリ名が必要です。名前の付け方はファイル名と同じですが、一般的には拡張子は付けません。

テキストファイル

人間が読める文字だけで構成されているファイル。文字ファイル、アスキーファイルなどともいいます。どの文字をどのコードに変換するかを定めた規格のJISやASCIIにしたがった文字だけを使って書かれたファイルです。

デバイス

→周辺装置

デバイスドライバ

デバイスを駆動させるためのソフトウェア。MS-DOSを使う上で必要最低限のデバイスドライバは、MS-DOSのシステムを起動するファイルに含まれています。そこに含まれていないデバイスドライバは、起動ドライブのCONFIG.SYSファイルか、またはADDDRVコマンドで組み込まなければ使用できません。

デバイスファイル名

MS-DOSでは、デバイスをファイルとしてあつかうことができるようになっており、それぞれにデバイスファイル名が用意されています。デバイスファイル名には、〝AUX〟〝CON〟〝PRN〟〝NUL〟〝CLOCK〟があり、これらの名前をディスクファイルのファイル名に使うことはできません。

デフォルト

暗黙に設定されている値、または暗黙に選択されている選択肢。特に値を指定しなかったときに選ばれます。

登録

DOS シェルで、アプリケーションを特定のグループに属させること。いったんいずれかのグループに登録したアプリケーションは、簡単に実行することができるようになります。

ドライブアイコン

DOS シェル上で、ディスクドライブを表わすアイコン。

ドライブ名

ディスクドライブ1台1台を指定するための名前。MS-DOS では、ドライブ名をそのドライブを表わすアルファベット1文字とコロン(：)で表現します。MS-DOS のほとんどのコマンドでは、ドライブ名の指定を省略するとカレントドライブが参照されます。

ドラッグ

マウスのボタンを押さえたままで、マウスを動かす操作。ポイントしているものを動かすような場合に使います。

▼な行

内部コマンド

つねにメモリに存在しており、MS-DOS のプロンプトが表示されていれば、いつでも実行することができるコマンド。COMMAND.COM 内にあります。

→外部コマンド

ネットワーク

コンピュータをケーブル(線)でつないでグループ化して、ディスクやプリンタを共有したり、データをやり取りしようとするしくみ。

ネットワーク上にあって共有されているディスクドライブを「ネットワークドライブ」、同じく共用のプリンタを「ネットワークプリンタ」と呼びます。

ノーマルモード

PC-9800 シリーズのコンピュータで、画面の解像度が横 640 ドット×縦 400 ドットであるようなモード。1台でノーマルモードとハイレゾリューションモードの両方に対応した機種もあります。

▼は行

バイト

コンピュータが情報をあつかうときの単位のひとつ。1バイトは8ビットからなります。ファイルの大きさ、ディスクに記憶できるデータの量、本体のメモリの量などを表わすのに用います。たとえば、半角英数字1文字を記憶するには1バイト分、漢字1文字はに2バイト分のメモリを必要とします。

数値が非常に大きくなる場合は、1024バイト(=2^{10})をまとめて〝K(キロ)〟、1024Kバイト(=2^{20})をまとめて〝M(メガ)〟のように表わします。〝1Mバイト〟のディスクには、アルファベットで約100万文字(漢字なら50万文字)の情報を記憶できます。

→ビット

バイナリファイル

機械にもっとも理解しやすい2進数(バイナリ)であるファイル。内容はプログラムのときもデータのときもあります。テキストファイルと異なり、内容を人間が直接読むことはできません。 →テキストファイル

パイプ機能

あるコマンドの出力(実行結果)を、自動的に次のコマンドの入力とするMS-DOSの機能。パイプ機能を使えば、中間の結果をファイルにしないでもコマンドからコマンドへデータを受け渡すことができます。

MS-DOSでパイプ機能を利用するときは、2つのコマンドの間にパイプ記号(|)を入れます。〝フィルタ〟と呼ぶ処理は、このパイプ機能を利用して行います。

→フィルタ

ハイメモリ領域

→ HMA

ハイレゾリューションモード

PC-9800シリーズのコンピュータで、画面の解像度が横1120ドット×縦750ドットであるようなモード。1台でノーマルモードとハイレゾリューションモードの両方に対応した機種もあります。

パス、パス名

階層ディレクトリ構造で、あるディレクトリから、ディレクトリのつながりを伝って、他のディレクトリに達するまでの経路。基点となるディレクトリから目的のディレクトリに達するまでの道順を、途中で通過するディレクトリ名を〝¥〟記号で区切りながら並べます。ルートディレクトリを起点とした経路を「絶対パス」、カレントディレクトリを起点とした経路を「相対パス」と呼びます。

また、パスを使って目的のファイルやディレクトリを指定する名前を「パス名」といいます。 →階層ディレクトリ構造

バックアップ

不慮の事故に備えて予備のシステムを作成したり、ディスクの内容のコピーをつくること。またはそうして作成したディスクのこと。

バックグラウンド

複数のタスクを処理をしているときの、現在アクティブでないタスクの状態。現在アクティブなタスクは「フォアグラウンド」であるといいます。

バッチ処理、バッチファイル

「バッチ処理」は、複数のコマンドを連続して実行する一連の処理のこと。「バッチファイル」は、バッチ処理の手順を記したファイル。

一定の順序で同じコマンドを何回も繰り返すことが多い処理(たとえば、プログラム開発や、特定のファイルのコピー)に利用すると、個々のコマンドを毎回キーボードから入力する手間がなくなります。

バッチファイルの拡張子には、必ず"BAT"にします。"AUTOEXEC.BAT"という名前のバッチファイルは、MS-DOSの起動時に自動的に実行されます。

半角文字

漢字やひらがななどの全角文字に対し、その半分の幅で表示される文字。半角文字には、1文字の記憶に1バイトのメモリ必要とする「1バイトコード文字」と、2バイトを必要とする「2バイトコード文字」があります。キーボードからふつうに入力した英数字や記号、カナ文字は、1バイトコードの半角文字です。

PC-9800シリーズには、2バイトコードの半角文字(2バイト半角文字)もあります。漢字やひらがなと同様に、日本語処理機能を利用して入力します。

→全角文字、1バイトコード文字、2バイトコード文字

ビット（BInary digiT の略）

2進数の1桁で、コンピュータがあつかう情報の最小単位です。1ビットで"0"と"1"の、2つの状態を表現できます。

標準入力、標準出力

デバイスやコマンドが、処理内容を入力したり処理結果を出力したりする先。MS-DOSの通常の状態では、標準入力はキーボードに、標準出力は画面になっています。パイプやリダイレクト機能は、これらを他のデバイスやファイルなどに切り替える働きをします。MS-DOSがUNIXの影響を大きく受けていることを示す点です。

→パイプ機能、リダイレクト機能

ファイル、ファイル名

文書やデータ、プログラムをディスク内に保管するときの単位。大きさと内容の表現は自由です。

コンピュータは、1つのプログラム、日本語ワードプロセッサで作成した1つの文書、ひとまとまりのデータなどを、それぞれ1つのファイルとして取りあつかいます。

ファイルに付ける名前を「ファイル名」といいます。ファイル名は前半(8文字以内)と後半(3文字以内)に分けることができ、ピリオド(.)で分割します。ファイル名の後半3文字はそのファイルの種類を表わすように付ける習慣になっていて、「拡張子」と呼びます。拡張子は省略できます。

ファイルを区別するため、ファイル名は重複してはいけません。ファイル名に、ドライブ名やパス名を付けたものも、広い意味でファイル名と呼びます。

また、MS-DOSでは、プリンタやディスプレイ画面などの装置もディスクのファイルと同様に操作できるようにして、操作性を高めています。

ファイル名拡張子

→拡張子

ファイル属性

ディスク内のファイルに設定された性質。MS-DOSのファイル属性には、〝アーカイブ属性〟、〝隠しファイル属性〟、〝システム属性〟、〝リードオンリー属性〟があります。これらのファイル属性は、ATTRIBコマンドで設定/解除します。

また、ボリュームラベルやディレクトリもファイルと同じようにあつかわれ、それぞれ〝ボリュームラベル属性〟、〝ディレクトリ属性〟が設定されています。

フィルタ

標準入力からのデータを加工して、標準出力に出力するようなコマンド。パイプ機能で他のコマンドと組み合わせて用います。データを加工しながら通す働きから、この名称があります。

入力をアルファベット順に並び替えて出力するSORTコマンド、入力を1画面ごとに区切って出力するMOREコマンド、入力の中から指定した文字列だけを出力するFINDコマンドが用意されています。

フォアグラウンド

複数のタスクを実行しているときの、現在アクティブなタスクの状態。フォアグラウンドでないタスクは「バックグラウンド」であるといいます。

フォーマット

→初期化

フロントエンドプロセッサ

→ FEP

プロンプト

→コマンドプロンプト

ページフレーム

EMS メモリを使うときに、メインメモリ内にとられる一定の大きさの領域。

ポイント

画面上で、これから操作しようとするものの上にマウスポインタを置く操作。その後クリックしたりダブルクリックしたり、ドラッグしたりします。

→クリック、ダブルクリック、ドラッグ

ボリュームラベル

ドライブに付ける名前。ドライブやディスクを区別するのに使う。FORMAT コマンドや LABEL コマンドで設定します。ボリュームラベルに付けられる文字数は、半角文字(1 バイトコード文字)で 11 文字以内です。

▼ま行

マウス

コンピュータの周辺装置(入力装置)の1つ。画面上をすばやく自由に動きまわり、ソフトウェアに位置の情報を入力するのに向いています。DOS シェルには最適です。形がねずみに似ていることからこの名前が付きました。

マウスポインタ

DOS シェルで、画面に表示されているものをマウスで操作するための目印。マウスを机上で移動させると、画面のマウスポインタが移動します。目的のものをポイントし、クリックするなどして目的の操作をします。「マウスカーソル」ともいいます。

メインメモリ

MS-DOS が管理できる範囲のメモリ。通常、0〜640K バイトまでの範囲のメモリを指します。

メモリ

コンピュータに使われている部品の1つ。データを記憶するのに使います。作業に必要なプログラムやデータは、いったんメモリに読み込まれてから使用されます。

部品としてのメモリには、〝ROM(読み出し専用メモリ)〟と〝RAM(書き込み可能なメモリ)〟の 2 種類がありますが、単に〝メモリ〟という場合には、RAM のことだけを指している場合があります。

→ RAM、ROM

APPENDIX C

▼や行

ユーティリティソフトウェア

ファイル変換プログラムやプリンタ出力プログラムのように、OSやプログラミング言語の働きを助けるような補助プログラムの総称。単に〝ユーティリティ〟ともいいます。

▼ら行

リダイレクト機能

標準入力や標準出力(通常のコマンド入出力先：キーボードとディスプレイ)を、ファイルや他のコマンドに切り替える機能。MS-DOSでは周辺装置もファイルとしてあつかえるので、たとえばDIRコマンドの出力先をファイルにしたり直接プリンタに送って印刷したりできます。

リードオンリー属性

MS-DOS上のファイルやディレクトリが持っているファイル属性の一つ。この属性を設定したファイルやディレクトリは、読み込むことはできるが、消したり変更したりすることができません。

リードオンリー属性は、ATTRIBコマンドで設定/解除できます。リードオンリー属性を設定したファイルやディレクトリは削除できません。

ルートディレクトリ

MS-DOSで初期化したすべてのディスクが、最初に1つだけ持っているディレクトリ。階層ディレクトリ構造の元となり、〝¥〟記号で表わされます。ルートディレクトリ以外のディレクトリは、すべてサブディレクトリです。

▼わ行

ワイルドカード文字

他の文字に置き替えて表現できるような文字。MS-DOSでは、クエスチョンマーク(?)は任意の1文字を、アスタリスク(*)は0文字以上の任意の複数の文字列を表現することができます。

たとえば、〝disk?.doc〟は、〝disk1.doc〟、〝disk4.doc〟などを表わします。〝disk*.doc〟は、〝disk.doc〟、〝disk3.doc〟、〝disk2-4.doc〟などを表わします。

索引

▼M

▼N

▼P

▼R

▼S

▼T

▼U

▼V

▼X

▼あ行

▼か行

▼さ行

▼た行

▼な行

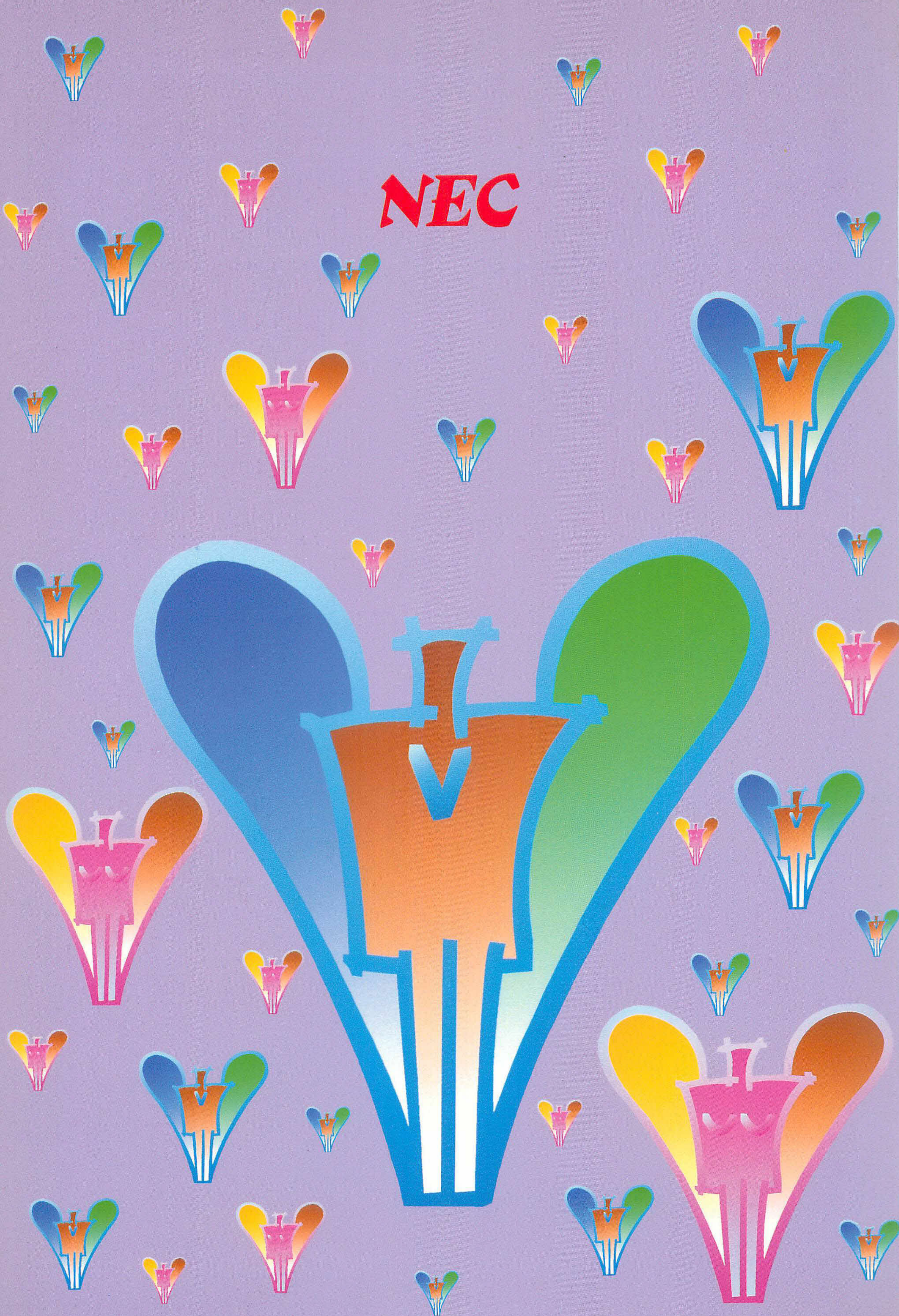
▼は行

▼ま行

▼や行

▼ら行

▼わ行


NEC